

平成 22 年度
修士論文

広域合併都市の縁辺部に住む親世帯の生活支援と中心部への通勤が可能な居住地という視点からみた居住地再配置のための条件に関する研究
-三重県津市・松阪市を対象にして-



指導教員 浦山 益郎 教授
松浦 健治郎 助教

三重大学大学院工学研究科
建築学専攻

鈴木 悠平

1 章	研究背景・目的	1
1-1	研究背景	2
1-2	研究の目的	3
1-3	既往研究のレビュー	4
1-4	研究方法	5
1-5	研究構成	8
2 章	津市の人口	9
2-1	津市・松坂市の人口	10
2-2	津市の人口動態	14
2-3	各地域の居住者の前住地	20
2-4	小結	24
3 章	勤務先の分析	25
3-1	世帯主および配偶者の職業	26
3-2	勤務先の立地	27
3-3	通勤時間	30
3-4	通勤手段	34
4 章	親世帯との関係	35
4-1	親の所在地	36
4-2	親世帯までの時間距離	41
4-3	親との交流頻度	45
4-4	親との交流目的	51
5 章	居住地選択の条件	57
5-1	居住地選択の条件の概要	58
5-2	親との時間距離と入居条件	60
5-3	職場との時間距離と入居条件	65
5-4	親と職場までの時間距離	70
5-5	小結	73

6 章 結論	74
6-1 時間距離と立地の関係	75
6-2 職場との関係	76
6-3 親との関係	76
6-4 縁辺部に住む親世帯の生活支援と中心部への通勤が可能な居住地という視点から見た居住地再配置のための条件	76
参考文献	78

付録-梗概

-アンケート票

謝辞

1 章 研究背景・目的

1-1 研究背景

1-2 研究の目的

1-3 既往研究のレビュー

1-4 研究方法

1-5 研究構成

1-1 研究背景

近年の都市を取り巻く状況は転換期にあると言える。2005 以降総人口は減少し続け、2035 年までに 1 億 1000 万人程度となる事が予測されている。一方高齢化率に着目すると、その数値は上昇し続け 2035 年には 35%を超える。

これまでの都市計画においては、人口増加を前提とした基盤整備や開発の誘導等が行われてきた。しかし日本の総人口は 2005 年をピークに減少局面を迎え、これまでの都市計画の大きな前提が変わりつつある。

このような危機的な状況を背景として、生産力の低下による国や地方自治体での財政的制約が高まっている。今後こうした財政面からも都市の効率的な運営が求められている。

一方、環境問題への意識の高まりからも効率的な都市の運営が求められている。モータリゼーションによる、極端な自動車への依存が特に地方で顕著であるが、こうしたことから都市構造が郊外へ拡散してきた。

以上のような背景から、社会資本整備審議会答申「新しい時代の都市計画はどうあるべきか」(第一次答申：2月1日)において、都市が無秩序に拡散してきた事を問題視し、都市構造改革が必要としている。この都市構造改革の方向とは、都市圏内の一定の地域を都市機能の集積を促進する拠点集、(約拠点)として位置付け、集約拠点と都市圏内のその他の地域を公共交通ネットワークで有機的に連携させる『集約型都市構造』の実現について言及された。

以上のように日本の都市計画の方向性として(地域にとってどのような都市構造が望ましいか、ということについては、地域の選択であって一律に提示すべきことではないとされているが)、効率的でコンパクトなまちづくりに舵がとられたといえる。

またもう一方で平成の大合併により 1999 年 3 月 31 日時点で 3232 の市町村が存在していたが、2010 年 3 月 31 日時点でその数は 1721 までに減少した*1。

またこの合併により、岐阜県高山市の面積が 2178km² というように広域な面積を持つ自治体が特に地方を中心に多く誕生した。このような都市では、農村地域を広く抱え、限界集落問題とともに地域経営の効率化等の問題を抱える。

以上より、これからの都市の課題として、ひとつ目に、より効率的な都市構造への改革、ふたつ目に、都市計画区域外にあるような農村地域においては高齢者の居住継続等の地域維持という大きく 2 つの点にあると言える。市町村合併により誕生した「広域合併都市」には都市計画区域外であるような農村的な地域が内包されている。一方で雇用の中心地となる都市中心部への通勤の都合上、生産年齢にある人々は都市部や通勤に便利な地域へ居住していることが考えられる。

また金ら*2によれば、近年の家族の形態は、別居していながらも家族としての機能を分散的に担うといういわゆる「ネットワーク居住」が行われているという報告がある。地方都市においては現代においてもこのような家族のネットワーク居住が残されていると考えられる。こうした良好なコミュニティは特に地方の広域合併都市において、都市計画区域外の農村的な地域における高齢者の居住継続において、家族が近くにいるという安心感として重要であると考えられる。

*1総務省 市町村合併資料 (<http://www.soumu.go.jp/gapei/gapei.html>)

*2金貞均、近江隆(1994)「現代家族の分散居住の実態と居住ネットワークの形成」日本建築学会計画系論文集 第 456 号 pp209-216

1-2 研究の目的

本研究は研究背景で述べた通り、広域合併によって内包することとなった農村地域の集約化という点に問題意識を持って取り組むものである。集約型都市構造における議論は、公共交通を中心とした集約拠点に都市機能（居住や交流）を集約化していく*3 というものが多い。このように集約拠点の条件としての議論には公共交通や、公共施設の分布といった議論は必要であると考えが、本研究では地方の広域合併都市の典型例として三重県津市を取り上げ、特に農村部に居住する親とのつながりと、通勤の関係に着目して、農村部の地域維持を図りながら都市を集約化していくために、今後の都市における郊外部の居住地をどのような条件の立地に配置していくべきかを考察していくことにある。具体的には以下の点を明らかにして行く。

- ① 職場まで通勤時間の実態から、職住関係の条件を明らかにすること
各世帯の世帯主、配偶者の職場との位置関係、特に通勤時間を明らかにしていく。また職住関係が居住地選択の条件としてどのように影響を与えるのかを明らかにしていく。
- ② 親子の居住ネットワークの実態を明らかにすること
親との交流頻度やその交流内容を分析していく。特に居住ネットワークが成立するための親子間の時間距離を明らかにし、縁辺部に居住する親との関係から立地を分析していく。
- ③ 上記二点の観点から、居住地として求められる条件提示を行うこと

*3 都市整備研究会編著 国土交通証都市・地域整備局監修『新しいまちづくりのための戦略的展開-集約型都市構造の実現に向けて』 大成出版社（2009）105 項

1-3 既往研究のレビュー

本研究では親子間のネットワーク居住に着目して研究を進めていく。ネットワーク居住とは、家族と認識する範囲において、一戸の単位で分散している家族が本来の家族としての機能と住居の機能を果たすために大きな単位で結合していくシステムである。以下の研究は分散して居住している家族がどのような形で分散しているかを類型化し、その相互補助の関係を指摘している。

金貞均、近江隆（1994）「現代家族の分散居住の実態と居住ネットワークの形成」日本建築学会計画系論文集 第 456 号 pp209-216

近江隆、金貞均、小倉啓太（1995）「ネットワーク居住の成立と住機能の変化」日本建築学会計画系論文集 第 468 号 pp161-169

また上記のネットワーク居住の概念を応用的に用いて様々な都市でのネットワーク居住の成立とその地域や地区の特性が報告されている。

山下真希、馬場麻衣、宮原知紗、桜井康宏（2006）「ネットワーク居住の視点からみた福井市郊外住宅団地の居住者特性」日本都市計画学会 都市計画論文集 No 41-3 pp659-664

中園真人、小峰裕、岩本慎二、佐藤隆雄、山田美由紀（1999）「都市近郊農村地域における居住ネットワーク論」山口大学工学部研究報告 Vol. 50 pp77-84

中本裕美子、重村力、山崎寿一、浅井保（2002）「都市における現代家族のネットワーク居住の実態とその住まい方」日本建築学会近畿支部 研究報告集 pp305-330

また本研究で着目する親子の居住関係に着目したものとして、遠隔郊外住宅地の問題点を指摘した以下の研究がある

今井範子、伊藤理恵（2006）「親子の居住形態からみた遠隔郊外居住地の問題点」日本家政学会誌 Vol.57 pp761-774

本研究は、確実に家族であると認識しうる範囲だと考えられる親子間に着目し、市町村合併により広域な市域を持つことになった都市に内包される農村部に居住する親との居住ネットワークの成立と、職場との位置関係から今後の都市構造の再編に伴う居住地の再配置において、都市のどのような立地が適しているかを考察する点が特徴となっている。

1-4 研究方法

1-4-1 研究対象都市

本研究では、地方の広域合併を行った都市の事例として三重県津市・松坂市を取り上げた。図1-1に津・松坂市の位置を表している。津市・松坂市は県中央部に立地しており、津市は三重県の県庁所在地となっており、三重県の中心的な都市の一つである。

1-4-2 合併状況について

表211に合併状況をまとめ、図1-2に旧市町村と合併後の行政界を示した。津市は2006年に周辺10市町村と合併した。面積711km²、人口28万8千人となった。また松坂市も2005年に周辺4市町村が合併し、面積627km²、人口16万9千人の都市となった。図1-1と図1-2に示したように津市、松坂市ともに広域な面積を持ち、市域東部の伊勢湾に面した海岸線から、市域西部は奈良県との県境までを含む都市となっている。

津市、松坂市ともに、旧市部（旧津市、旧久居市、旧松坂市）がそれぞれ地域の中心的な地域となっている。

表1-1 合併の状況

	津市	松坂市
合併年	2006年	2005年
合併後の面積 (km ²)	710.81	627.33
合併後の人口	288,538	168,973
合併後の人口密度 (人/km ²)	406	269



図1-1 津・松坂市



図1-2 合併の状況

1-4-3 津市・松坂市の地域分類

本研究では、広域な市域面積を持つこととなった津・松坂市を分析していくにあたり、これらの地域を都市計画区域の区域区分と、旧市町村の行政界を用いて地域を分類して各地域の特徴を明らかにしていく（以下都市計画区域内を都計内、都市計画区域外を都計外と表記）。図 1-3 に各地域の分類を示した。図 2-3 で示したように、本研究では都市計画区域と旧市町村単位で津・松坂市内を 17 に分割し、各地域を分析していく。

さらに本研究ではこれら 17 の地域を「都市計画区域」、都市計画区域に隣接した地域を「隣接部」、都市計画区域に接しない都心地域から離れた地域を「縁辺部」と分類する。これらの関係は表 2-3 に整理した（以後表 2-3 に示したように津、久居 1、河芸、安濃、香良洲、松坂 1、嬉野 1 地域は都市計画区域、久居 2、芸濃、美里、一志、松坂 2、嬉野 2 地域を隣接部、白山、美杉、飯南、飯高地域を縁辺部とする）。

1-4-4 アンケート調査の概要

1) 対象地区

本研究で行った団地調査の概要を記す。本調査は 2009 年 10 月から 2010 年 10 月にかけて都市計画区域の津地域、久居 1 地域、隣接部の一志地域にて、親の居住地との関係等を調べる事を目的に、住民を対象に訪問留置式で行ったものである。

各地域の典型例として、まとまった近年入居の見込まれる戸建住宅団地を対象に本調査を行った。対象とした団地の立地を図 1-5 に示す。これら対象団地は図 1-4 に示すように津市中心部付近から、美杉地域方面に向

表 1-2 津・松坂市の地域分類の整理

	旧市町村名	地域名	地域分類
現津市	旧津市	津地域	都市計画区域
		久居 1 地域	都市計画区域
	旧久居市	久居 2 地域	隣接部
		旧河芸町	河芸地域
	旧芸濃町	芸濃地域	隣接部
	旧美里村	美里地域	隣接部
	旧安濃町	安濃地域	都市計画区域
	旧香良洲町	香良洲地域	都市計画区域
	旧一志町	一志地域	隣接部
	旧白山町	白山地域	縁辺部
旧美杉村	美杉地域	縁辺部	
現松坂市	旧松坂市	松坂 1 地域	都市計画区域
		松坂 2 地域	隣接部
	旧嬉野町	嬉野 1 地域	都市計画区域
		嬉野 2 地域	隣接部
	旧飯南町	飯南地域	縁辺部
	旧飯高町	飯高地域	縁辺部

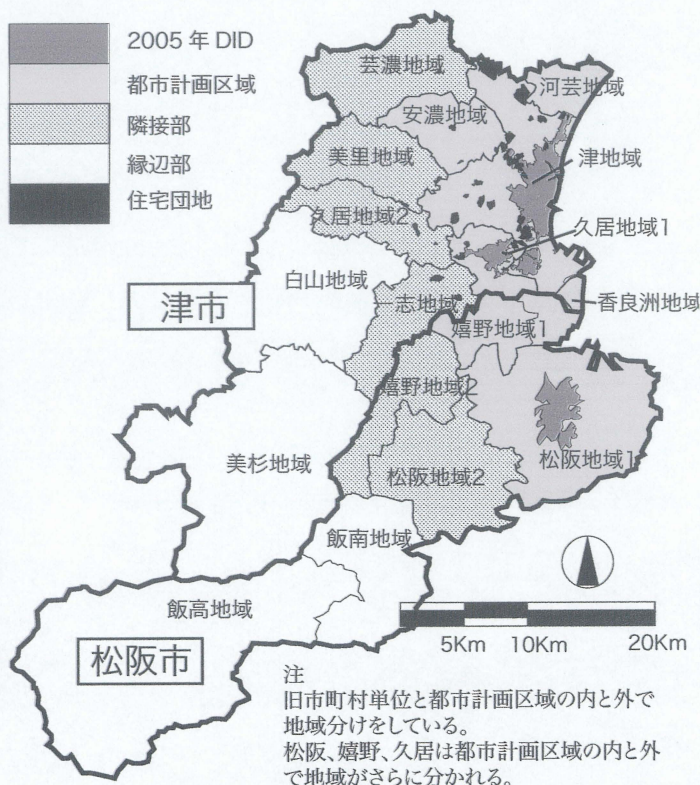


図 1-3 津・松坂市の地域分類

かうように選定している。これは、図 1-4 に示すモデル図のように、都市中心部から縁辺部に津地域、久居地域、一志地域を選定している。具体的には県道 776 号久居停車場津線及び、県道 15 号久居美杉線沿の 7 つの戸建住宅団地を選定し、都市計画区域の津地域、久居地域、隣接部の一志地域の各地域の特徴を明らかにしようとしたものである。各団地の開発年度は表 1-3 に整理した。各地域とも古い団地と新しい団地がある。

調査票は家族票、世帯主票、配偶者票を一部として一戸につき一部配布した。表 1-3 に有効回収数（家族票の有効回収数を基に算出）を表した。各団地とも対象世帯数の約 4 割がアンケート協力の意思を示して頂き、その内の回収数は 9 割程度である。

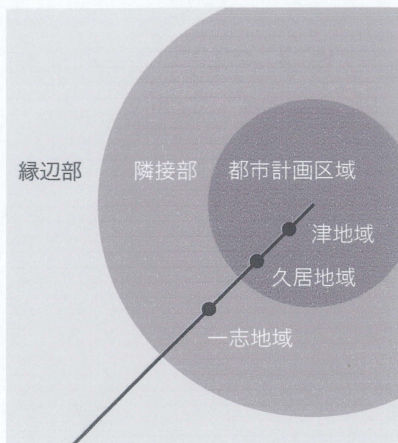


表 1-3 アンケートの概要

立地	団地名	開発年代	総戸数	配布数	回収数			回収率	実施時期
					家族票	世帯主票	配偶者票		
津地域	二重池団地	1960年代	254	104	94	93	87	90%	2010年1月
	南が丘団地	1980年代	1087	315	292	286	273	93%	2010年10月
久居地域	桜が丘団地	1980年代	453	200	177	172	161	89%	2010年8月
	久居団地	1960年代	315	152	136	132	121	89%	2010年8月
	ハイタウン久居	1990年代	160	92	73	69	69	79%	2010年8月
一志地域	みのりヶ丘	1990年代	206	86	65	64	65	76%	2010年10月
	高野団地	1960年代	661	325	290	281	253	89%	2009年10月
計			2049	1274	1127	1097	1029	88%	

図 1-4 モデル図

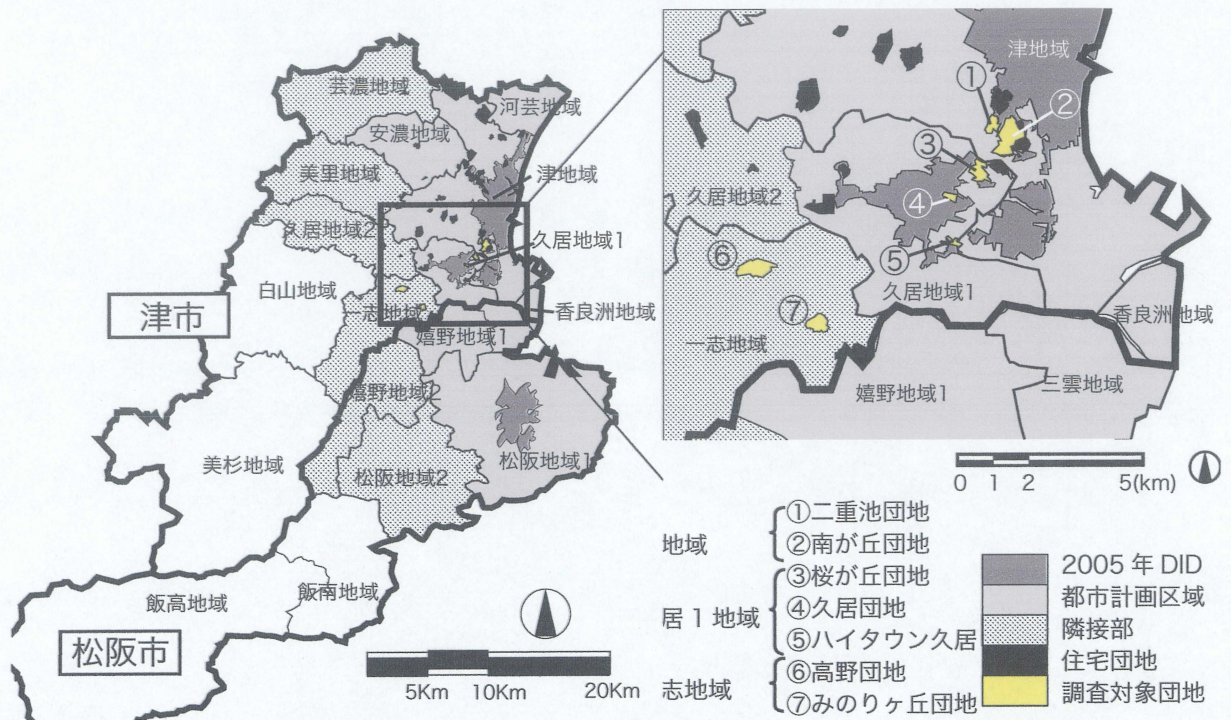


図 1-5 津・松坂市の地域分類

1-5 研究構成

図1-6に研究フロー図を示した。1章では研究背景や目的を述べた。本研究の意義を伝える章である。2章からは研究対象都市について分析していく。津市の人口動態を津市都市マスタープラン作成の為の資料より明らかにしていき、各地域の特徴を見ていき、その実態を見ていく。3章では世帯主と配偶者の勤務先や通勤時間を分析して職場と各立地の関係を明らかにしていく。特に通勤時間から分析を行い、通勤時間がどれくらいが望ましいのかを見ていく。4章では親の居住地と各立地との関係を分析していき、交流内容や時間距離を分析し、親子間がで何分以内にお互いが居住する事が望ましいかを見ていく。5章では居住地選択の条件を明らかにしていき、実際の居住地とそのニーズが合致していたのかを見ていく。最後に結論として今後の居住地の立地条件について明らかにしていく。

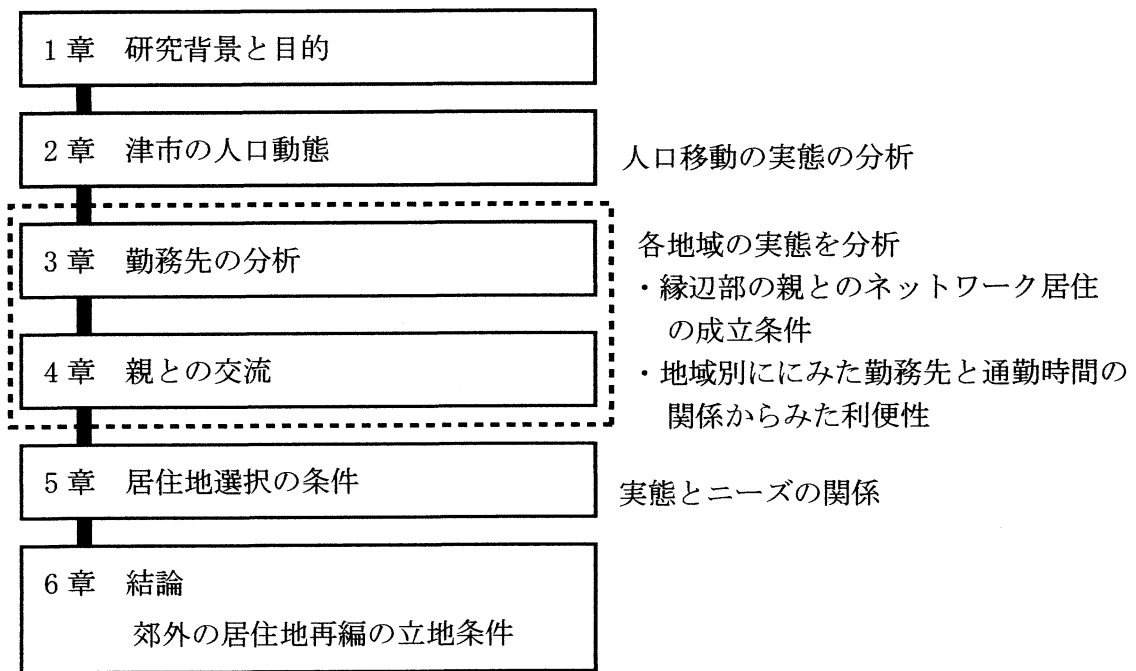


図1-6 研究フロー

2章 津市の人口

2-1 津市・松坂市の人口

2-2 津市の人口動態

2-3 各地域の居住者の前住地

2-4 小結

2-1 津市・松坂市の人口

本章では津市・松坂市の人口を分析していく。

2-1-1 津市の人口分布とその変化

まずは津市・松坂市の人口の変遷を示す。表 2-1 は 1980 年から 2005 年までの人口の変遷^{*4}と、2010 年から 2035 年までの将来人口予測^{*5}を示したものである。

表 2-1 より人口は合併後の津市の人口は 2005 年の 288,538 人をピークに減少、また松坂市では 2010 年の 170,264 人をピークに減少していくことが分かる。全体で見ると人口減少は 2005 年から 2010 年あたりをピークとして起こる事が分かる。しかし、旧市町村単位で見ると人口減少はもっと早い段階で始まっていることが分かる。例えば 1980 年が人口の最高値を示しているのが旧芸濃町、旧香良洲町、旧美杉村、旧飯南町、旧飯高町である。この中でも人口減少の早さはそれぞれ異なるが、特に縁辺部とした地域での人口減少のスピードが早い。2005 年の旧美杉村の人口は 1980 年と比較すると約 6 割、また旧飯南町、旧飯高町では、1980 年と 2000 年を比較するとそれぞれ 85%、76%となる。またにまで減少しているように、縁辺部に該当する地域での減少が大きい。また旧白山町の人口は 1985 年にピークを迎えるが、その当時と 2005 年を比較するとその人口は 83%となる。

その一方で、旧市部での人口は増え続けている事が分かる。旧津市では 1980 年と比較して 2 万人の増加があり、国勢調査の段階では人口はまだ減少していないことが分かる。

表 2-1 人口の変遷

		実績						予測					
		1980	1985	1990	1995	2000	2005	2010	2015	2020	2025	2030	2035
旧市町村名	津市	144,991	150,690	157,177	163,156	163,246	165,182	2006年 合併					
	久居市	37,058	39,134	39,682	40,144	41,063	42,191						
	河芸町	17,011	16,817	16,961	16,548	17,351	17,968						
	芸濃町	9,176	9,168	9,028	9,197	8,900	8,492						
	美里村	4,346	4,471	4,521	4,478	4,249	4,094						
	安濃町	8,850	9,667	10,228	10,797	11,279	11,152						
	香良洲町	5,733	5,695	5,563	5,448	5,300	5,174						
	一志町	12,625	12,850	13,136	14,257	14,580	14,853						
	白山町	15,158	15,695	15,253	14,479	13,395	13,040						
	美杉村	10,495	9,630	8,835	8,015	7,158	6,392						
合併後 津市	265,443	273,817	280,384	286,519	286,521	288,538	287,396	283,391	277,116	269,269	260,404	250,499	
旧市町村名	松坂市	113,481	116,886	118,725	122,449	123,727	2005年 合併	2005年 合併					
	三雲町	9,181	9,680	9,941	10,336	11,158							
	嬉野町	15,994	17,329	17,611	17,903	17,884							
	飯南町	7,257	7,194	6,891	6,528	6,180							
	飯高町	7,272	7,066	6,457	5,915	5,555							
合併後 松坂市	153,185	158,155	159,625	163,131	164,504	168,973	170,264	168,902	166,265	162,813	158,741	153,904	

* は最高値を示す

*4 統計局『国勢調査』（1980～2005）

*5 国立社会保障・人口問題研究所（2006年12月推計）

次に住民基本台帳のデータより津市のみに限りその人口を見ていく。住民基本台帳のデータでは、国勢調査より細分化された町丁・字別の人口を分析でき、地域別の人口の分析が可能である。

表 2-2 に 2005 年末から 2009 年末の地域別の人口を示した。総人口は 2005 年末をピークに若干の減少が見られる。またその人口は都市計画区域に約 8 割の人口があり、隣接部が 13%、縁辺部が約 7%前後で推移しており、津市の人口の大部分は都市計画区域の中にあるが、2 割の人は都市計画区域外に居住している。また 2009 年の縁辺部の人口は 2005 年と比較してわずか 5 年の間に約 1300 人程度の人口が減少していることが分かる。

図 2-1 は 2005 年を基準とした人口指数を表したものである。図 2-1 より都市計画区域、および隣接部での人口はほぼ変化がない事が分かるが、縁辺部での人口が約 93%にまでなるなど、縁辺部での人口が減少していることがよくわかる。

表 2-2 住民基本台帳によるここ 5 年の人口別

	2005/12/31	2006/12/31	2007/12/31	2008/12/31	2009/12/31
都市計画区域	227, 173	227, 348	227, 417	226, 983	226, 230
隣接部	37, 238	37, 234	37, 365	37, 525	37, 442
縁辺部	20, 147	19, 772	19, 350	19, 022	18, 765
総人口	284, 558	284, 354	284, 132	283, 530	282, 437

表 2-3 人口の分布

	2005/12/31	2006/12/31	2007/12/31	2008/12/31	2009/12/31
都市計画区域	79.8%	80.0%	80.0%	80.1%	80.1%
隣接部	13.1%	13.1%	13.2%	13.2%	13.3%
縁辺部	7.1%	7.0%	6.8%	6.7%	6.6%
総人口	100%	100%	100%	100%	100%

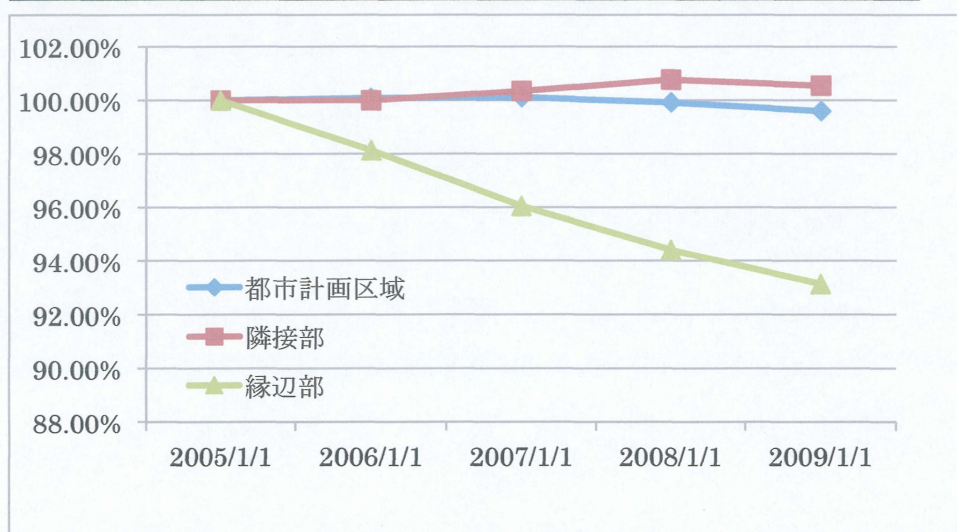


図 2-1 2005 年比の人口指数

図2-2は津市の人口密度を示したものである。この図のように、都市計画区域内では人口密度が高い事が分かる。また都市計画区域を中心とし、その外側の人口密度は低下傾向にある事が分かる。隣接部では都市計画区域に近い所ではそれなりに人口の集積が見られるが、都心から離れる程その人口密度は小さくなり、縁辺部ではさらに人口密度は低くなる事が分かる。

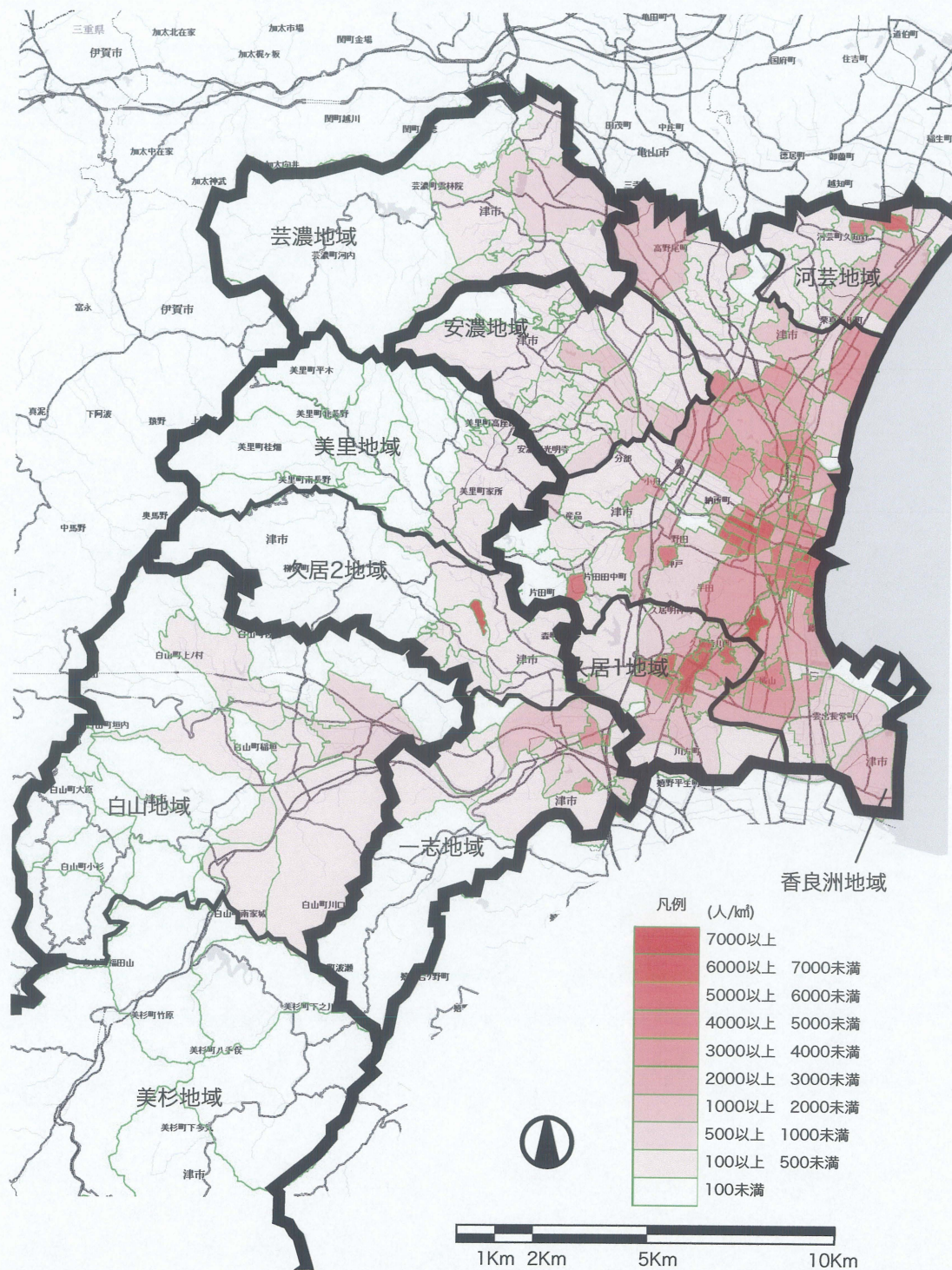


図2-2 津市の人口密度

2-1-2 津市の高齢化率

次に津市の高齢化率に着目し、人口の中身を分析していく。図2-3は平成22年11月30日現在の住民基本台帳のデータを用いて旧市町村別の高齢化率を表したものである。図2-3より旧美杉村では50%、旧白山町、旧美里村で30%以上の非常に高い高齢化率となっている。一方旧津市や旧久居市などの旧市部、またそれに隣接する旧町では高齢化率が20%台であり、決して低い数値ではないものの市内においては相対的に低いといえる。

以上より見えてくる津市の都市構造は、津市の人口は都市計画区域に8割が集中しその人口密度も高い。しかし約2割の人口は都市計画区域外の地域に居住している。またその人口の年齢構成は高齢化が進んでおり、特に縁辺部を中心としてその傾向が顕著であるといえる。

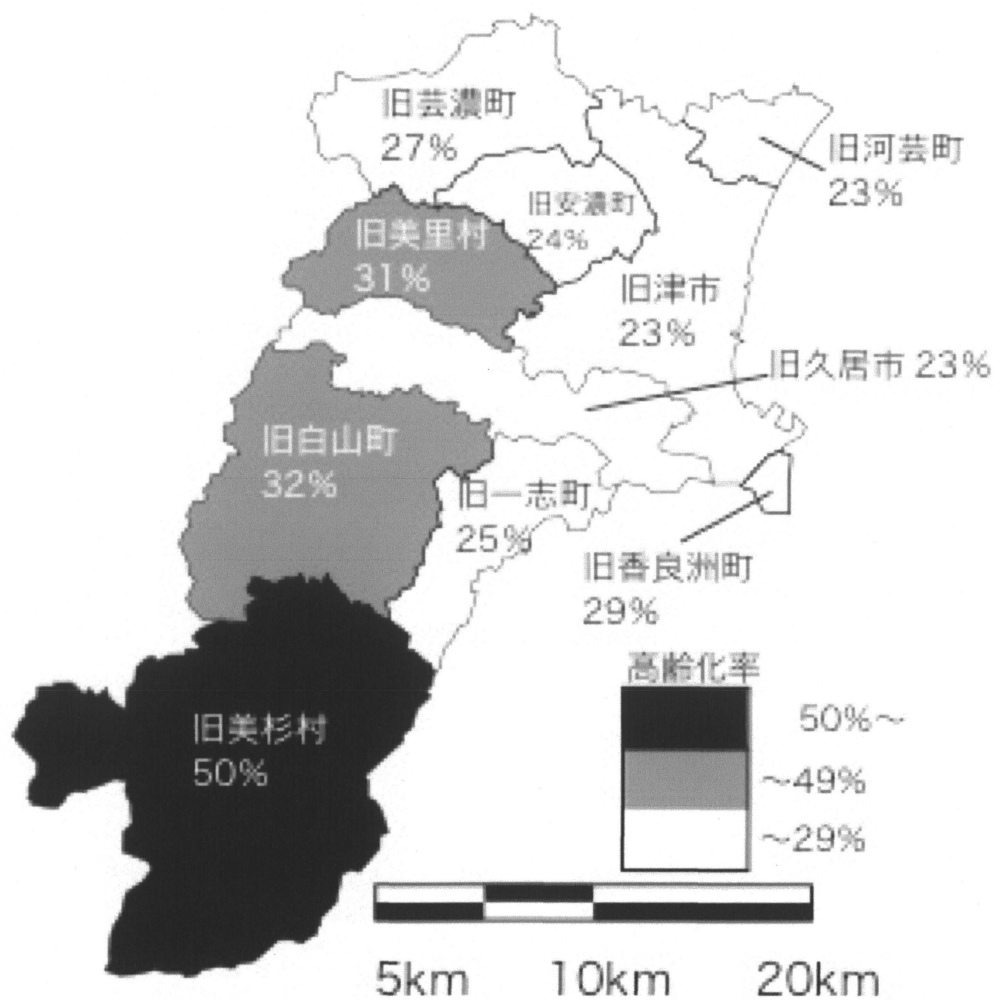


図 2-3 旧市町村別の高齢化

2-2 津市の人口動態

ここから津市における人口の移動*6について分析していく。2-1では縁辺部での人口減少がみられた。本節では減少した人口はどこに行ったのかを見ていく。なおこのデータは津市内のみのデータであり、松阪市は含まれていない。

2-2-1 人口動態の概要

表2-4は津市における2006年と2007年（それぞれ1月1日～12月31日の期間）の人口の移動を表したものである。転居は津市内での移動を表し、転入は津市外から津市内への移動、転出は津市から津市外への移動を表しており、2年間の合計は61,619であった。2006年は若干の転入超過であるが、2007年は転出超過となり、2年間の合計ではわずかに転出が多い。

図2-4は移動に関わる年齢別の内訳を示している。図2-4より移動をする人は20歳代が30%、30歳代が26%となり、20歳代～30歳代で半数以上を占め、生産年齢である「働く世代」でも比較的若く世代に移動をする人が多い事が分かる。一方40歳代は10%、50歳代で6%と、同じ「働く世代」であっても移動する人は減少し、40歳代以上の移動は全体の1/4に満たない。また10歳以下や、10歳代が全体の20%あり、これらの世代は、親の移動に伴うケースが多いと考えられ、比較的若い「働く世代」の移動に伴っていると考えられる。

表2-4 移動の概要

	2006 (H18)	2007 (H19)	総計
転居（津市内での移動）	11,037	10,404	21,441
転入（津市外から津市内へ）	10,206	9,789	19,995
転出（津市内から津市外へ）	10,133	10,050	20,183
総計	31,376	30,243	61,619

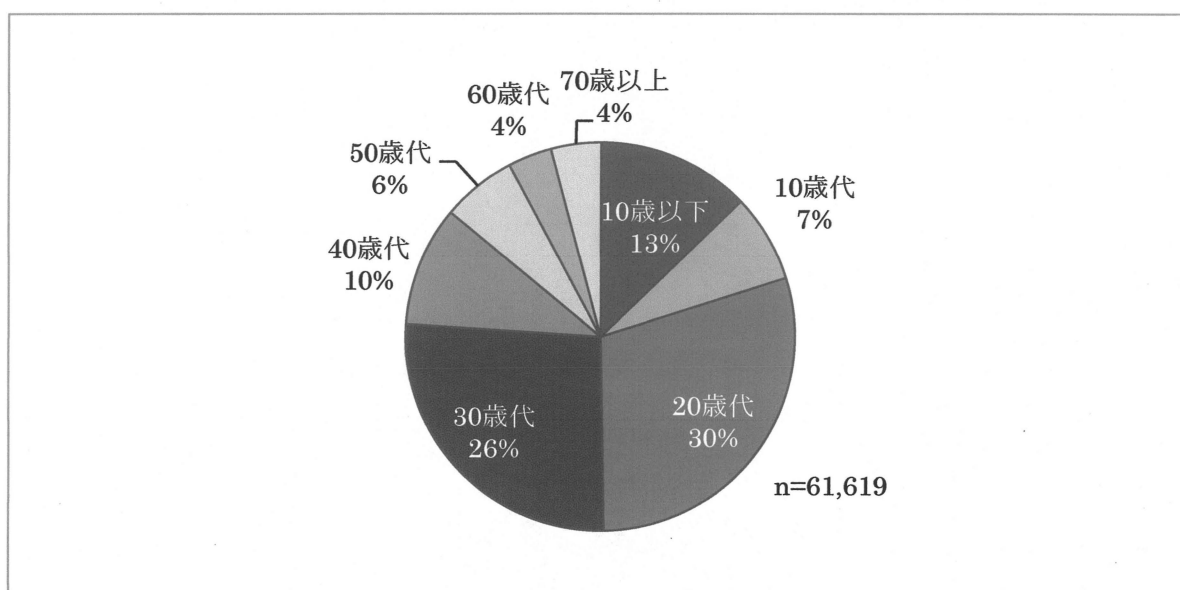


図2-4 移動者の年齢層

*6 津市都市計画マスタープラン策定資料集の基礎データを用いて作成

2-2-2 地域別にみた移動の特徴

ここから地域別にみた移動を分析していく。

表 2-5 は移動元と移動先の関係をクロス集計したものである。表側が移動前の居住地、表頭は移動先を表している。総計 1 は各地域を移動の出発点とした人の人数を表し、総計 2 は各地域別に移動の帰着点とした人の人数を表している。(総計 2) - (総計 1) = (2 年間の社会増減) となり、表 2-6 にその結果を示した。これより各地域の 2 年間の社会増減をみると都市計画区域では-12、隣接部では 289、縁辺部では-409 となる。都市計画区域では社会増減はほとんどないといえる。一方、縁辺部では社会増減は大きくマイナスであるが、隣接部では逆に増加していることが分かる。

移動先としてもっとも多いのは都市計画区域内の 59% である。その次に津市外の 32% となっており、隣接部は 6%、縁辺部は 3% と移動先としては非常に少ない。この傾向は移動元でも同じで、都市計画区域内からが 59%、津市外からの流入は 32%、隣接部からが、6%、縁辺部からが 3% であり、全体でみると、縁辺部や、隣接部からの移動は少ない事が分かる。

また、移動先と移動元の間をみると、都市計画区域から都市計画区域への移動が 29% ともっとも多く、都市計画区域から津市外へ、津市外から都市計画区域への移動がそれぞれ 28% である。またそれ以外になると 3% 以下となり、非常に少ない事が分かる。

以上のように全体でみると都市計画区域に関わる移動が多いと言え、隣接部や縁辺部に関わる移動は少ない。

表 2-5 移動元と移動先のクロス集計 (上の表は実数、下の表は割合を表す)

		移動先				総計1
		都市計画区	隣接部	縁辺部	津市外	
移動元	都市計画区域	17325	1062	233	16742	35362
	隣接部	957	912	75	1555	3499
	縁辺部	285	166	413	1212	2076
	津市外	16783	1648	946	0	19377
総計2		35350	3788	1667	19509	60314

*移動先、移動元が不明を除く

		移動先				総計
		都市計画区	隣接部	縁辺部	津市外	
移動元	都市計画区域	29%	2%	0%	28%	59%
	隣接部	2%	2%	0%	3%	6%
	縁辺部	0%	0%	1%	2%	3%
	津市外	28%	3%	2%	0%	32%
総計(標本数)		59%	6%	3%	32%	100% (60, 314)

表 2-6 各地域の社会増減

	2年間の社会増減
都市計画区域	-12
隣接部	289
縁辺部	-409

2-2-3 出発点別にみた移動先

1) 津市全域の移動の概要

移動元別にその移動先を分析していく。表 2-7 は移動元を基準としてそれぞれの地域からどこの地域へ移動しているのかを見たものである。また図 2-5 は移動表 2-7 の情報を地理的に表したものである。

まず都市計画区域からの移動に着目すると都市計画区域への移動が 49%、津市外への移動が 47%となり、この 2 つの移動が大半を占めており、縁辺部や隣接部への移動は少ない。

次に隣接部からの移動をみると、隣接部から津市外への移動が 44%と最多である。次に隣接部から都市計画区域への移動が 27%、同じ隣接部への移動が 26%とほぼ同数で、縁辺部への移動は 2%と極めて少ない。

最後に縁辺部からの移動をみていく。縁辺部からの移動は津市外への移動が 58%と半数以上を占めている。津市内の移動に着目すると、縁辺部から縁辺部への移動が 20%と最多であるが、都市計画区域への移動が 14%、隣接部への移動も 8%と、他の地区に比べて移動先が分散しているといえる。

表 2-7 移動の出発点別にみた移動先の割合

		移動先				総計 (標本数)
		都市計画区	隣接部	縁辺部	津市外	
移動元	都市計画区域	49%	3%	1%	47%	100% (35,362)
	隣接部	27%	26%	2%	44%	100% (3,499)
	縁辺部	14%	8%	20%	58%	100% (2,076)
	津市外	87%	9%	5%	0%	100% (19,377)
総計		59%	6%	3%	32%	100% (60,314)

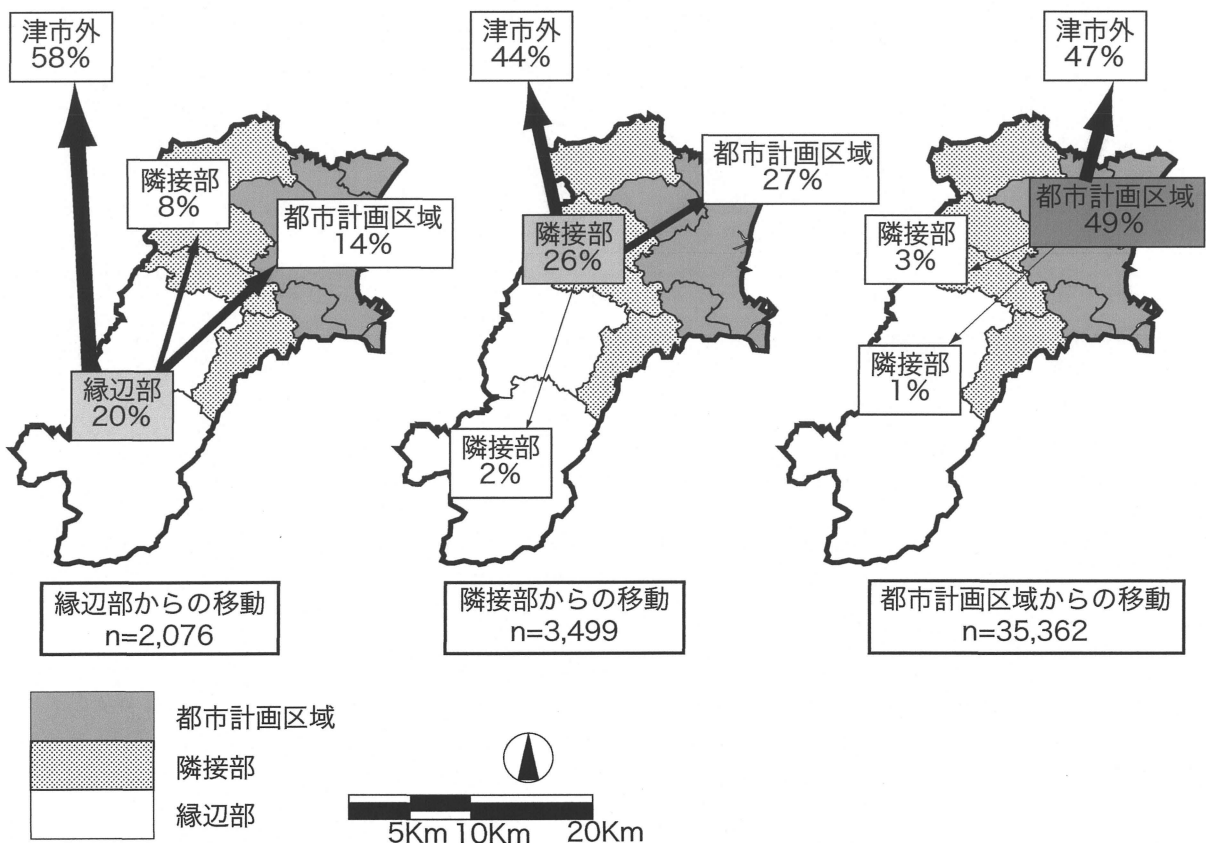


図 2-5 移動の出発点別にみた移動先の割合
三重大学大学院 工学研究科

以上をまとめると、各地域とも津市外への移動が多い。また各地域内で近場の移動は都市計画区域内では半数近くだが、隣接部と縁辺部では2割強となる。また隣接部と縁辺部は都市計画区域への移動がみられるが、逆に都市計画区域から隣接部や縁辺部への移動はほとんどみられない。また縁辺部では隣接部への移動が8%あり、縁辺部の地域から都市計画区域との中間にあたる隣接部へ行く人がいる事が分かる。

2-2-4 移動の帰着点別にみた移動

1) 津市全域の移動の概要

移動の帰着点別に流入者の前住地を分析していく。表 2-8 は移動の帰着点別にみた移動元を表し、図 2-6 はそれを地理的に表したものである。都市計画区域では、都市計画区域内からの移動が 49%、津市外からが 47%であり、隣接部や縁辺部からの流入は少ない。隣接部では津市外からの流入が 44%と最も多く、次いで都市計画区域からが 28%、隣接部からが 24%となっており、縁辺部からの流入は 4%と少ない。縁辺部では津市外

表 2-8 移動の帰着点別にみた移動元の割合

		移動先				総計
		都市計画区域	隣接部	縁辺部	津市外	
移動元	都市計画区域	49%	28%	14%	86%	59%
	隣接部	3%	24%	4%	8%	6%
	縁辺部	1%	4%	25%	6%	3%
	津市外	47%	44%	57%	0%	32%
総計		100% (35,350)	100% (3,788)	100% (1,667)	100% (19,509)	100% (60,314)

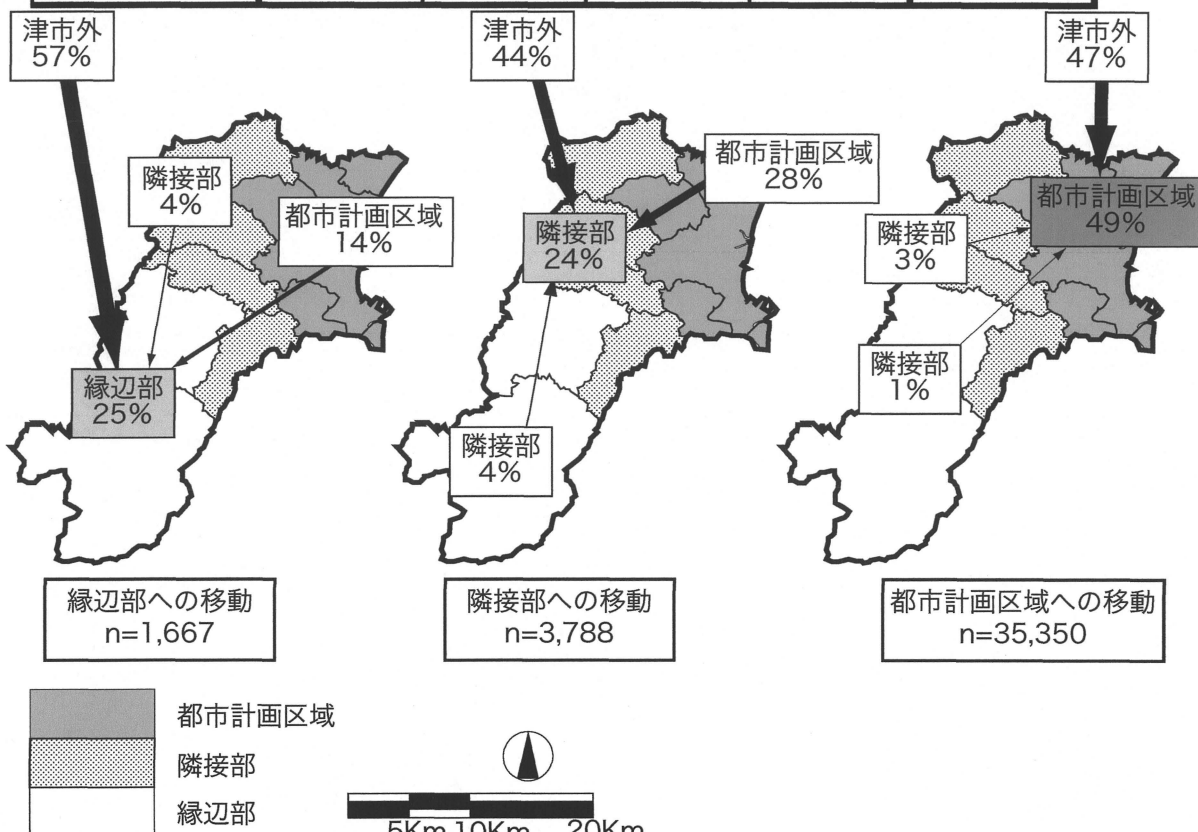


図 2-6 移動の帰着点別にみた移動元の割合

からの流入が57%となっており半数以上を占める。また隣接部からの流入25%、都市計画区域からの流入が14%となっており、隣接部からの流入は4%と少ない。

以上をまとめると、どの地域に流入してくる移動者の前住地の割合では、津市外からの流入が多いと言える。また都市計画区域では、都市計画区域内での移動も半数近くあり、津市外からの流入と都市計画区域からの流入がほとんどを占め、隣接部や縁辺部からの流入者は少ない。一方縁辺部と隣接部では、それぞれの地域内での移動が1/4程である。隣接部と縁辺部を比較すると、隣接部の方が都市計画区域から来た人の割合が多い。

2) 津地域、久居1地域、津地域

本研究では、津地域、久居1地域、一志地域の居住者を対象に近年の入居層の実態を調べている。そこで各地域にどこから流入しているかを詳細に分析する必要がある。図2-7は各地域にどこから流入しているかを表したものである。

表2-9より、津地域と久居地域への流入は都市計画区域からのが多く、それぞれ48%、49%と約半数である。しかし一志地域に着目すると都市計画区域からの流入は24%と、津地域や久居地域に比べて半分しかない。

一方、隣接部から一志地域への流入は25%となっているが、津地域と久居地域で隣接部からの流入はそれぞれ2%、5%となっている。また縁辺部からの流入も同様に、一志地域では8%あるのに対し、津地域、久居地域では1%、2%とほとんどない。

また各地域とも、津・松阪市外からの流入が一定数みられる。これは津地域が44%と最多であり、久居地域の40%、一志地域の32%の順となり、津・松阪市外から一志地域への流入は他の地域より若干少ない。

図27に着目に着目して表2-9の内容を詳しくみると、津・松阪市外からの流入を除くと、各地域とも地元である同一地域内での移動が多い。そのため、津地域や久居地域では都市計画区域からの流入が、一志地域で隣接部からの流入が多くなる。特に津地域では地元である津地域からの流入が非常に多く、久居1地域からの流入も4%と、他の都市計画区域からの流入は少ない。しかし久居地域への流入は都市計画区域からのものが多かったが、その中身は津地域からの流入も19%となっている。これは一志地域でも同様で、津地域からの流入が13%と隣接する久居1地域の9%よりも多く、各地域には津地域からの流入が多いと言える。

また一志地域では美杉地域や白山地域からの流入が4%ずつと、他の地域がほとんどないのに対し、縁辺部からの流入が目立つ。

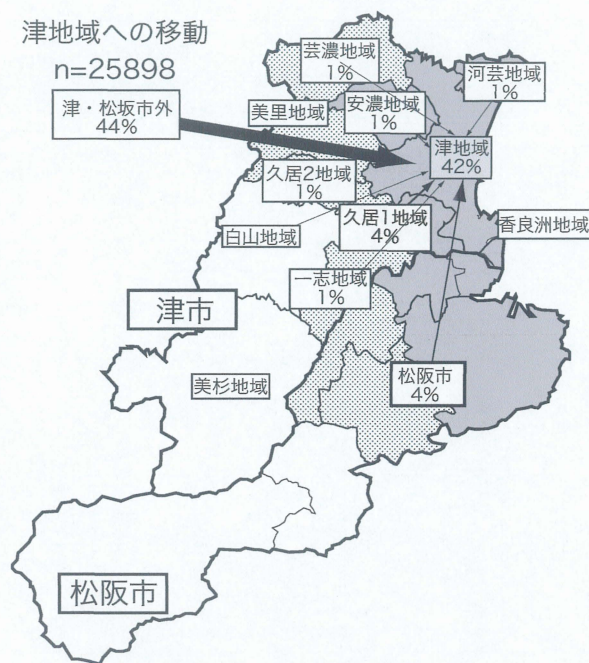
以上より各地域とも地元からの移動が最も多く、一志地域では隣接部からの流入が多く、久居地域、津地域で都市計画区域からの流入が多くなるといえる。また一志地域では縁辺部からの流入が他の地域より多く、縁辺部からの移動の受け皿となっていることが分かる。

表 2-9 各地域別の移動元

		移動先		
		一志地域	久居地域	津地域
移動元	都市計画区:	24%	48%	49%
	隣接部	25%	5%	2%
	縁辺部	8%	2%	1%
	松阪市	12%	5%	4%
	津・松阪市:	32%	40%	44%
総計		100%	100%	100%
標本数		1364	5886	25898

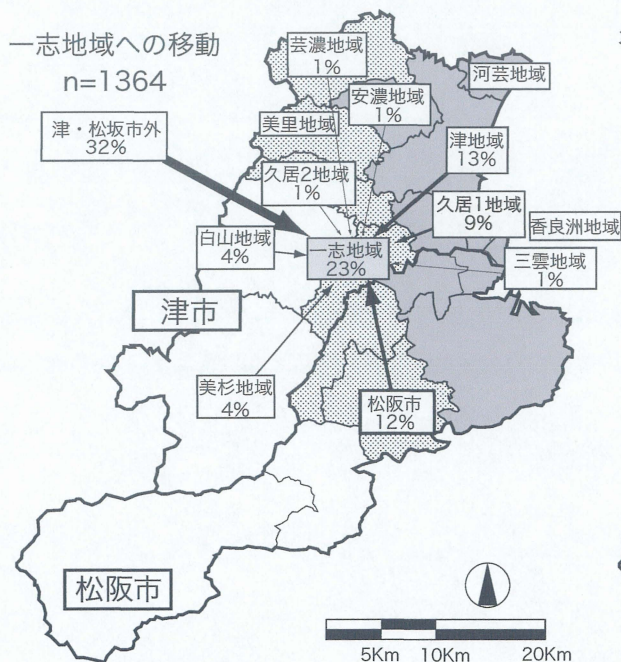
津地域への移動

n=25898



一志地域への移動

n=1364



久居地域への移動

n=5886

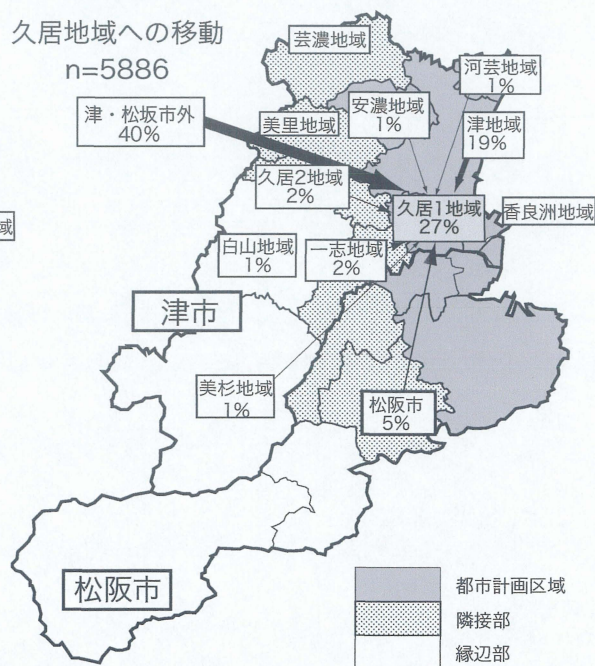
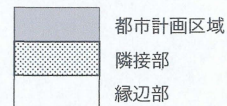
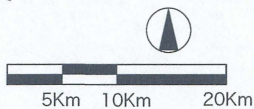


図 2-7 各地域別の移動元



2-3 各地域の居住者の前住地

ここから、アンケートの調査結果を用いて各地域の居住者の前住地を分析し、2-2 でみられた結果と比較していく。

2-3-1 各地域の居住者の入居時期と年齢

まずは各住宅団地の居住者の入居時期をみていく。表 2-10 に各住宅団地に居住している世帯の入居時期を表した。入居時期をみると開発年度が古い、高野団地、久居団地、二重池団地では 1979 年以前の入居がみられる。しかしその年代に集中しているのではなく、古い団地であっても近年の入居者が見られる。一方比較的新しい団地では当然ながら近年の入居者のみである。

表 2-11 に世帯主と配偶者の年齢を入居時のものと、現在の年齢を表した。入居時の年齢をみると、どの団地においても 30 歳代がボリュームゾーンとなっていることが分かる。これは世帯主と配偶者のみを対象とし

表 2-10 入居時期

	一志地域		久居地域			津地域		総計
	高野団地	みのりヶ丘	ハイタウン久	久居団地	桜ヶ丘団地	南が丘	二重池団地	
1979以前	52%	0%	0%	40%	10%	0%	31%	22%
1980年代	20%	0%	0%	25%	57%	1%	18%	19%
1990年代	11%	2%	4%	17%	15%	50%	21%	22%
2000年以降	12%	98%	89%	14%	15%	47%	27%	33%
不明	4%	0%	7%	4%	3%	2%	3%	3%
総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
標本数	290	65	73	136	177	292	94	1127

表 2-11 世帯主と配偶者の入居時と現在の年齢

	一志地域		久居地域			津地域		総計
	高野団地	みのりヶ丘	ハイタウン久	久居団地	桜ヶ丘団地	南が丘	二重池団地	
入居時								
～29歳	-	38%	21%	21%	16%	10%	23%	18%
30歳代	-	50%	58%	51%	42%	52%	36%	48%
40歳代	-	5%	12%	16%	27%	22%	23%	20%
50歳代	-	3%	6%	6%	11%	8%	11%	8%
60歳代	-	2%	1%	1%	2%	3%	5%	3%
70歳～	-	0%	0%	1%	0%	1%	0%	1%
不明	-	2%	3%	4%	2%	3%	1%	3%
総計	-	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
標本数	-	130	145	272	350	584	183	1664
現在								
～29歳	1%	3%	1%	0%	1%	1%	1%	1%
30歳代	8%	72%	39%	6%	5%	16%	12%	16%
40歳代	10%	18%	46%	13%	8%	42%	17%	22%
50歳代	23%	3%	8%	20%	28%	22%	21%	21%
60歳代	39%	3%	5%	26%	38%	12%	26%	25%
70歳～	19%	0%	0%	32%	18%	6%	21%	15%
不明	1%	0%	1%	2%	3%	2%	2%	2%
総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
標本数	532	130	145	262	345	570	183	2167

*高野団地の入居時の年齢はアンケートで聞いていないため不明

た物なので、世帯全体の年齢構成を表すものではないが、移動の時点での年齢は30歳代の前後が中心である事が分かり、2-2-1の人口動態の概要で述べた移動の中心世代と合致する。一方現在の年齢は比較的古い住宅団地である高野団地、久居団地、桜が丘団地、二重池団地において60歳代前後の年齢層がボリュームゾーンとなっている事が分かる。

2-3-2 前住地

次に前住地を分析していく。図2-8は各地域の前住地を表し、表2-11は前住地を各地域別に表したものである。

表2-11 各地域別の前住地

		一志地域	久居地域	津地域
前住地	都市計画区域	52%	82%	74%
	隣接部	21%	2%	3%
	縁辺部	9%	1%	1%
	津・松坂市外	18%	15%	23%
	総計	100%	100%	100%
	標本数	355	379	384

* 前住地が不明を除く

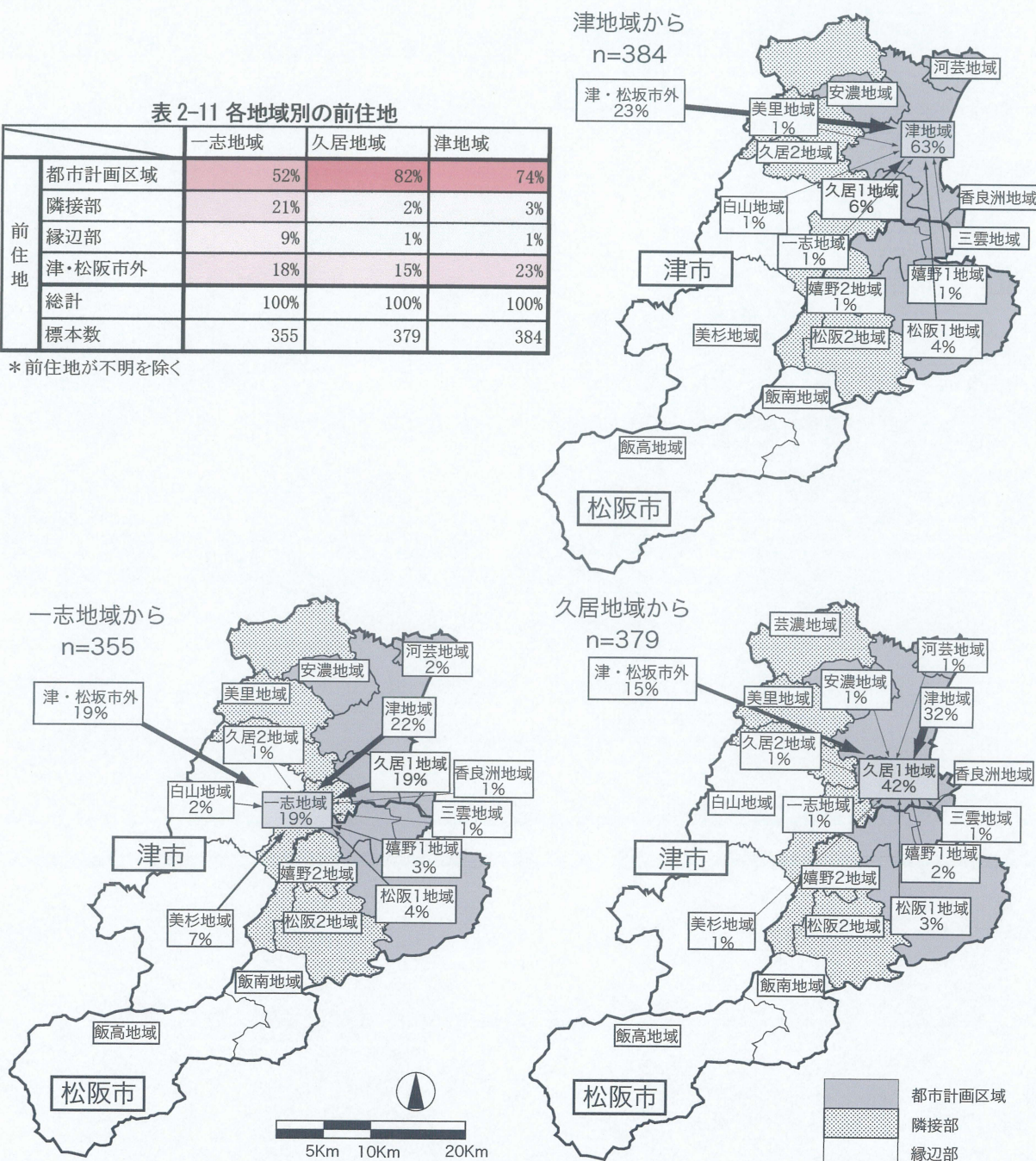


図2-8 各地域別の前住地
三重大学大学院 工学研究科

表 2-11 よりどの地域でも都市計画区域からの流入が多いが、一志地域では津、久居地域に比べると都市計画区域からの流入が少ない。その一方、一志地域では隣接部からの流入が 2 割以上、縁辺部からの流入が 1 割弱みられるが、津、久居地域ではそのような地域からの流入はわずかである。

図 2-8 よりその内訳を詳細に見ていく。まず都市計画区域からの流入が非常に多い津地域と久居地域に着目すると、津地域では 63% が地元である津地域からの流入でありが特に目立つ。久居地域では地元である久居地域からの流入が 4 割程度であり 3 割りが津地域からの流入であり、いずれも都市計画区域であるが、津地域からの流入も目立つ。

一方一志地域では、地元である一志地域からの流入が 19% となっており、隣接部からの流入はほぼ地元である一志地域からの流入である。また津地域からの流入が 22%、久居地域からの流入が 19% となっており、都市計画区域内でも旧市部からの流入が目立つ。縁辺部からの流入は美杉地域の 7%、白山地域の 2% であり、この地域からの流入は他の地域ではわずかにしかみられず、一志地域の流入者層の特徴となっている。

次に 2-2-4 の 2) での津市都市計画マスタープラン作成のための資料を基に作成した帰着点別の移動の分析と比較していく。表 2-12 津市都市計画マスタープラン作成のための資料を基に作成した移動の分析とアンケート調査による前住地の結果を比較したものである。また図 2-9 は同じく津市都市計画マスタープラン作成のための資料より作成した津、久居、一志地域への移動の分析と、アンケート調査による前住地を比較したものである。

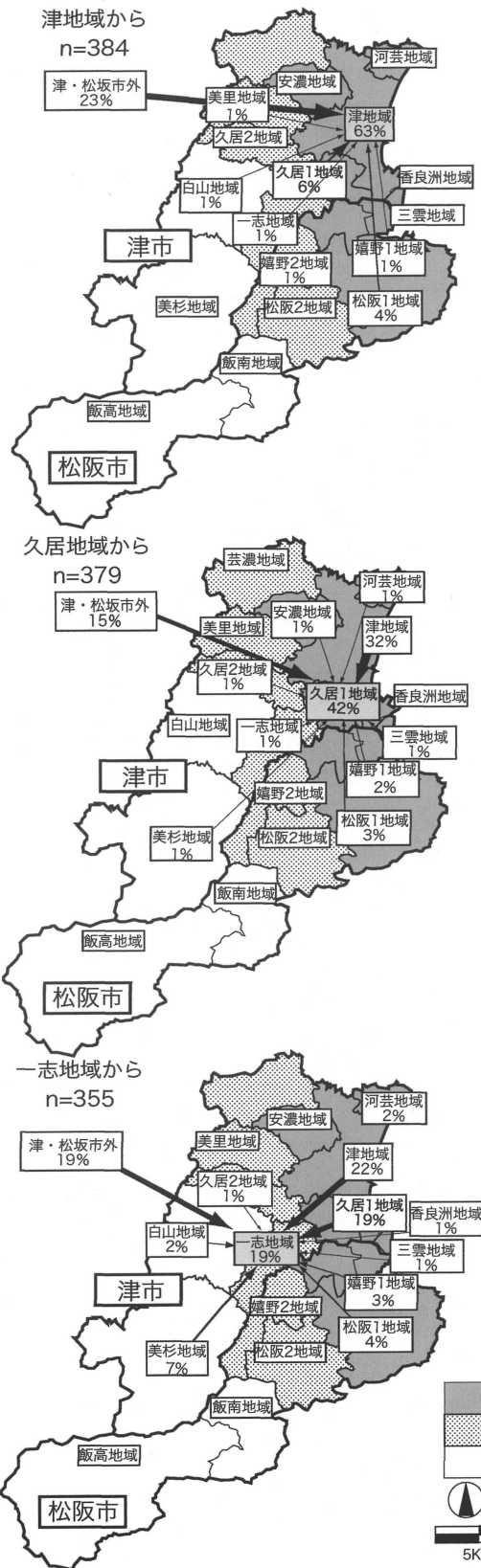
表 2-12 よりアンケート調査による前住地の方が、移動の分析に比較して津・松阪市外からの流入が少なく、その分都市計画区域からの流入が多い。しかし、隣接部や縁辺部からの流入では同じような結果が得られた。都市計画区域からの流入の増加分は、図 2-9 より詳細に見ていくと、各地域とも特に津地域や久居地域からの流入がアンケート調査による前住地の方が多くなった。これは戸建住宅を対象に行ったアンケートのため短期的な移動が含まれていない。戸建住宅に入居する定住指向のある層では、総合的な判断で住宅を探す為に一時的に都市中心部に居住し、良い物件を探してから入居した層があるのではないかと考えられる。しかしその他の地域からの流入には大きな差が見られず、一志地域には隣接部や縁辺部からの流入がアンケート結果からも多い地域であると言える。

表 2-12 アンケートの前住地分析と移動分析の比較

		前住地			移動の分析		
		一志地域	久居地域	津地域	一志地域	久居地域	津地域
移動元	都市計画区域	44%	76%	69%	24%	48%	49%
	隣接部	20%	2%	2%	25%	5%	2%
	縁辺部	9%	1%	1%	8%	2%	1%
	松阪市	9%	6%	5%	12%	5%	4%
	津・松阪市外	18%	15%	23%	32%	40%	44%
総計		100%	100%	100%	100%	100%	100%
標本数		355	355	355	1364	5886	25898

* 前住地の都市計画区域、隣接部、縁辺部は比較の為津市内に限っている

アンケート調査より



津市都市計画マスタープラン
作成のための資料より

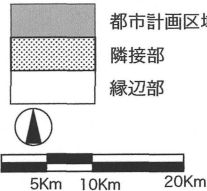
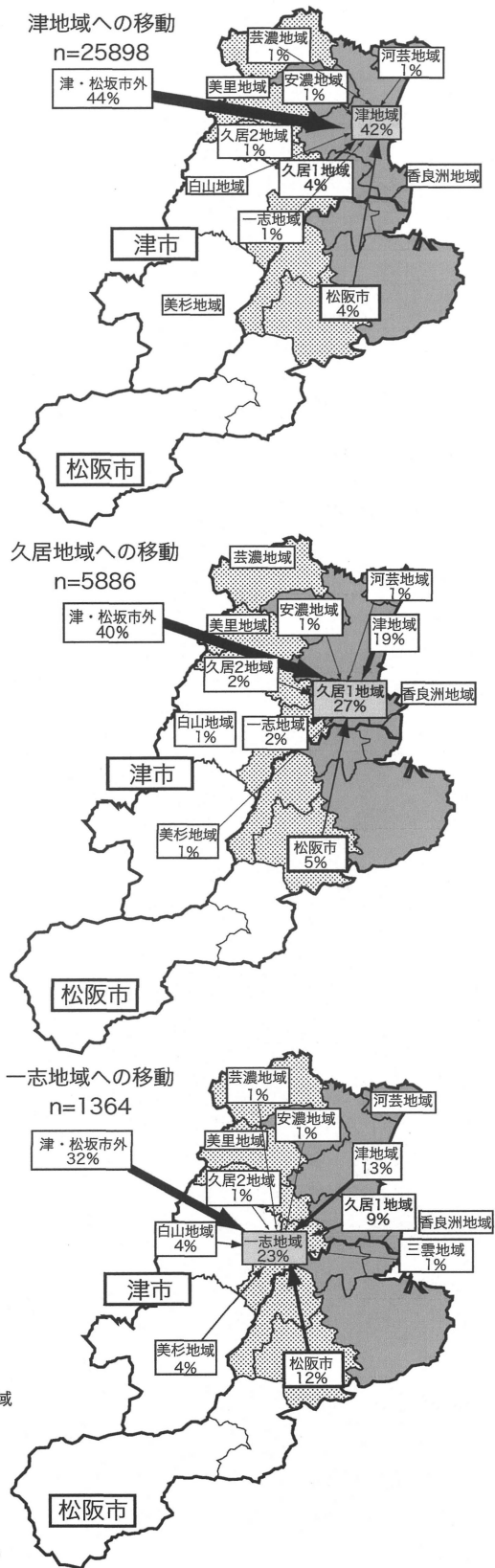


図 2-9 移動の分析と前住地の比較

2-4 小結

縁辺部では人口が減少し、高齢化が顕著に進んでいる事が分かった。一方旧市部である津地域等では人口密度も高く、都市的な特徴がみられた。

このような都市で移動をする人は20歳代と30歳代が半数以上を占め、その後は年代があがるにつれ少なくなる。このことから移動をしているのは主に「働く世代」である事が分かる。

2-2-4の移動を帰着点別に分析したものと、2-2-3の移動の出発点別にみた移動先と比較すると、縁辺部からの移動先としては都市計画区域への移動が14%、隣接部への移動が8%と分散的であり、縁辺部からの移動先が津地域や久居1地域のような都市計画区域に直接行く人だけではない事が分かった。

帰着点別にみるとどの地域でも津市外からの流入が多いが、市内での移動に着目すると各地区とも都市計画区域からの流入が多い。しかし、各地区とも同一地区内での移動も一定数みられた。

移動について詳細に分析するため、本研究で詳しく分析していく津地域、久居1地域、一志地域の3地域をそれぞれ帰着点とする移動をみた結果、各地域とも地元である地域内での移動がみられた。さらに一志地域には、縁辺部からの流入が他地より多く、一志地域は隣接部や縁辺部からの移動の受け皿となっているといえる。一方各地域とも都市計画区域からの流入も多くみられ、特に津地域からの流入も見られる。

移動の分析とアンケート結果による前住地の分析の比較ではアンケートの前住地分析の結果の方が津・松阪市外の入居者数が少なく、その分都市計画区域からの流入が多くなる結果となったが、一志地域には隣接部や縁辺部からの流入が多い地域であるという事が確認できた。

3章 勤務先の分析

3-1 世帯主および配偶者の職業

3-2 勤務先の立地

3-3 通勤時間

3-4 通勤手段

3-1 世帯主および配偶者の職業

アンケートより居住者の職業をみていく。表 3-1 は世帯主と配偶者それぞれの入居時と現在の職業を地域別に表している。(無職には、主婦・主夫を含む) まず世帯主を見ていくとどの地域もサラリーマンが多く、一志地域が 86%、久居地域で 89%、津地域で 78%となっている。また自営業や専門職を合わせるとどの地域も 9 割以上となり、パート・アルバイトという就業形態の人は極わずかであった。また同じく入居時に世帯主が無職だったという人もわずかである。

一方配偶者の入居时无職という人は一志地域で 56%、久居地域で 46%、津地域で 57%と半数程度と多く、就業していた人は世帯主に比べると少ない。また、配偶者で就業していたという人の内、サラリーマンという人が多く、一志地域、一志地域で 19%、久居地域で 27%、津地域で 24%と 2 割程度である事が分かる。またパート・アルバイトという人は一志地域で 18%、久居地域で 21%、津地域で 13%となっている。

また現在の職業をみると、調査対象に古い団地が含まれているため世帯主においても無職という割合が約 2～3 割ある。

以上より、各地域の居住者像としては世帯主が主に世帯の収入を支え、配偶者が主婦等で無職であるというパターンが一番多い事が分かる。またパート・アルバイトという人も 1～2 割程の世帯でみられ、世帯主の収入を支えているケースも見られる。その一方で配偶者もサラリーマンや専門職として働く、「共稼ぎ世帯」は 2 割程であり、調査対象とした大多数の世帯では、世帯主が主な収入を稼ぐ一般的なサラリーマン家庭が多いと言える。

表 3-1 世帯主および配偶者の職業

	世帯主			配偶者			
	一志地域	久居地域	津地域	一志地域	久居地域	津地域	
入居時	自営業	5%	4%	5%	2%	2%	2%
	サラリーマン	86%	89%	78%	19%	27%	24%
	会社経営	1%	1%	2%	0%	0%	0%
	医師、弁護士等の専門職	2%	2%	7%	2%	1%	3%
	パート・アルバイト	1%	0%	1%	18%	21%	13%
	その他	2%	0%	1%	2%	0%	0%
	入居时无職	3%	3%	4%	56%	46%	57%
	不明	1%	1%	1%	0%	2%	0%
	総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%
	標本数	345	373	379	318	351	360
	世帯主			配偶者			
	一志地域	久居地域	津地域	一志地域	久居地域	津地域	
現在	自営業	5%	4%	4%	2%	1%	3%
	サラリーマン	48%	52%	64%	10%	15%	17%
	会社経営	2%	1%	3%	1%	0%	0%
	医師、弁護士等の専門職	2%	2%	6%	2%	2%	2%
	パート・アルバイト	7%	3%	1%	25%	21%	26%
	その他	3%	0%	1%	1%	0%	0%
	現在無職	32%	36%	19%	60%	58%	51%
	不明	2%	2%	0%	1%	3%	1%
	総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%
	標本数	345	373	379	318	351	360

3-2 勤務先の立地

3-2-1 世帯主の勤務先

表 3-2 に世帯主の入居時の勤務先を表し、図 3-1 に津・松坂市内その勤務先を地域別に表した。表 3-2 の津・松坂市内である都計内、隣接部、縁辺部への通勤の合計が、一志地域で 81%、久居地域で 78%、津地域で 73% となっており、多くの人の勤務先は津・松坂市内にある事が分かる。また久居地域や津地域では多くの人は都市計画区域内への通勤となっており、隣接部、縁辺部への通勤は少ない。一志地域では隣接部への通勤が 12% みられる。

表 3-2 世帯主の入居時の勤務先一覧

		都市計画区域		
		一志地域	久居地域	津地域
津・松坂市内	都計内	65%	75%	72%
	隣接部	12%	2%	0%
	縁辺部	4%	1%	1%
津・松坂市外	県内	14%	11%	15%
	県外	3%	8%	9%
自宅		1%	1%	2%
不明		2%	1%	1%
総計		100%	100%	100%
標本数		335	366	364

*無職を除く

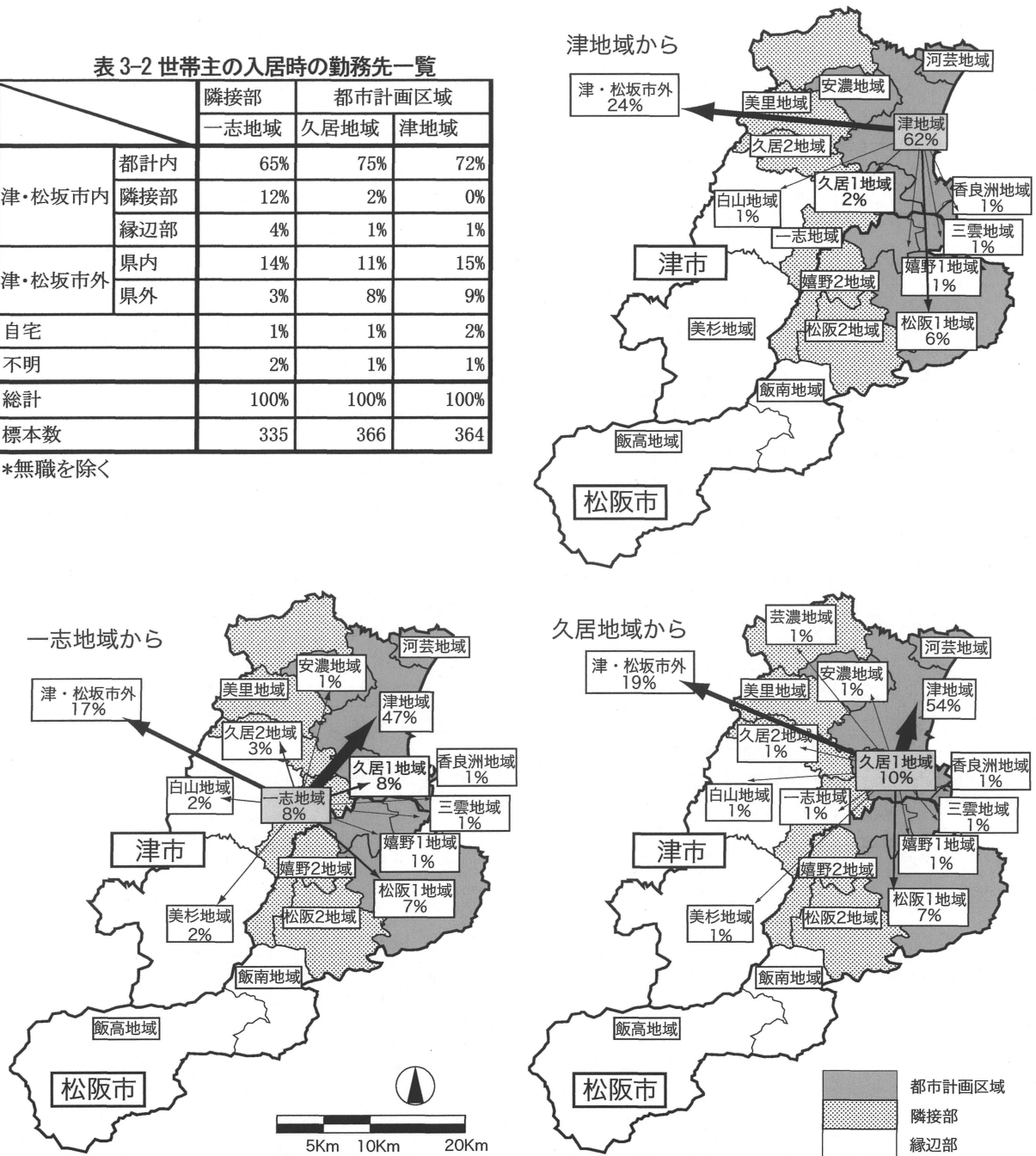


図 3-1 世帯主の入居時の勤務先

次に、図 3-1 より各地域からの通勤先として津地域への通勤が最も多い事が分かる。津地域から離れた一志地域においても津地域への通勤が 47%と半数弱を占めている。また久居地域でも 54%、津地域では 62%と半数以上が津地域への通勤している。一方、同じ旧市部であり都市計画区域内の久居 1 地域、松阪 1 地域への通勤はそれほど多くない。一志地域に着目すると久居 1 地域への通勤は 8%、松阪 1 地域への通勤は 7%である。また久居地域からの勤務先は地元である久居 1 地域内への通勤が 10%、松阪 1 地域への通勤は 7%である。

また表 3-2 より一志地域では隣接部への通勤が 12%となっているが、図 3-1 をみるとこれは地元である一志地域への通勤が 8%あるためであり、隣接部である他の地域への通勤は極めて少ない。

県外を含めた津・松阪市外への通勤は一志地域で 17%、久居地域で 19%、津地域で 24%となっている。津地域では津・松阪市外への通勤が他の地域に比べて若干多いが、概ね 2 割の人が津・松阪市外へ通勤しており、遠くまで通勤をしている人も見られる。

以上のことから、都市計画区域内への通勤が多く、特に津地域は周辺の地域の雇用の中心的地域になっており、津地域を含む各地域からの勤務先となっている。通勤隣接部の一志地域から地元である一志地域への通勤が 8%見られる他は、隣接部や縁辺部への通勤はほとんどみられない。津・松阪市外への通勤も 2 割程みられ、遠くまで通勤する層がある事が分かる。また一志地域は勤務先の中心地である津地域には、津地域や久居地域と比較して遠い立地である。総じて世帯主の勤務先は津市・松阪市外への通勤もみられることから遠いと言えるが、特に一志地域は勤務先が遠くなる人が多いといえる。

3-2-2 配偶者の勤務先

配偶者の勤務先を表 3-3 と、その内訳を図 3-2 に示す(無職を除く)。表 3-3 より配偶者の勤務先をみると、津・松阪市内の都市計画区域、隣接部、縁辺部への通勤が多く、津市・松阪市外への通勤は少ない事が分かる。また世帯主と同様に津・松阪市内では都市計画区域への通勤が多い。久居地域、津地域では都市計画区域への通勤が 8 割を越え、一志地域でも半数以上が都市計画区域へ通勤している。一方隣接部、縁辺部への通勤は、一志地域の 30%を除き非常に少ない。

図 3-3 より配偶者の勤務先は世帯主の勤務先に比べると、対象地域周辺に多くなる傾向がある。一志地域では地元である一志地域への通勤が 28%、久居地域から久居地域内への通勤は 31%となり、一志地域と久居地域ではそれぞれの地元の地域を勤務先としている人が多い事が分かる。そのため、一志地域では隣接部への通勤が 30%となっている。また一志地域に着目すると、隣接する久居 1 地域への通勤も 14%と、こちらも世帯主より多い。一方、津地域からは地元である津地域への通勤が 69%と 7 割弱が津地域内への通勤となっており、周辺部の隣接する旧市部で都市計画区域内である久居 1 地域への通勤は 6%、同じく松阪 1 地域への通勤は 6%と少ない。これは後述するように、雇用の中心地である津地域から周辺へ行く必要性が少ないためであろうと推測される。

津地域への通勤は久居地域からは 47%と半数近くが津地域までの通勤がみられるが、一志地域から津地域への通勤は 28%と若干少なくなる。これは一志地域の世帯主が津地域へ半数近くが通勤していたのとは対象

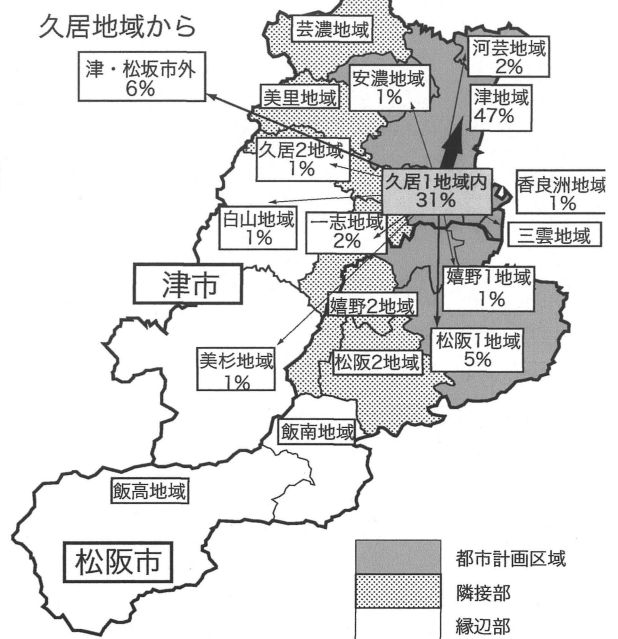
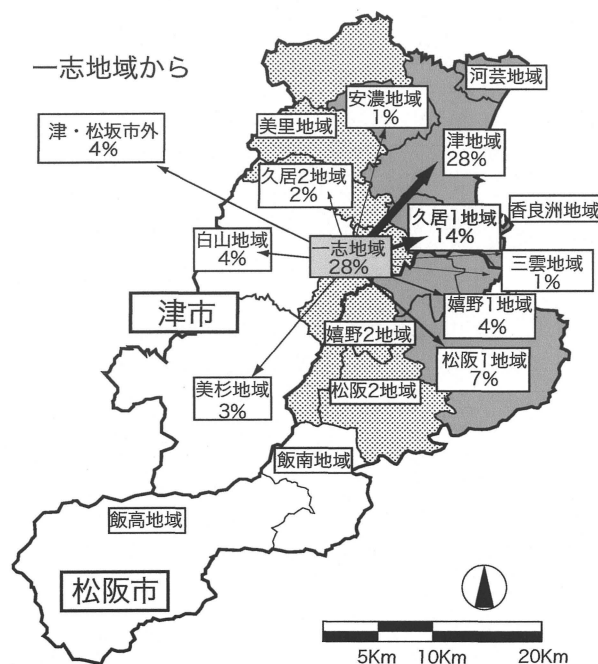
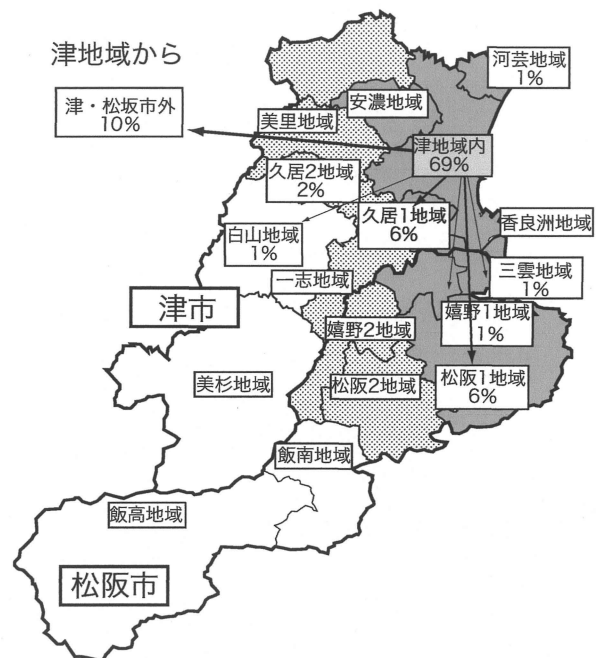
的であるが、それでも28%は多い方であるといえる。したがって津への通勤もそれなりにみられる事が分かるが、久居に比べ距離のある一志地域からの通勤は少なくなると言える。

以上より、配偶者の勤務先は世帯主と比較すると近い人が多いという傾向がある。雇用形態をみるとパート・アルバイトという人が多く、配偶者は近場に勤務先を求める傾向にあることが読み取れる。その一方で、世帯主と同様に津地域への通勤も多く見られ、都市計画区域内の旧市部と比較しても圧倒的に多いと言える。

表 3-3 配偶者の入居時の勤務先一覧

		都市計画区域		
		隣接部	一志地域	久居地域
津・松坂市内	都計内	56%	87%	83%
	隣接部	30%	2%	2%
	縁辺部	6%	2%	1%
津・松坂市外	県内	4%	5%	9%
	県外	0%	1%	1%
自宅		1%	2%	3%
不明		2%	2%	1%
総計		100%	100%	100%
標本数		139	189	155

*無職を除く



都市計画区域
隣接部
縁辺部

図 3-2 配偶者の入居時の勤務先

3-3 通勤時間

3-3-1 世帯主の通勤時間

図 3-3 は世帯主の通勤時間を表し、その累積グラフを図 3-4 に示した。図 3-3 に着目すると津地域、久居地域では通勤時間が 20 分以内という人がピークとなる。また一志地域では通勤時間 30 分以内がピークとなり、津地域や久居地域に比べると通勤時間が長い傾向にあると言える。これはどの地域からも勤務先が津地域にある人が多く、その津地域から遠い一志地域からの通勤時間が長くなってしまったためと考えられる。

一方、図 3-4 の通勤時間の累積グラフに着目するとどの地域からも通勤時間は同じような傾向がある事が読み取れ、通勤時間が 40 分以内という人はおよそ 8 割となる。

以上まとめると、津地域から離れた一志地域の通勤時間は若干長めであるが、それでも 40 分以内に通勤できる人は 8 割を超える。通勤時間が 40 分以内に収まる人は他の地域でも共通し、毎日無理なく通勤するにはおよそ 40 分以内が適しているものと考えられる。

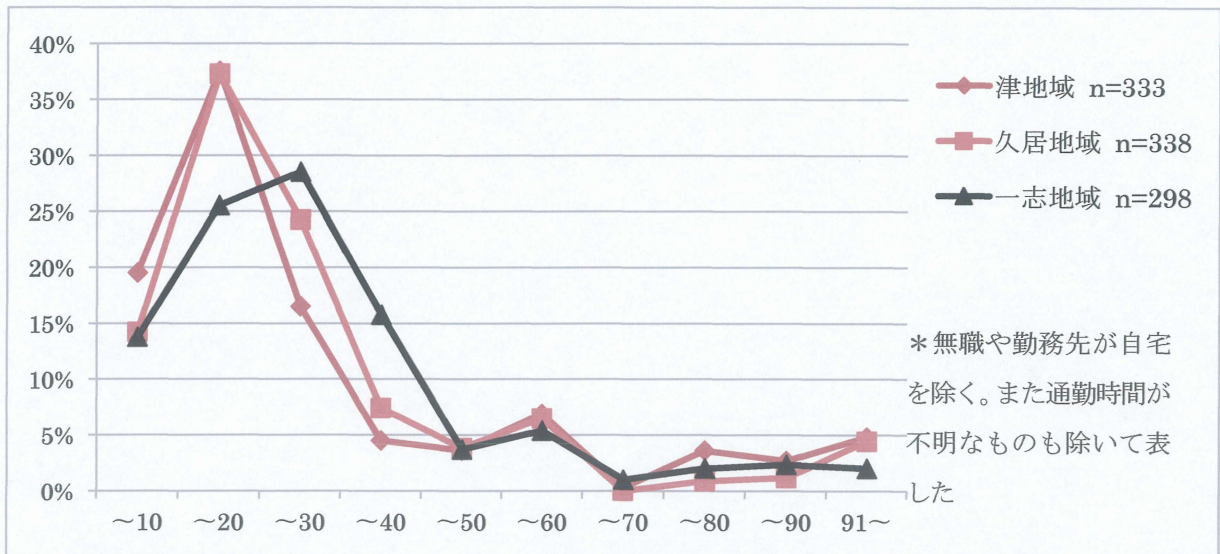


図 3-3 世帯主の通勤時

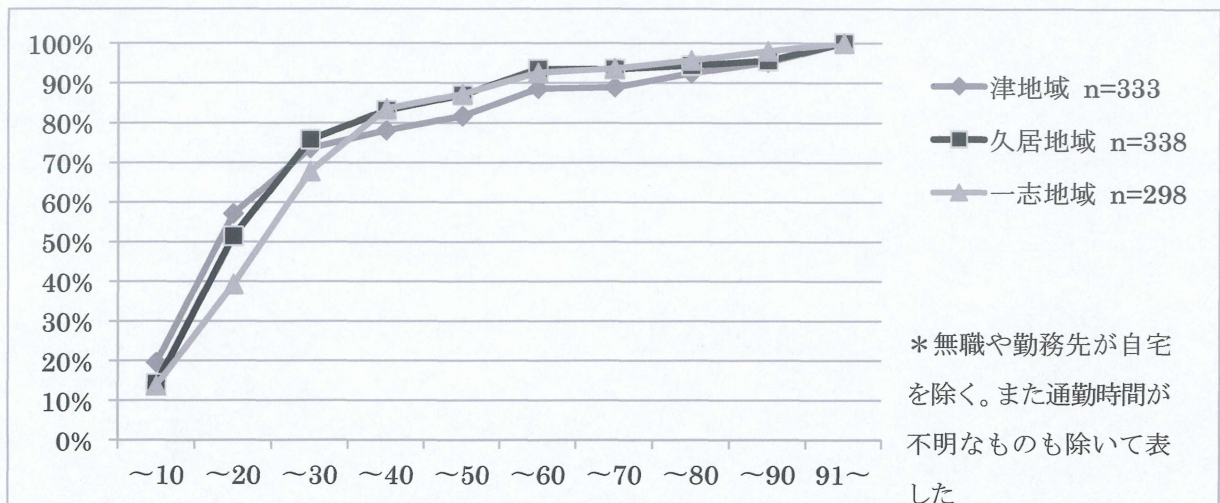


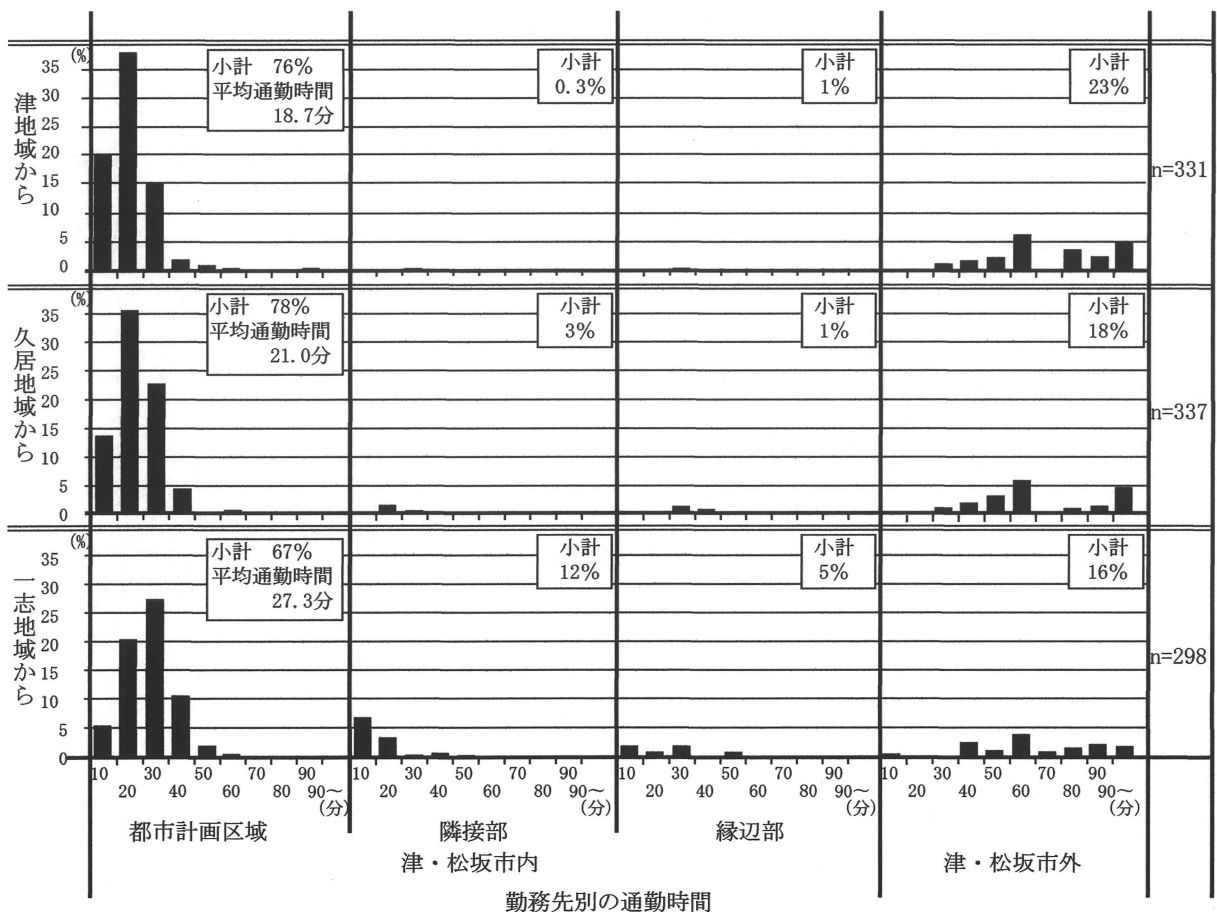
図 3-4 世帯主の通勤時間の累積グラフ

次に地域別の通勤時間を分析していく。図 3-5 は各地域から勤務先別にみた通勤時間を表している。また都市計画区域、隣接部、縁辺部は津・松阪市内への通勤であり、これらの地域への通勤を見ると 40 分以上かかるという人はわずかである事が分かる。しかし、津・松阪市外への通勤では 40 分以内という人がわずかであり、60 分以上かかる人もみられる。

津・松阪市内への通勤に着目すると、3-1 の勤務先の分析でみたように都市計画区域への通勤、特に津地域への通勤が多かった。この都市計画区域への通勤は津地域、久居地域は 20 分までのところにピークがある。しかし一志地域は 30 分にピークがあり、都市計画区域までの距離が津地域、久居地域に比べ遠いと言える。また、平均通勤時間をみると津地域が 18.7 分、久居地域が 21.0 分、一志地域が 27.3 分となっている。このことから、一志地域が都市計画区域への距離が遠い事が分かる。また津地域と久居地域を比較すると、津地域への通勤が多いためか、津地域の方が久居地域に比べ通勤時間が短めの傾向があるといえる。

隣接部への通勤をみると、津地域、久居地域からの通勤は少ないが、一志地域からの通勤は 12% ある。一志地域は隣接部に立地しているので 10 分以内という回答をピークに概ね 20 分以内に職場がある人が多いと言える。一方そのその他の地域からの通勤は少ないが、久居地域、津地域では 10 分以内との回答はなかった。

縁辺部への通勤は一志地域に 5% 見られるが、それ以外はずかである。一志地域から縁辺部への通勤時間は 30 分以内に通勤できる人が多い。



* 勤務先自宅、無職、勤務先不明
および通勤時間が不明なものを除く

図 3-5 世帯主の勤務先別の通勤時間

3-3-2 配偶者の通勤時間

配偶者の通勤時間を見ていく。勤務先の分析で見た通り、配偶者の勤務地は各地域の地元や周辺に多い事が分かっている。図 3-6 は配偶者の通勤時間を表した物、図 3-7 は通勤時間の累積グラフである。実際に通勤をみると、津地域では 20 分までにピークが来るが、一志地域、久居地域では 10 分以内にピークがあり、世帯主と比較すると勤務先が近くにある傾向が読み取れる。また図 3-7 の累積グラフをみると、30 分以内に通勤時間が収まる人が 8 割を超える。これは、勤務先が各地域の地元やその周辺に多い事から通勤時間が短めになっていると考えられる。

また配偶者の場合、通勤に 1 時間以上かかる人は世帯主と比較して少なくなる。

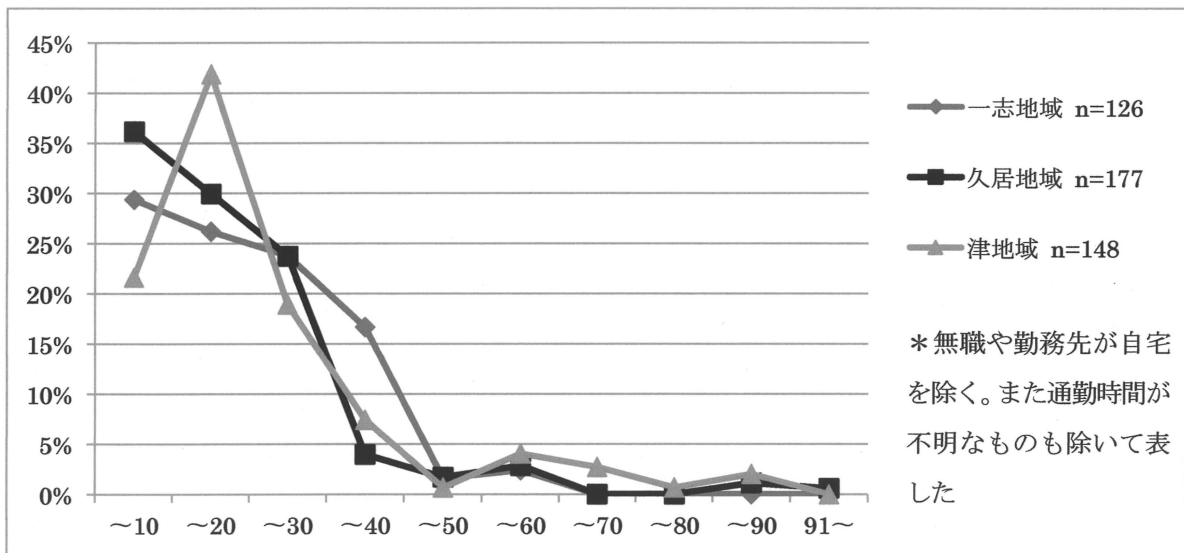


図 3-6 配偶者の通勤時

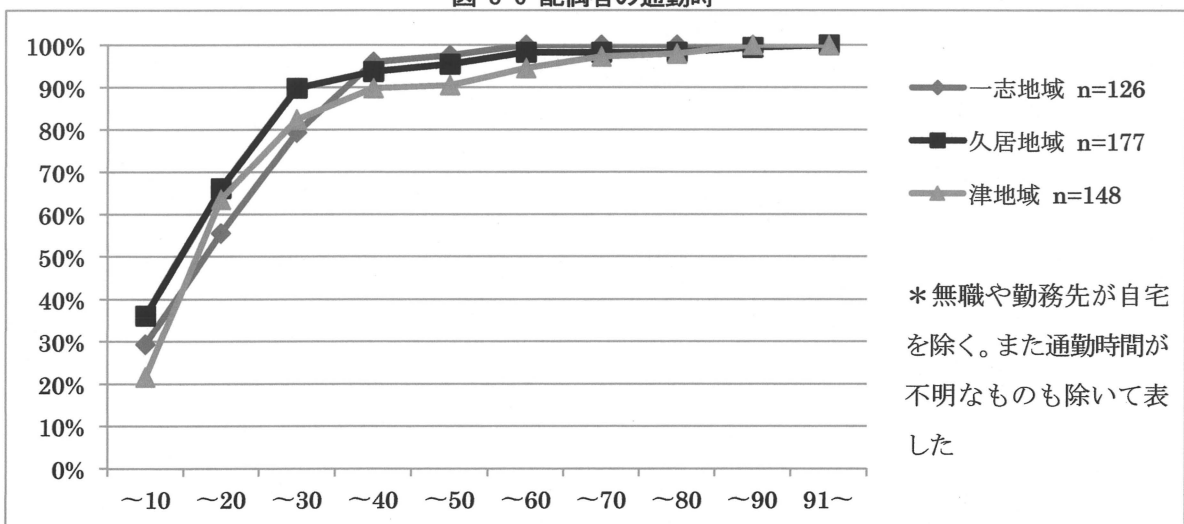
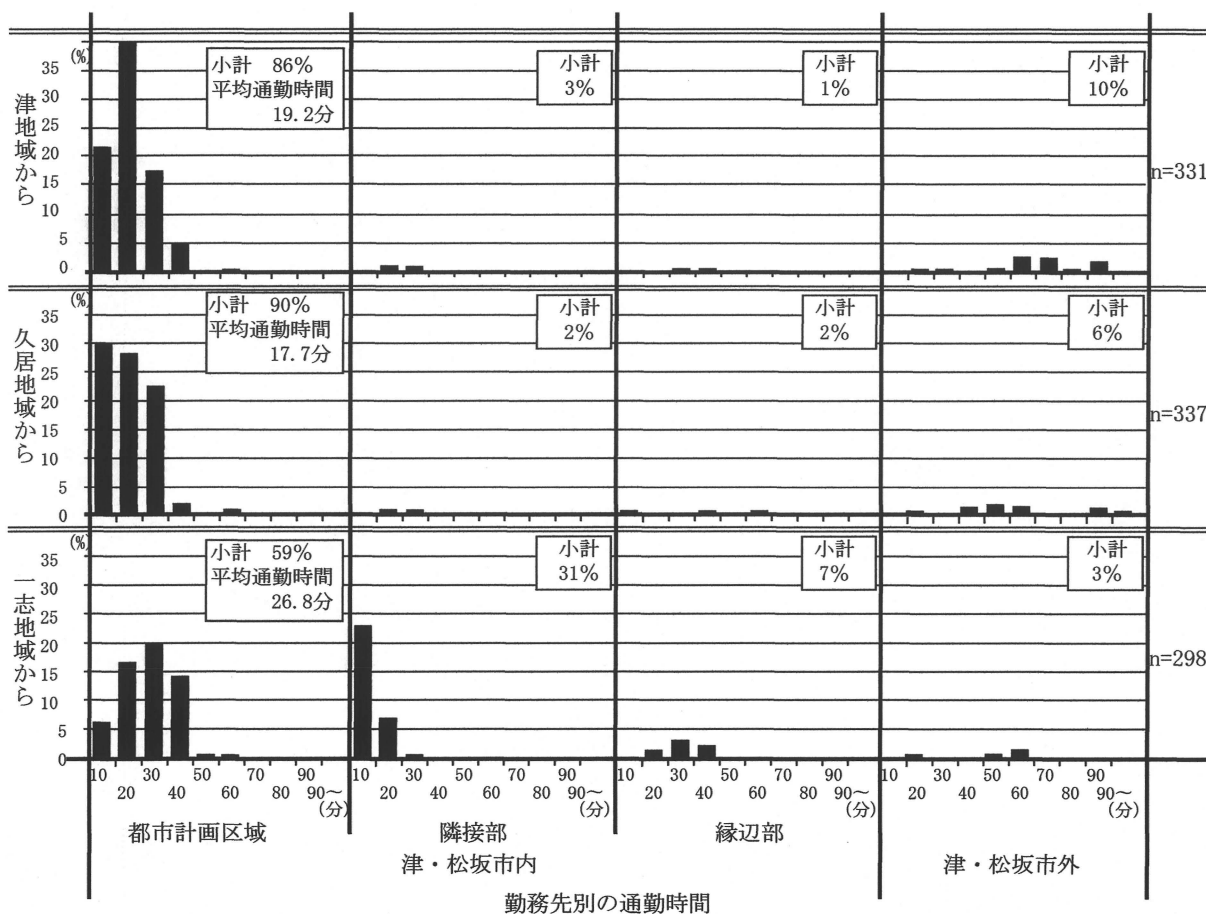


図 3-7 配偶者の通勤時間の累積グラ

次に配偶者の勤務先別の通勤時間を見ていく。図3-8は勤務先別に通勤時間を表したものとなっている。都市計画区域内に通勤している場合をみると、津地域では20分以内がピークに、久居地域では10分以内がピークとなっている。一方一志地域では30分台にピークがきている。このことから津地域と久居地域は共に都市計画区域内に立地するため、比較的通勤時間は短いと言える。平均通勤時間をみると津地域が19.2分、久居地域が17.7分、一志地域が26.8分となり一志地域から都市計画区域への勤務先に向かうためには津、久居地域と比較して時間がかかるといえる。

また一志地域の通勤に着目すると、隣接部への通勤が3割程みられる。隣接部に立地しているため、その通勤時間は10分以内という人がピークとなり、30分を超えて通勤している人はいない。このことから一志地域から隣接部内への所用時間は少ないと言える。また縁辺部への通勤も他の地域より多く、その通勤時間は20~50分程度の間となっている。他の地域では縁辺部への通勤がほとんどないため比較はできないが、一志地域は勤務先が縁辺部であっても40分以内に通勤が可能な地域であるといえる。

世帯主の通勤時間と比較すると、津地域の都市計画区域への通勤では世帯主より平均通勤時間が長く、久居地域よりも通勤時間が長い傾向にあるが、その他の地域からの通勤時間は短くなる。また一志地域では隣接部への通勤もみられ、通勤時間が短いという結果となった。



* 勤務先自宅、無職、勤務先不明
および通勤時間が不明なものを除く

図3-8 配偶者の勤務先別の通勤時間

3-4 通勤手段

次に通勤手段を見ていく。図3-9は各立地地域別に世帯主、配偶者のそれぞれの通勤手段をみたものである。まず世帯主の通勤手段をみると、どの立地地域でもマイカーでの通勤が最も多く、次に電車での通勤がある。立地地域別にみると一志地域ではマイカー通勤が8割を超え、ほとんどの人がマイカー通勤であると言える。久居地域でも6割以上の人はマイカー通勤をしている事が分かる。一方津地域ではマイカー通勤をしている人は4割強と半数以下と少ない。電車での通勤をみると、津地域では3割弱、久居地域でも2割5部程度の電車通勤が見られる。しかし一志地域では電車での通勤は1割に満たないことが分かる。

全体的に津地域ではその通勤手段は多彩であり、バイクでの通勤、自転車での通勤が、久居地域、一志地域ではほとんどないのに対して多いと言える。また、バスでの通勤、徒歩での通勤は立地地域によらずほとんどない。

配偶者の通勤手段も世帯主と同様に全体的にマイカー通勤が多く、特に一志地域では約7割の人がマイカー通勤と津地域の約5割、久居地域の6割強と比較して多いと言える。

また電車通勤も世帯主と同様に、津地域の2割弱、久居地域の1割強、一志地域の1割弱の順になり、世帯主と比較する差は小さいが、一志地域での電車通勤は少ないと言える。また津地域ではバイク通勤という人が他地域に比べ多い点も世帯主と共通する。

以上より、通勤手段としてはマイカーでの通勤がどの立地地域でも最も多いと言える。特に一志地域でのマイカー通勤は非常に多く、世帯主では8割の人が、配偶者では7割の人がマイカー通勤である。しかし、津地域、久居地域では、世帯主、配偶者ともにマイカー通勤の利用が一志地域と比較するとその割合は少なく、その分電車通勤等が一志地域と比較して多い。電車通勤をする人にとっては、津地域、久居地域は都合の良い立地条件にあるのではないかと考えられる。

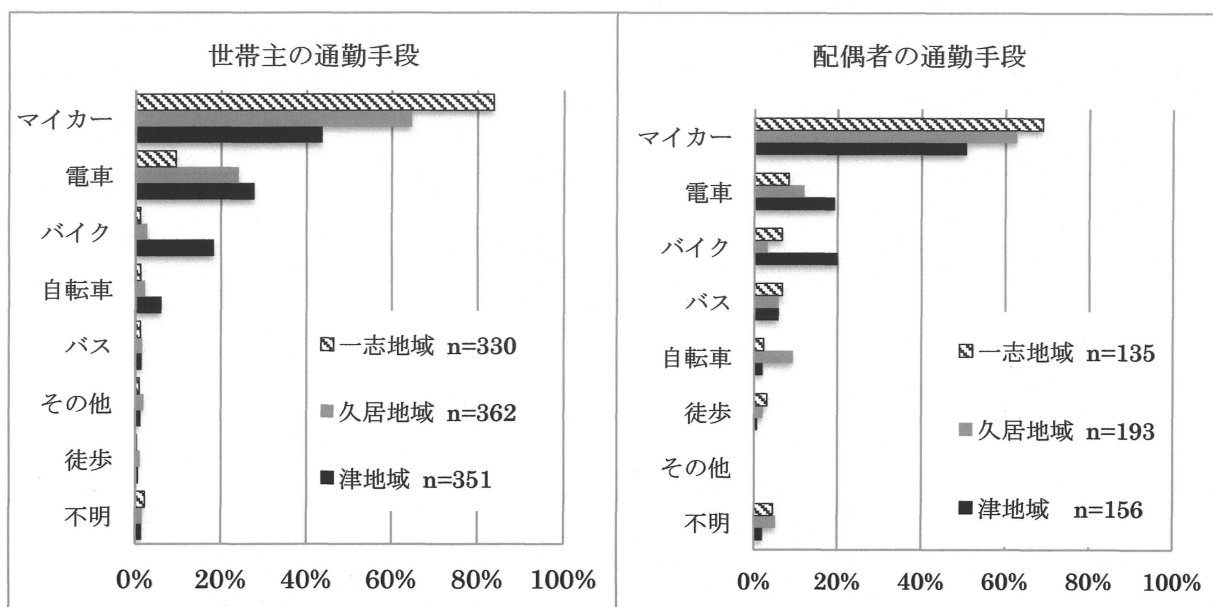


図3-9 立地地域別の通勤手段

4 章 親世帯との関係

4-1 親の所在地

4-2 親世帯までの時間距離

4-3 親との交流頻度

4-4 親との交流目的

4-1 親の所在地

4-1-1 親の所在地の全体像

表 4-1 は入居時に親が健在であったとの回答を得られた世帯の親の所在地を表している。また本研究では、親との近居について調べていくため、親と同居と親の所在地が不明なものを除いたデータを表 4-2 に示す。表 4-1 より親の所在地について世帯主の親の所在地と配偶者の所在地を見ていくと、各地域とも世帯主と配偶者の間に大きな差は見られない。

表 4-1 をみると親と同居しているという人はどの地域でも 1 割に満たず、多くの人は親とは別居している。表 4-2 をみると、津・松阪市内に親がいるという人は津地域で 47%、久居地域で 57%、一志地域で 62%となっており、津地域では半数近くが、その他の地域では半数以上の人が津・松阪市内にいる事が分かる。

また同じく表 4-2 より、一志地域と津、久居地域では同じ津・松阪市内でもその傾向が異なる。一志地域の親の所在地は都市計画区域内が 23%、隣接部が 21%、縁辺部が 18%となっており、それぞれの地区に約 2 割ずついる。しかし、都市計画区域内である久居地域や津地域では、都市計画区域内に親がいるという人が多く、それぞれ 46%、40%となっているが、隣接部と縁辺部に親がいるという人は少ない。

表 4-1 各地域の親世帯の所在地

		一志地域			久居地域			津地域		
		世帯主	配偶者	計	世帯主	配偶者	計	世帯主	配偶者	計
津・松阪市内	都市計画区域	17%	23%	20%	39%	44%	41%	37%	37%	37%
	隣接部	21%	16%	19%	5%	7%	6%	3%	5%	4%
	縁辺部	17%	14%	15%	5%	4%	4%	3%	2%	2%
津・松阪市外	その他三重県内	10%	14%	12%	18%	22%	20%	24%	27%	26%
	県外	19%	22%	20%	20%	17%	19%	22%	24%	23%
同居		7%	5%	6%	13%	5%	9%	9%	4%	6%
不明		9%	6%	7%	0%	0%	0%	2%	1%	2%
総計		100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
標本数		319	334	618	347	299	651	317	331	678

* 入居時に親が健在であると回答したもののみを表した

表 4-2 各地域の親世帯の所在地

		一志地域			久居地域			津地域		
		世帯主	配偶者	計	世帯主	配偶者	計	世帯主	配偶者	計
津・松阪市内	都市計画区域	20%	26%	23%	44%	46%	46%	42%	39%	40%
	隣接部	25%	18%	21%	6%	7%	7%	3%	5%	4%
	縁辺部	20%	16%	18%	6%	4%	5%	3%	2%	3%
	津・松阪市内計	65%	60%	62%	56%	58%	57%	47%	46%	47%
津・松阪市外	その他三重県内	12%	16%	14%	21%	24%	22%	28%	28%	28%
	県外	22%	24%	23%	23%	18%	21%	25%	26%	25%
総計		100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
標本数		268	267	535	290	299	589	308	315	623

* 入居時に親が健在であり、同居、親の所在地不明を除く

図 4-1 は表 4-2 で示した親の所在地の割合を地域別に表したものである。図 4-1 をみていくと津地域では、津地域内に親がいるという人が多い事が分かる。表 4-2 より津地域では都市計画区域内に親がいるという人が多かったが、その内の多くは津地域であることが分かる。同様に久居地域も都市計画区域内に親がいるという人が多かったが、地元である久居 1 地域に親がいるという人が 18%、津地域に親がいるという人が 19%となっており、地元の久居 1 地域だけでなく津地域に親がいるという人も目立つ。

一方、隣接部である一志地域では地元の一志地域内に親がいるという人が 18%と多い。また津地域に親がいるという人が 10%であるのに対し、一志地域には縁辺部である美杉地域に親がいるという人が 11%、同じく白山地域に親がいるという人は 7%となっており、他の地域と比較して縁辺部に親がいるという人が多い。

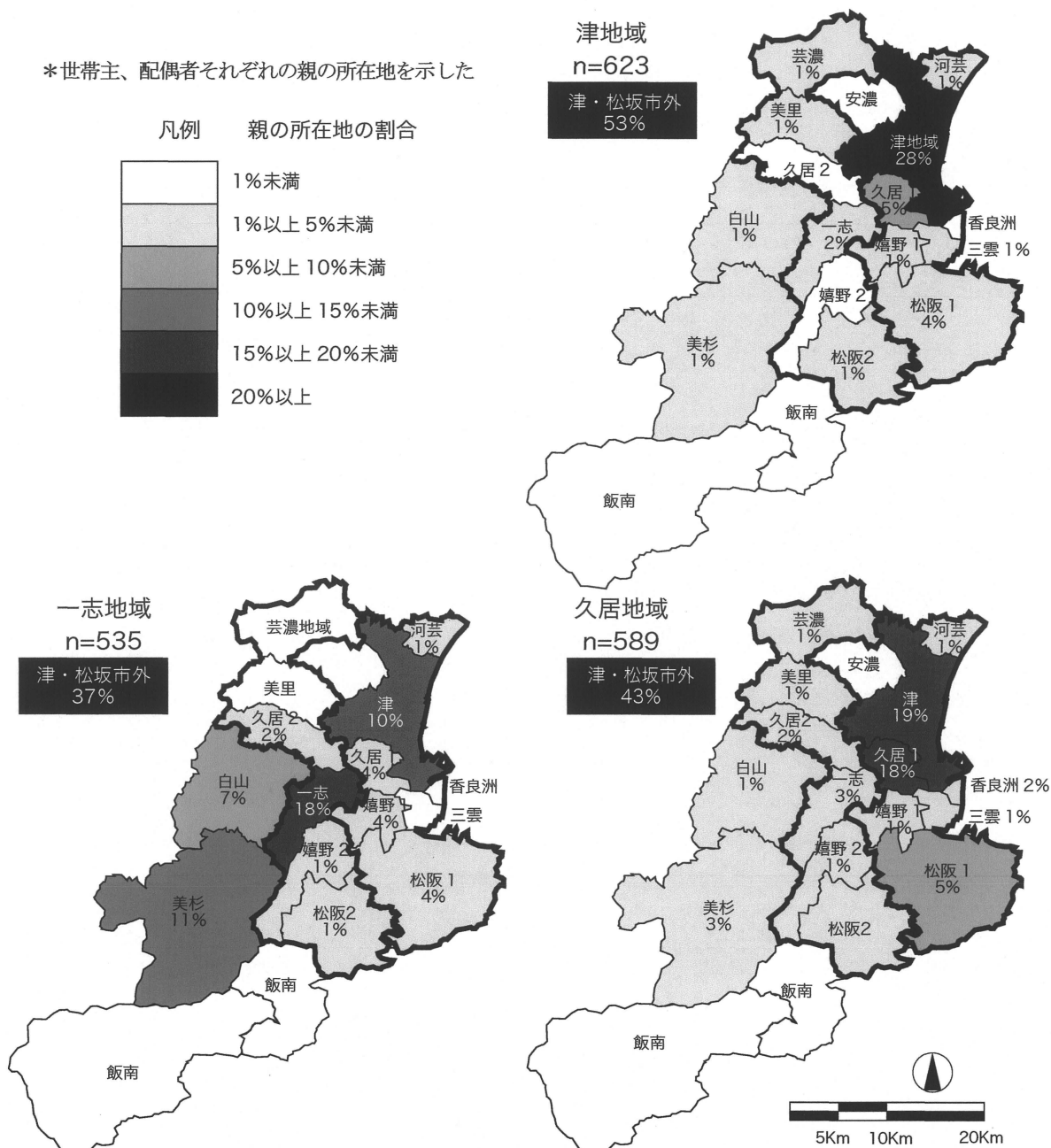


図 4-1 各地域別にみた親世帯の所在地

4-1-2 世帯ごとにみた親の所在地

表 4-3 は各地域別に、世帯主の親世帯の所在地と、配偶者の親世帯の所在地をクロス集計したものである。一世帯には世帯主と配偶者がおり、両親が健在であれば両方に親が存在する。4-1-1 でみた分析では、各世帯の居住する地域と親との関係が不明確であるため、世帯ごとに親との関係からその地域との関わりを分析していく。この分析ではアンケート調査の世帯主票と配偶者票を用いる。クロス集計では、配偶者票が有効でも世帯主票が無効といった場合があるため、無効票を含めて取り扱っている。ただし、配偶者票、世帯主票共に無効の場合と、世帯主、配偶者共に親の所在地が不明の場合を除いて集計している。「その他」の項目には入居時に両親他界、同居、親の所在地不明、無効票が含まれる。

世帯主、配偶者の親が共に津・松阪市外にいるという人は津地域で28%、久居地域で、16%、一志地域では15%となっている。表 4-1 で単純に世帯主、配偶者それぞれの親の所在地をみた場合と比較すると、各世帯に世帯主、配偶者ともに親の所在地が津・松阪市外という世帯は少なく、各世帯に世帯主、配偶者の少ない。またその他を含め、世帯主、配偶者ともに津・松阪市内に親がいないという世帯は津地域で30%、久居地域

表 4-3 各地域の親世帯の所在地を世帯主と配偶者別でクロス集計

			配偶者の親の所在地						総計 (標本数)	
			津・松阪市内			同居	津・松阪市外	その他		
			都市計画区域内	隣接部	縁辺部					
津地域	世帯主の親の所在地	阪津市・内松	都市計画区域内	16%	1%	1%	1%	13%	3%	36%
		隣接部	0%	1%	0%	0%	1%	1%	3%	
		縁辺部	1%	0%	0%	0%	1%	0%	3%	
		同居	3%	1%	0%	0%	3%	2%	9%	
		津・松阪市外	11%	1%	1%	1%	28%	3%	45%	
		その他	3%	1%	0%	0%	2%		5%	
		総計		35%	4%	2%	3%	47%	9%	100(358)
久居地域	世帯主の親の所在地	阪津市・内松	都市計画区域内	19%	1%	0%	1%	9%	4%	35%
		隣接部	2%	1%	0%	0%	1%	1%	5%	
		縁辺部	1%	1%	1%	0%	2%	1%	5%	
		同居	4%	1%	0%	1%	2%	3%	12%	
		津・松阪市外	9%	1%	1%	2%	16%	5%	35%	
		その他	3%	1%	1%	0%	4%		9%	
		総計		38%	6%	3%	5%	35%	13%	100(365)
一志地域	世帯主の親の所在地	阪津市・内松	都市計画区域内	7%	2%	1%	1%	4%	2%	17%
		隣接部	6%	5%	1%	0%	6%	4%	21%	
		縁辺部	3%	2%	8%	0%	2%	1%	16%	
		同居	1%	0%	0%	2%	2%	2%	7%	
		津・松阪市外	4%	5%	2%	0%	15%	4%	29%	
		その他	2%	1%	1%	2%	4%		10%	
		総計		22%	15%	13%	4%	34%	13%	100(322)

*その他は、入居時に両親他界、同居、親の所在地不明、無効票が含まれる。
但し世帯主票、配偶者票が共に無効票、両親の所在地不明または他界の場合を除く

が25%、一志地域が23%となり、全世帯のうち2~3割は津・松阪市内に親がいない世帯がある。言い換えると、別居、同居を問わずおよそ7~8割の世帯で、津・松阪市内に世帯主、配偶者の少なくとも片方の親が津・松阪市内にいたことが分かる。

実際に表4-3より、親が津・松阪市内にいたという世帯の世帯主と配偶者の関係を見ていく。世帯主、配偶者の少なくとも片方の親が津・松阪市内で別居している場合の世帯主と配偶者の関係の割合を表4-4に示した。世帯主、配偶者の少なくとも片方の親が津・松阪市内に親がいるという人は津、久居地域で6割以上、一志地域では7割であった。津地域では一志地域と比較すると約1割の差があるが、各地域とも6割以上の多くの世帯で、親世帯との関係からみると津・松阪市内に関わりのある世帯であると言える。

表4-4 親が津・松阪市内にいる世帯の世帯主と配偶者との関係

	一志地域	久居地域	津地域
世帯主、配偶者の親が共に津・松阪市内	34%	26%	20%
世帯主の親のみ津・松阪市内で別居	20%	19%	20%
配偶者の親のみ津・松阪市内で別居	15%	21%	21%
少なくともどちらかの親が津・松阪市内	70%	66%	61%
標本数	322	365	358

さらに縁辺部に居住する親との関係を見ていく。表4-5は世帯主、配偶者の少なくとも片方の親が縁辺部で別居している場合の世帯主と配偶者の関係の割合を示したものである。一志地域では世帯主、配偶者の少なくとも縁辺部に親がいるという世帯は22%と2割を超えた。しかし津地域と久居地域ではそのような世帯は1割に満たず、一志地域にある世帯では、世帯主、配偶者の少なくとも片方の親が縁辺部に居住しているという関係が多く他地域の世帯と比較して多いと言える。

表4-5 親が縁辺部にいる世帯の世帯主と配偶者との関係

	一志地域	久居地域	津地域
世帯主、配偶者の親が共に縁辺部	8%	1%	0%
世帯主の親のみ縁辺部で別居	9%	4%	3%
配偶者の親のみ縁辺部で別居	5%	2%	2%
少なくともどちらかの親が縁辺部	22%	7%	4%
標本数	322	365	358

次に縁辺部に隣接部を含めた都市計画区域外に居住する親との関係を見ていく。表4-6は世帯主、配偶者の少なくとも片方の親が縁辺部で別居している場合の世帯主と配偶者それぞれの親との関係の割合を示したものである。

表4-6 親が都市計画区域外にいる世帯の世帯主と配偶者との関係

	一志地域	久居地域	津地域
世帯主、配偶者の親が共に都市計画区域外	16%	2%	1%
世帯主の親のみ都市計画区域外で別居	22%	7%	4%
配偶者の親のみ都市計画区域外で別居	12%	7%	5%
少なくともどちらかの親が都市計画区域外	49%	17%	10%
標本数	322	365	358

隣接部を含めた、都市計画区域外に、世帯主、配偶者の少なくとも片方の親がいるという世帯は一志地域で49%と半数近い。一方久居地域では17%、津地域では10%と一志地域と比較して非常に少ない。一志地域は隣接部に立地していることから、親世帯の居住地という観点からみると地元である隣接部との関係が深いと言える。

以上をまとめると各地域に居住する世帯主、配偶者の親の分布を見ていくと、各地域とも津・松阪市内に親がいるという人が、一志地域では62%、久居地域では57%と半数以上あった。津地域では47%と若干他の地域と比較すると少ないが、半数近くあった。その内訳をみると一志地域に居住する世帯主、配偶者の親は津、久居地域に比べて縁辺部や隣接部に多い事が分かった。特に津地域と久居地域では縁辺部に親がいるという人はわずかであったのに対し、一志地域では美杉地域と白山地域を中心として18%の人が縁辺部に親がいるという関係が分かった。

また世帯別に見ていくと、世帯主、配偶者の少なくとも片方の親が津・松阪市内にいるという世帯はどの地域でも6割を越え、特に一志地域では7割と多い。このことから、世帯別にみていくと世帯主と配偶者の少なくとも片方の親は津・松阪市内に居住しているという関係があることが分かる。また一志地域では縁辺部に世帯主、配偶者の少なくとも片方の親がいるという世帯は22%と2割を越えるが、津地域では4%、久居地域では7%と1割に満たない。この範囲を縁辺部と同様に都市計画区域外である隣接部まで広げてみて見ると、一志地域では約半数近くの世帯で、世帯主、配偶者の少なくとも片方の親が居住していることが分かった。一方、津地域では10%、久居地域でも17%となっている。

以上より、一志地域では津、久居地域と比較して縁辺部や隣接部に親がいるという人が多く、また世帯主と配偶者の少なくとも片方の親は都市計画区域外に居住しているという世帯が多いという関係が分かった。

4-2 親世帯までの時間距離

4-2-1 親世帯までの時間距離の概要

親までの時間距離を分析していく。図4-2は親世帯までの時間距離を、図4-3は累積グラフで表したものである。図4-2より親までの時間距離のグラフを見ていくと、親までの時間距離は最初のピークが10分以内にあり、どの地域でも15%以上ある。その後50分までというところで一旦底を迎えるが、1時間以内という人が多くなる。一方90分以上の時間距離がかかる人も各地域20%以上おり、特に津地域では25%を超える。

図4-3の累積グラフに着目すると、久居地域、一志地域では親までの30分で半数を超える。また津地域では50分の所で半数を超える。また津地域のグラフの推移をみると、他の2地域より時間距離が長いといえる。これは親の居住地の分析で見た通り津・松阪市外に居住する親が多いためであると考えられる。

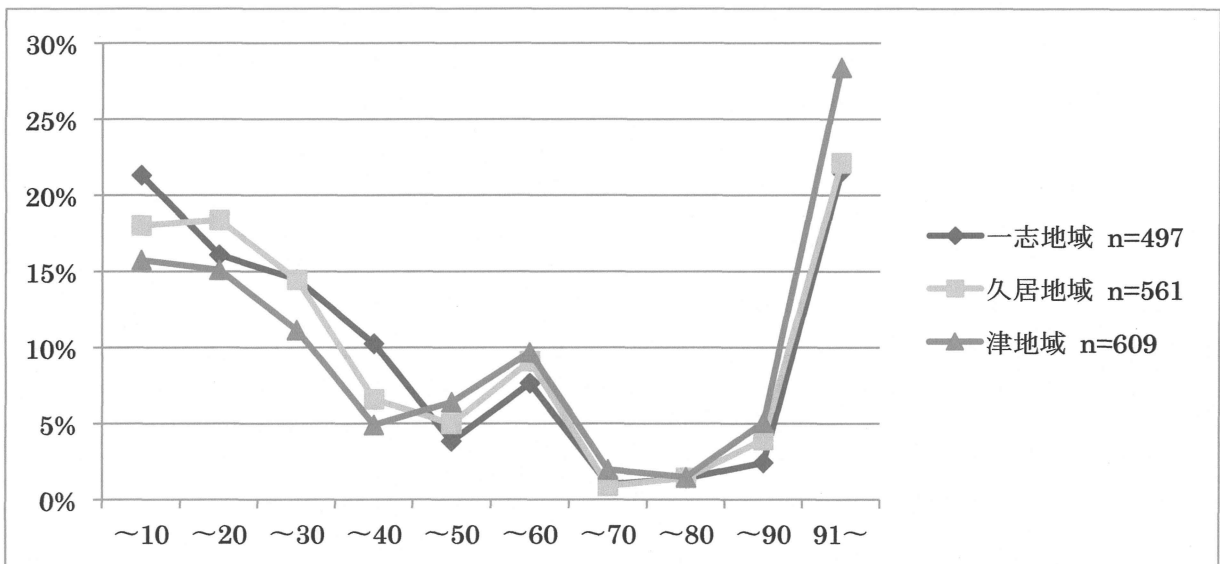


図4-2 親までの時間距離

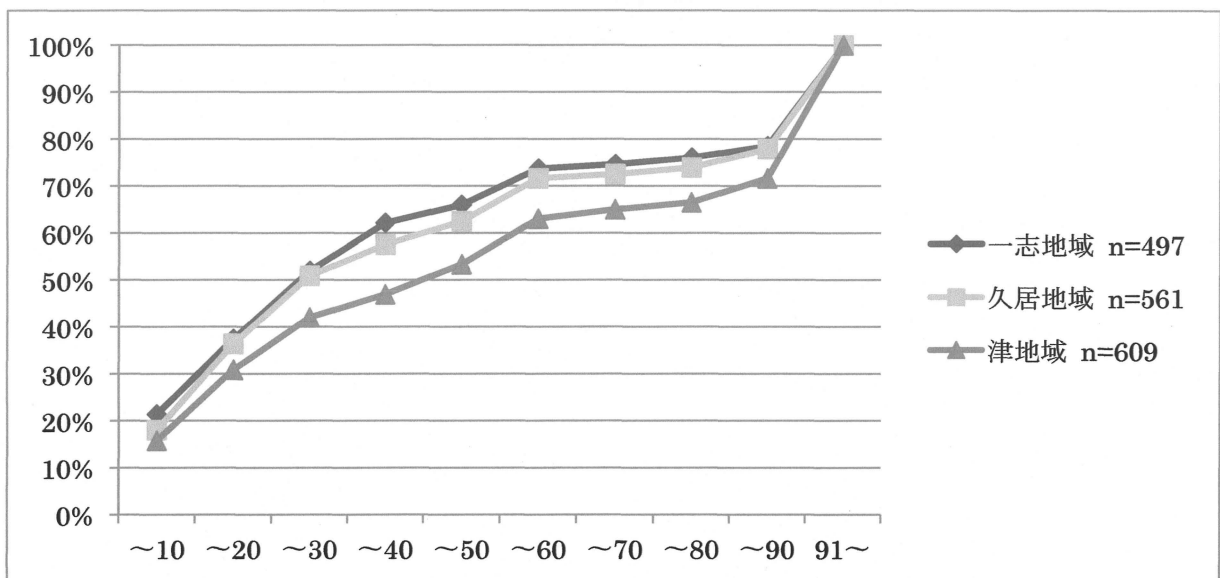


図4-3 各地域別にみた親世帯までの時間距離の累積グラフ

4-2-2 親が津・松阪市内にいる人の時間距離

図4-4に親が津・松阪市内にいるという人に限った親世帯までの所用時間を表し、図4-5にその累積グラフを示す。親が津・松阪市内に親がいるという人に限った親世帯までの時間距離を見ていくと、どの地域も10分以内という人が最も多く、各地域で3割以上ある事が分かる。20分以内という人も多く、一志地域では25%、津地域、久居地域では3割以上あり、それ以上かかるという人は徐々に減少していく。

累積グラフをみると、20分以内という人が半数以上を越え、40分以内だと各地域共に9割以上となる。したがって親が津・松阪市内にいる場合、多くの人は40分以内で親の居住地に到達でき、それ以上かかる人はわずかにしかいない。

図4-2および図4-3でみたように全体でみると1時間以上かかる人も多数みられたが、これは津・松阪市外に親がいるという人であることが分かる。

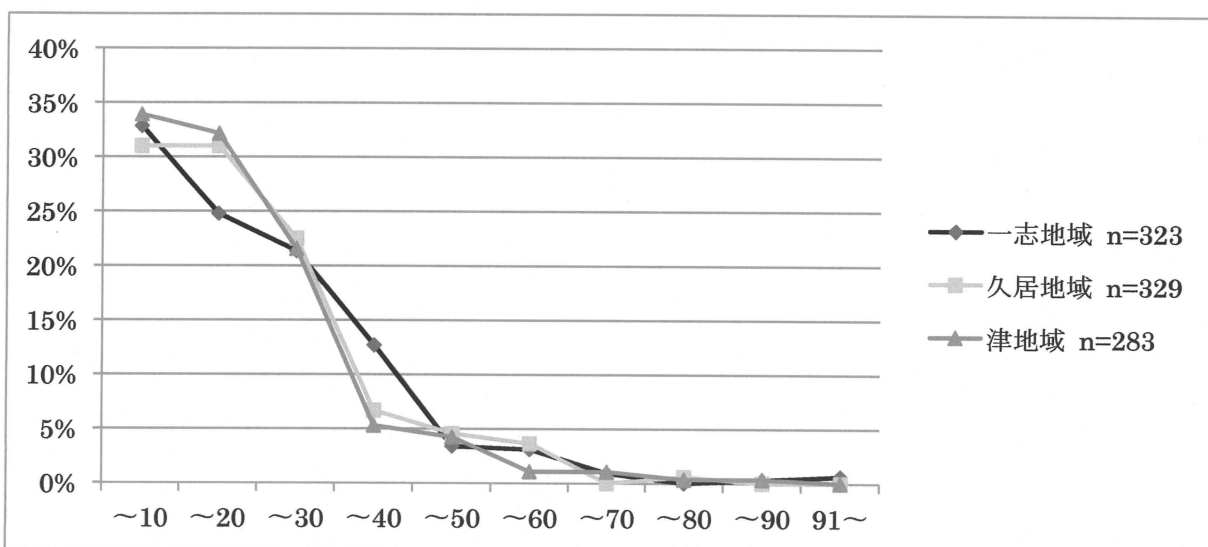


図4-4 親が津・松阪市内にいる場合の親世帯までの時間距離

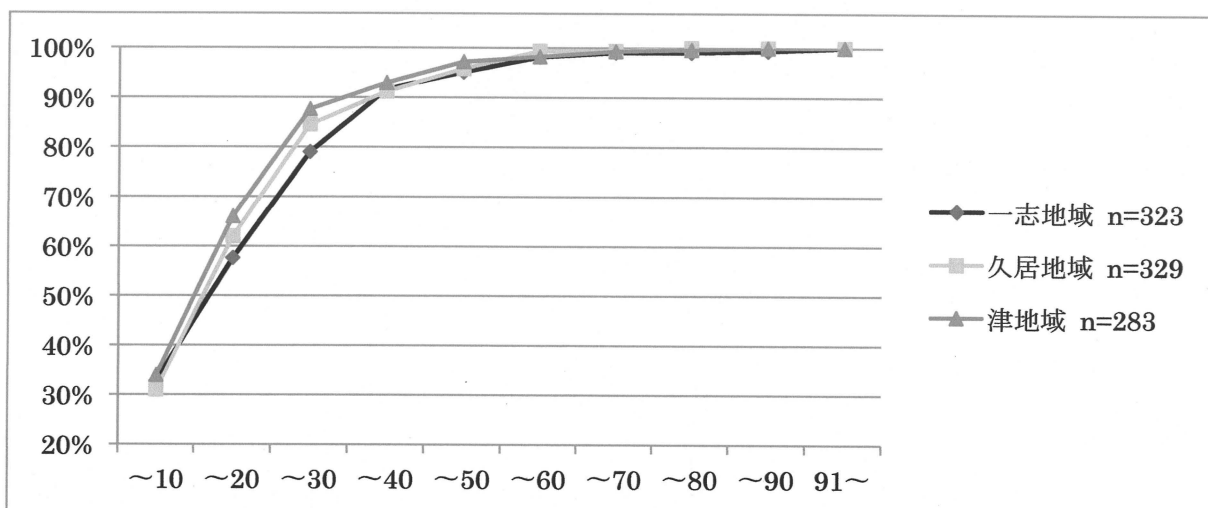


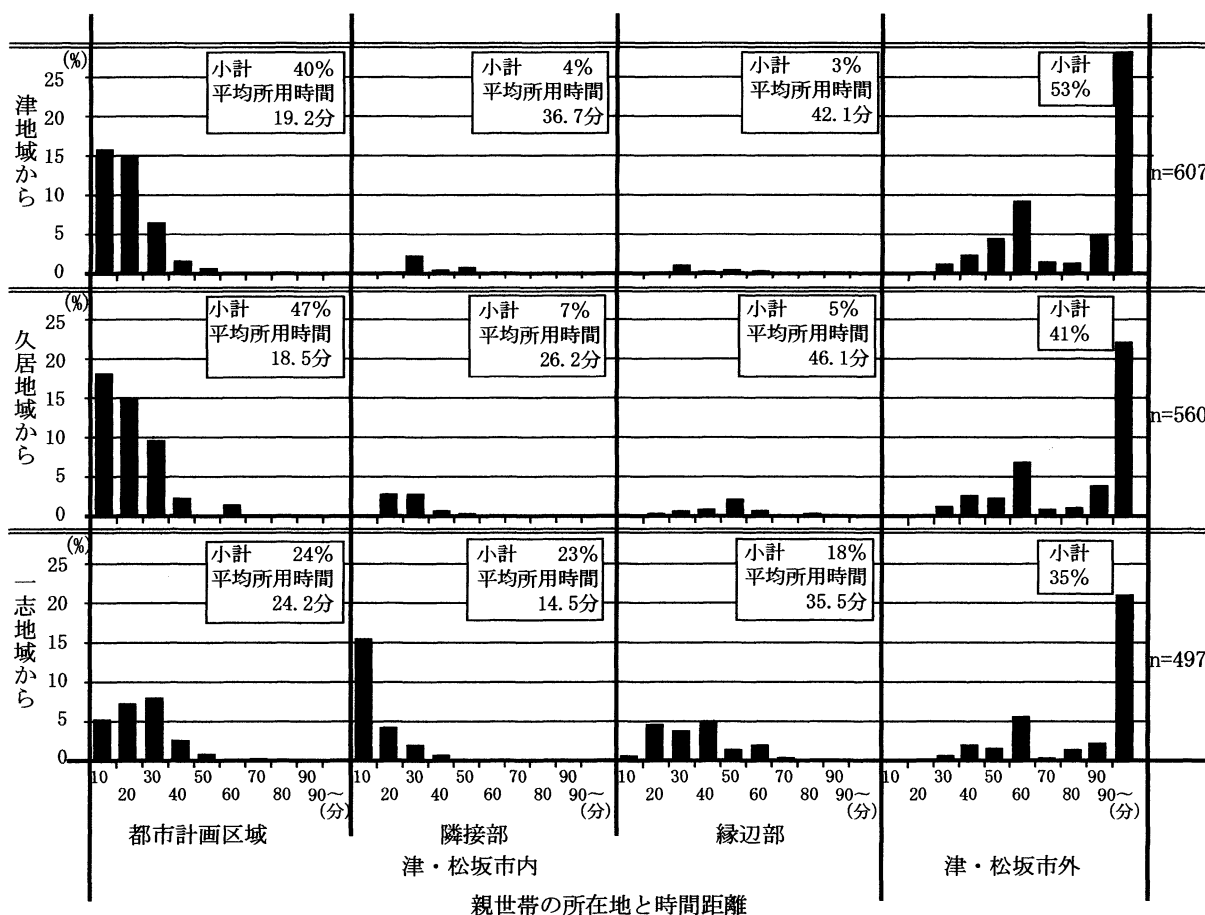
図4-5 親が津・松阪市内にいる場合の親世帯までの時間距離の累積グラフ

4-2-3 各地域別に親の所在地別にみた親までの時間距離

親世帯の所在地別にその時間距離をみていく。図4-6は、各地域別に各居住者の親世帯の所在地を津・松阪市内の都市計画区域、隣接部、縁辺部、そして津・松阪市外の4つの地域別に、そこまでの時間距離を表したものである。

まず都市計画区域に親がいるという人の時間距離を見ていく。津、久居地域から都市計画区域内の親までの時間距離は10分以内が一番多く、ほとんどの人が40分以内に収まる事が分かる。一方、一志地域からだと30分までというところにピークがある。しかし40分以内に収まる人が多い点は津、久居地域で共通している。平均時間に着目すると、津地域が19.2分、久居地域が18.5分となり20分以内となり、この二地域間の差も小さい。しかし一志地域では24.2分と津、久居地域に比べると長い傾向にある事がわかる。

次に隣接部に親がいるという人に着目すると、津、久居地域ではそれぞれ4%、7%と少ない。また所用時間をみると津では20分以内という人はいない。また久居地域では10分以内という人がいない。一方一志地域では隣接部に親がいるという人が多く、さらにその時間距離は10分以内が最多で15%以上ある。平均所用時間を見ていくと、津地域が36.7分、久居地域が26.2分、一志地域が14.5分となっており、一志地域が一番時間距離が短く、次に久居地域、津地域の順となっている。



*親が他界、同居、親までの時間距離が不明、親の所在地不明を除く

図4-6 各地域別にみた親世帯の所在地別と時間距離の関係

親が縁辺部に居住している場合を見ると、一志地域では18%見られるが、津地域で3%、久居地域で5%となっており、一志地域に比べ少ない。時間距離に着目すると、一志地域ではばらつきがありはっきりとピークを読み取れないが、20分～40分の間によく見られる。津地域、久居地域からの場合は元のサンプル数が少ない上にばらつきが見られるためピークを読み取りづらいが、津地域では30分以内という人も見られる。また久居地域では50分以内という人が比較的多いようである。平均時間は津地域が42.1分、久居地域が46.1分であるのに対し、一志地域では35.5分と他地域に比べると短く、一志地域から縁辺部への所用時間は他地域に比べると短いと言える。

親が津・松阪市外にいるという人は1時間半以上という人が最多となっており、親の所在地まで1時間かからずに着くという人は少ない。

以上のことから、各地域の立地を分析すると、都市計画区域へは、津、久居地域の方が一志地域と比較して時間距離で見ると近いと言える。また隣接部へは、一志地域が一番近く、久居地域、津地域の順に時間距離が大きく遠いと言える。また縁辺部はサンプル数が少ないものの、やはり一志地域の時間距離が一番小さく、縁辺部へのアクセスがこの3つの地域の中では一番良いと言える。

4-3 親との交流頻度

4-3-1 各地域別の交流頻度

各地域別の交流頻度を図4-7に示す。交流頻度は「ほぼ毎日」「週数回」「月数回」「年数回、またはほとんどない」の4段階でアンケートをとった。それなりに交流があると言えるのは「月数回」までと言える。

各地域とも「ほぼ毎日」交流があるというように非常に交流頻度の高い人は3%~4%と、がわずかであるが見られる。また「週数回」という交流頻度を合わせるとどの地域も17~18%の人が週数回という頻度で交流がある事が分かる。「月数回」という交流頻度はどの久居地域、一志地域では3割を超える。また「月数回」津地域では29%と3割弱である。ここでそれなりに交流頻度があるといえる「月数回」以上の交流があるのは、一志地域、久居地域でそれぞれ53%、55%と半数を超える。津地域は他の二地域と比較して若干少なく47%であるが、半数近くが「月数回」以上の交流があると言える。

一方親との交流頻度が「年数回、またはほとんどない」とする人は津地域で53%と半数以上、久居地域、一志地域では47%となっており、各地域とも交流がそれなりある人と、あまりない人は約半数ずつであることが分かる。

以上のから、親との交流頻度は各地域で大きな差は見られないといえる。約半数の人はそれなりに交流頻度があるといえる「月に数回」の交流があると回答している。

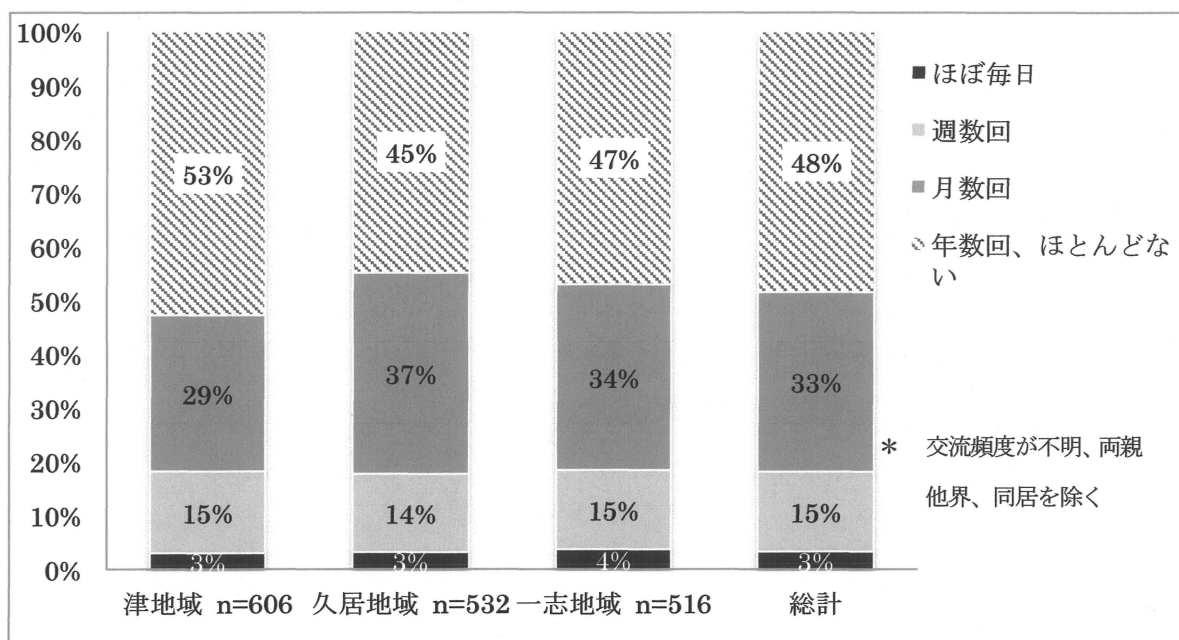


図4-6 各地域別にみた親世帯の所在地別の時間距離

4-3-2 時間距離と交流頻度の関係

1) 交流頻度別にみた時間距離

時間距離別にみると、時間距離が短い程その交流頻度は高い事が分かった。そこで次に交流頻度別にその時間距離を見ていく。図 4-6 で見たように「ほぼ毎日」という交流頻度は各地域とも 3~4%と非常に少ないのでここでは「ほぼ毎日」と「週数回」を合わせて「週数回以上」とし、親との交流頻度が高頻度である「週数回以上」、交流頻度が中頻度である「月数回」、低頻度である「年数回、またはほとんどない」の 3 段階として、各交流頻度別に時間距離を見ていく。図 4-9 は交流頻度別の時間距離を各地域別に見たもので、最下段には各地域の総計を表したものになっている。

図 4-8 より、「週数回以上」に着目すると、各地域とも 10 分以内という割合が多く、20 分を超えるとその割合は大きく減少する。

「月数回」という人は各地域で若干のばらつきがあるが、総計の段をみると 20 分にピークがあり、その前後の割合が高い。また 60 分を超えると少なくなる。

「年数回、またはほとんどない」に着目すると圧倒的に 90 分を超えるとその割合が大きくなる傾向があり各地域とも共通している。

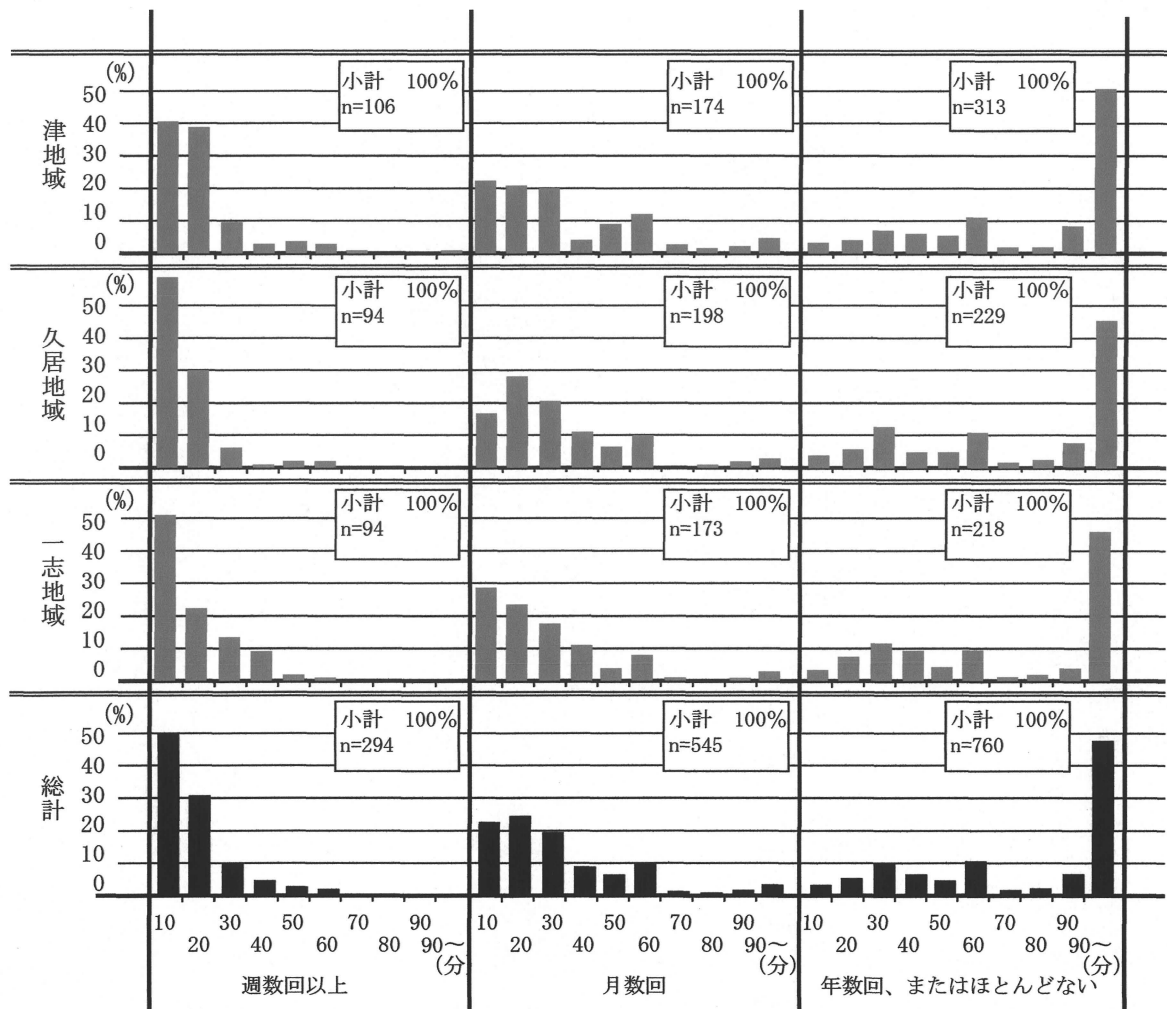


図 4-8 地域別の交流頻度別にみた時間距離

次に親との交流頻度が中頻度以上であるものに着目していく。親との交流頻度が「週数回以上」という人の累積グラフを図4-9に示す。図4-9より週数回以上の交流があるという人は久居、一志地域で20分以内に親がいるという人が8割を越える。津地域でも30分以内に親がいるという人が8割を超え、多くの人が20分以内にいると言える。

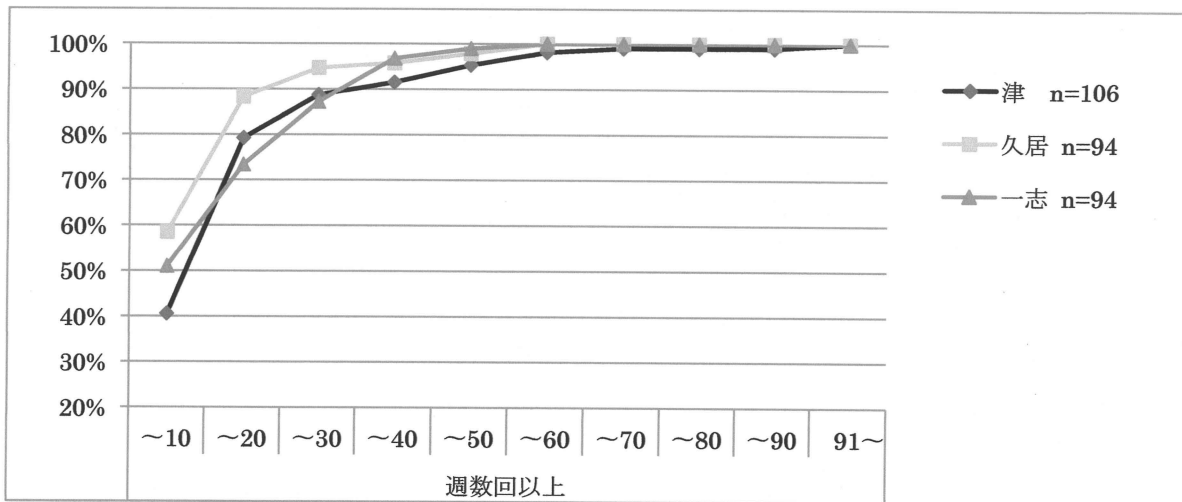


図4-9 親との交流頻度が週数回以上の人の時間距離の累積グラフ

次に親との交流頻度が週数回以上と月数回を合わせ、中頻度以上の交流を持っている人の親との時間距離に着目し、累積グラフを見ていく。図4-10は、月数回以上の親との交流がある人の時間距離を累積グラフで表したものである。図4-10より、月数回以上の交流となると、週数回よりもその時間距離は長くなる。親との交流が月数回以上であるとする人は久居地域、一志地域では親との時間距離が40分以内という人が8割を超える。また津地域でも40分の時点で7割を越え、50分以内になると8割を超える。このことから、月数回以上の交流頻度を保つためには40分以内にいることが望ましいと言える。

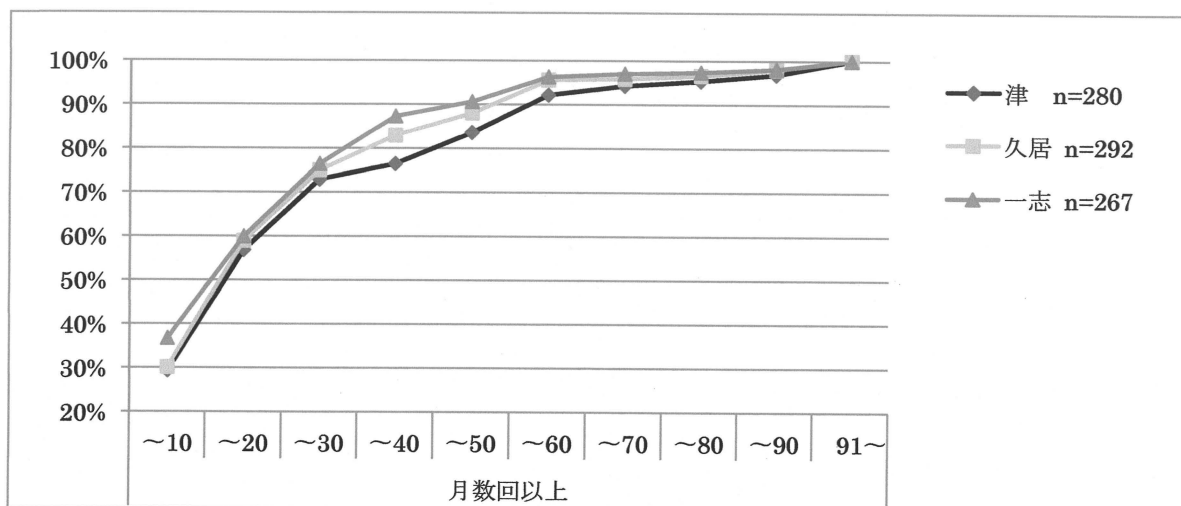


図4-10 親との交流頻度が月数回以上の人の時間距離の累積グラフ

2) 時間距離別の交流頻度

親世帯までの時間距離とその交流頻度の関係を見ていく。図4-11 上部は一志地域、久居地域、津地域の各地域別に交流頻度と親までの時間距離の関係を表したものであり、図4-11 下部はこの3地域の総計を表したものである。図4-11 上部の地域別のものをみると、各地域とも共通して若干のばらつきがみられるものの、時間距離が短い程交流頻度が高い傾向にある事が分かる。特に10分以内に親が居住している人の場合、「ほぼ毎日」という回答がどの地域でも1割ほどみられる。

図4-11 下部の一志地域、久居地域、津地域の総計をみると、サンプル数が増えるためばらつきが減少し、親との交流頻度は時間距離によって変化し、時間距離が短ければ短い程その交流頻度高くなる傾向がはっきりと分かる。60分に「ほぼ毎日」という人が0.7%（実数では一人）いるが「ほぼ毎日」という回答は40分までである。「ほぼ毎日」というような頻繁な交流は40分以内が限界であるといえる。

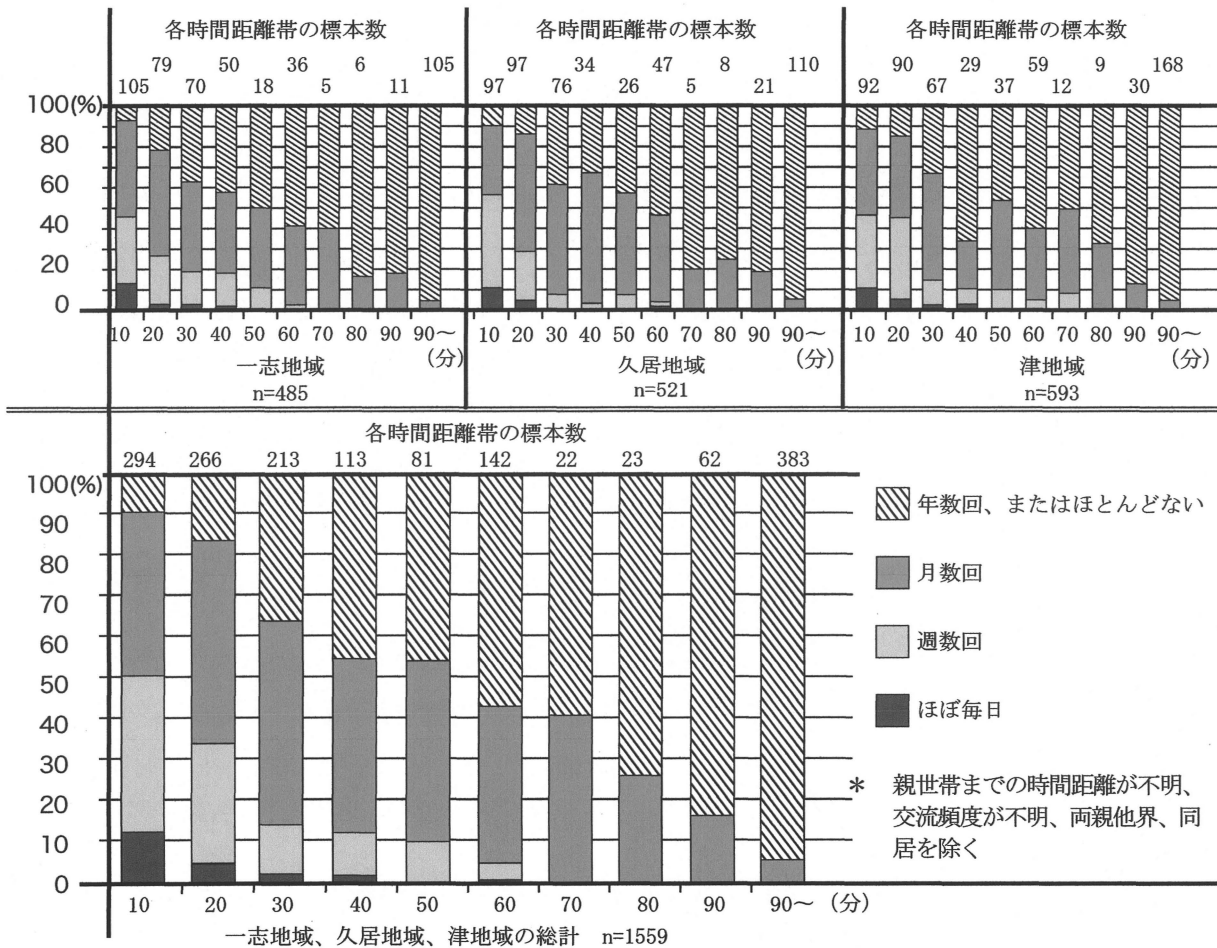


図4-11 親との交流頻度と親までの時間距離の関係

3) 親の所在地別の交流頻度

親までの時間距離に近い程その交流頻度があがることが分かった。また4-2-3では、図4-6を用いて各地域別に親間での時間距離を調べた結果、一志地域は隣接部にいる親までの時間距離が一番近く、また津地域や久居地域と比べて縁辺部への時間距離も近いと言えた。逆に津地域や久居地域では都市計画区域内に居住する親までの時間距離が短い事を確認した。

図4-12では親の所在地と各地域別にみた交流頻度を表したものである。まず親が津・松阪市外にいる場合の交流頻度は非常に低いことが分かり、津・松阪市内である都市計画区域、隣接部、縁辺部ではどの地域も津・松阪市外の交流頻度と比べると高いと言える。

親が都市計画区域内にいる人を見ると、津地域、久居地域、一志地域の順に交流頻度が高い事が分かる。逆に親が隣接部にいる場合は一志地域の交流頻度が最も高く、久居地域、津地域の順に交流頻度が減少していくことから、それぞれの地域から近くに親がいる場合の交流頻度は高めにできる傾向がある事が分かる。

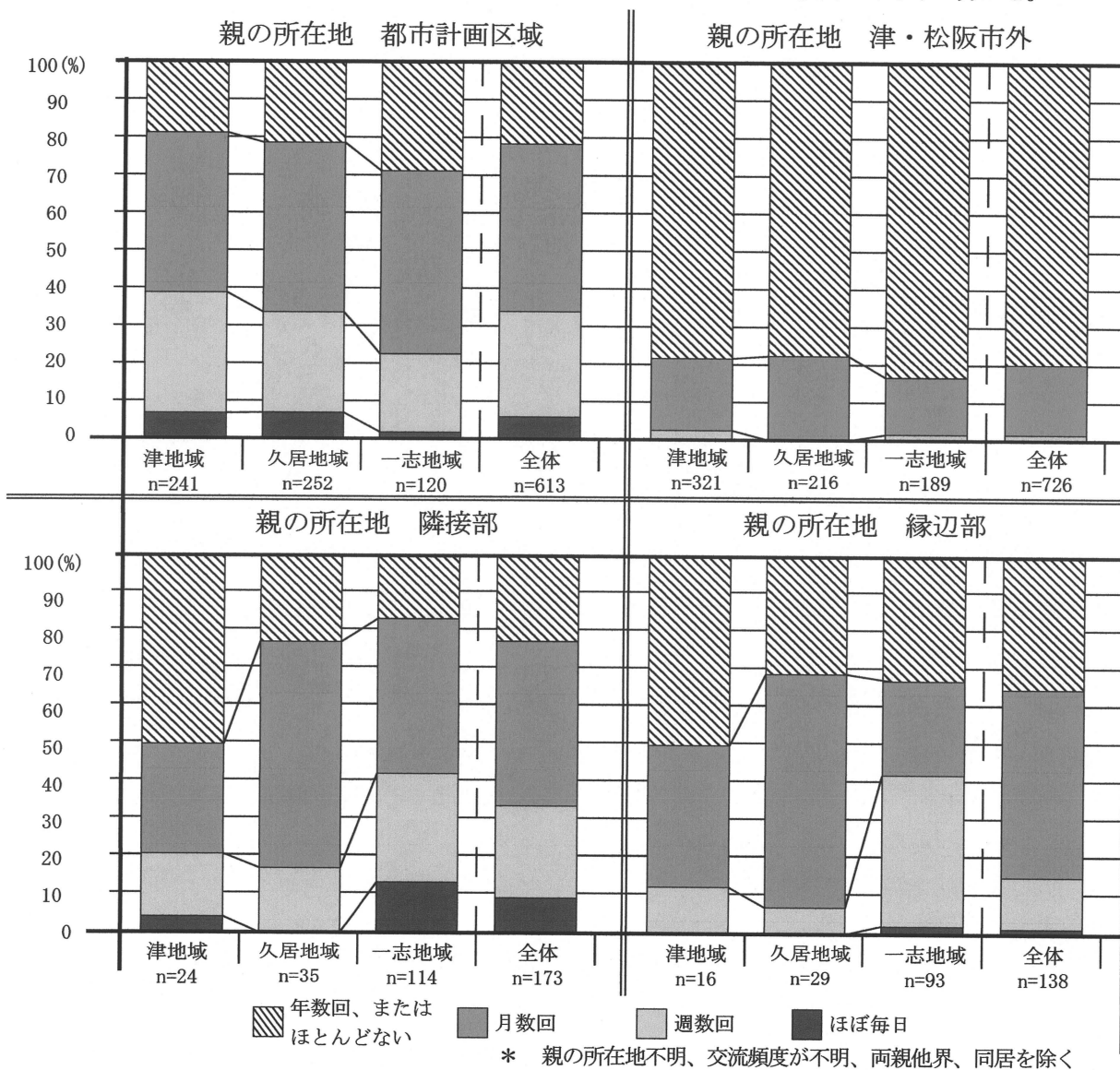


図4-12 親の所在地別と地域別にみた交流頻度

* 親の所在地不明、交流頻度が不明、両親他界、同居を除く

親が縁辺部にいる場合を見ると、津地域で縁辺部に親がいるという人が16人と、久居地域で29人と少ない。居地域と一志地域で比較すると、月数回以上の交流頻度で見るとほぼ同じであるが、週に数回という交流は一志地域の方が多い。同じく一志地域では交流頻度がほぼ毎日という人も見られるが、久居地域ではみられない。

以上親との交流の内容をまとめていくと、親世帯までの時間距離と交流頻度との間には相関があり、時間距離が短い程その交流頻度は高くなる。月数回以上の交流のある人は親までの時間距離が40分以内の所にあるという人が8割程度となる事と、ほぼ毎日交流があるという人が40分を超えるとなくなることから、親との交流を頻度高く持ちたいという人にとっては40分以内に居住することが一つの目安と言える。

また実際に親の所在地と各地域別に交流頻度をみると、各地域に近い地域に親が居住している人の方が交流頻度が高いことが分かった。特に一志地域では親が縁辺部に居住しているという人が多く、またその交流頻度が高い事が確認できた。

4-4 親との交流目的

4-4-1 親との交流目的の概要

この章では親との交流目的を見ていく。表 4-7 に示すように、交流目的を具体的な『親世帯への生活支援』と言える「病院への送迎のため」「掃除・洗濯や調理等の手伝いのため」「食事の世話等の介護のため」「買物の送迎や買物の代行のため」「家業や農業の手伝いのため」「差し入れなどの受け渡しのため」の 6 項目と、具体的な生活支援とは言えないが、『季節』によって必要な支援や家族としての『精神的』な支えとなるような目的である「家族団らんを過ごすため」「法事やお墓の手入れのため」「両親の様子確認のため」「孫の顔を見せるため」「祭りや地域の行事等を手伝うため」5 項目、親への生活支援ではなく『親世帯からの支援』として、「子供の子守りをしてもらうため」の 1 項目と「その他」の計 13 項目で聞いている。この結果を用いて図 4-13 に、各地域別にみた交流目的を表した。なおこの調査では、入居時の交流目的を用いているが、一志地域の高野団地にて行ったアンケートでは現在の交流目的のみしか聞いていないため、一志地域の高野団地のデータのみ現在の親との交流目的を用いて比較している。このため、現在親が他界によっていない場合が多数あるため、一志地域ではサンプル数が多少少なくなる。

図 4-13 は、交流目的を上から多い順に表し、図 4-14 は津、久居、一志地域の地域別に交流目的を見たもの

表 4-7 親との交流内容の分類

生活支援		精神的、季節性	その他
親への生活支援	親からの支援		
病院への送迎のため	子供の子守りをしてもらうため	家族団らんを過ごすため	その他
掃除・洗濯や調理等の手伝いのため		法事やお墓の手入れのため	
食事の世話等の介護のため		両親の様子確認のため	
買物の送迎や買物の代行のため		孫の顔を見せるため	
家業や農業の手伝いのため		祭りや地域の行事等を手伝うため	
差し入れなどの受け渡しのため			

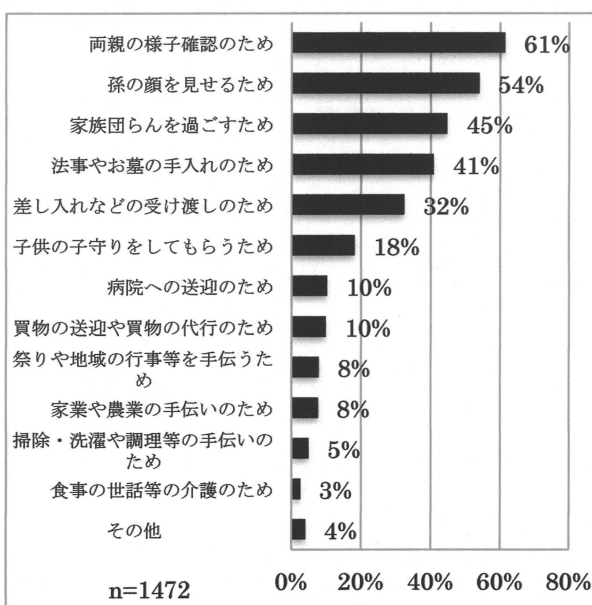


図 4-13 親との交流目的 (MA)

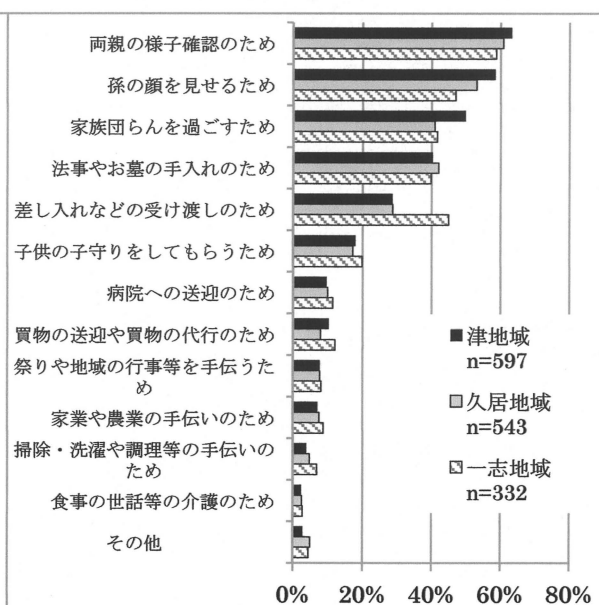


図 4-14 地域別にみた親との交流目的 (MA)

である。まず図 4-13 より、親との交流目的として「両親の様子確認」「孫の顔見せるため」の 2 項目は半数を越え、多くの人が行っていると言える。続く項目は「家族団らんを過ごすため」「法事やお墓の手入れのため」は 4 割を越え、いずれも精神的、季節的な項目となっている。続く項目は親への生活支援の内容として最多となる「差し入れの受け渡しのため」の 3 割、また親世帯からの生活支援である「子供の子守りをしてもらうため」が約 2 割となっている。他の親世帯への生活支援の項目はいずれもそれほど多くないが、「病院への送迎のため」「買物の送迎や買物の代行」は 1 割程みられ、こうした生活支援は一定数見られることに着目したい。

また図 4-14 に示した地域別の交流目的から、「差し入れ等の受け渡しのため」の項目で一志地域が他の地域より 15%程多く見られることと、「孫の顔を見せるため」の項目で津地域と久居地域の間には 11%程の差がある事以外は各地域間による大きな相違は見られない事を確認しておく。

4-4-2 時間距離別の交流目的

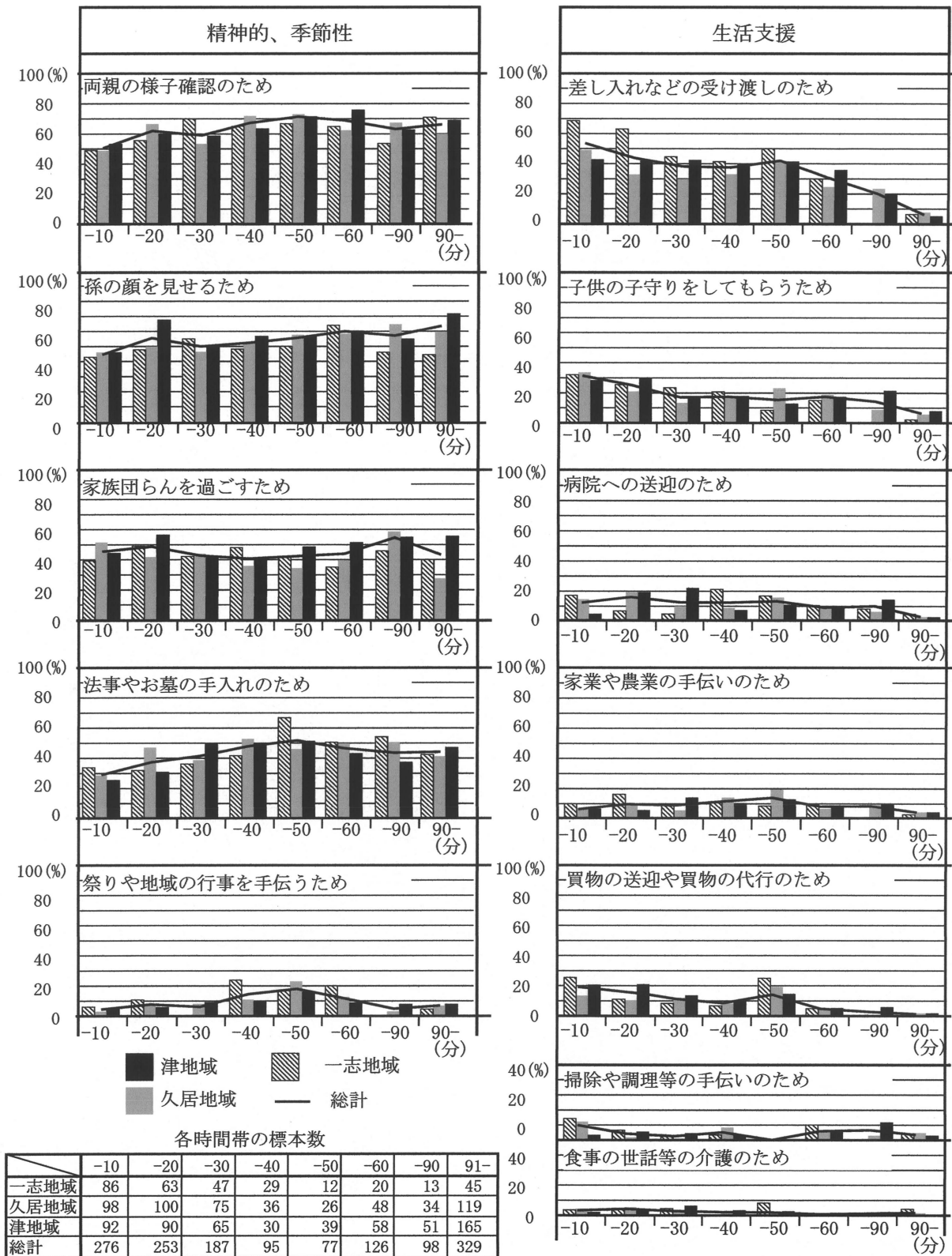
次に時間距離別の交流目的を見ていく。図 4-15 は各交流目的をそれぞれ親世帯までの時間距離別に見たものである。図 4-15 左側に「精神的、季節性」を、右側には「生活支援」の項目を配置し、上から図 4-13 でみた親との交流目的として多かったもの順に並べた。

まず図 4-15 左側の『精神的、季節性』に関わる項目を見ていく。「孫の顔を見せるため」「両親の様子確認のため」「法事やお墓の手入れのため」という項目をみると、時間距離が長くなるにつれてこれらの項目を選択する人が増える傾向が読み取れる。これは時間距離が近いというは交流頻度が高くなる傾向がある事を前節で述べたが、例えば親との交流日常的にある人にとってあえて「親の様子確認」をしなくても、その親の様子は分かっている等、これらの項目がそもそも会う目的となりにくいためと考えられる。逆に時間距離が長く、遠い所に住んでいる場合、このような交流目的になっていると考えられる。

一方、「家族団らんを過ごすため」「祭りや地域の行事を手伝うため」の 2 項目に着目すると、これらの項目を選択する人の割合は時間距離によって大きな変化はみられず、横ばいの変化となっている。特に「家族団らんを過ごすため」という項目においては各自間距離において半数近いひとが選択しており時間距離によらず多くの人にとって重要な交流目的の一つであるといえる。

次に図 4-15 の右側、『生活支援』の項目をみていく。こちらの項目は図 4-13 で示したように、選択する人がもともと少ない項目であった。まず「差し入れの受け渡しのため」「子供の子守りをしてもらうため」「買物の送迎や買物の代行のため」の 3 項目に着目すると、時間距離に近い人程これらの項目を選択する人が増える傾向がある。また「病院への送迎のため」という項目でもわずかながら時間距離が短い人の方が選択する人の割合が高いと言え、これらの交流目的は時間距離に近い程行われやすいと言える。またそれら以外の項目でも、ほぼ横ばいの傾向がみられ『精神的、季節性』の項目で見られたような時間距離が長いほど選択する人の割合が増えるといった項目は見られない。これは例えば「家業や農業の手伝い」と行った項目では必要であるなら多少遠くても行くというような人が多い事が考えられる。

以上のことから、『精神的、季節性』としての交流目的はその時間距離によらず、なおかつ多くの人が行っている交流であると言える。一方『精神的、季節性』の「差し入れの受け渡しのため」「子供の子守りをして



* 親までの時間距離不明、交流目的不明、両親他界、同居を除く

図 4-15 親世帯までの時間距離別にみた交流目的(MA)

もらうため」「買物の送迎や買物の代行のため」「病院への送迎のため」交流目的は時間距離が短い程これらの交流目的を達成するためには近くに住んでいる方が多く行われていると言える。また「家業や農業の手伝い」「掃除や調理の手伝いのため」「食事の世話や介護のため」といった項目では時間距離によらずほぼ横ばいで、なおかつ選択する人が非常に少ない項目である。これら項目の生活支援は必要であれば時間距離に関わらずその時間距離が大きくても行っているという事が分かる。

4-4-2 時間距離別の交流目的

次に交流頻度別の交流目的をみていく。図 4-16 は各交流目的をそれぞれ親との交流目的別に見たものである。図 4-15 と同様に左側に「精神的、季節性」を、右側には「生活支援」の項目を配置し、上から図 4-13 でみた親との交流目的として多かったもの順に並べてある。なお交流頻度は「ほぼ毎日」「週数回」を合わせて「週数回以上」とし、また「年数回、またはほとんどない」という項目を「年数回以下」と表現している。

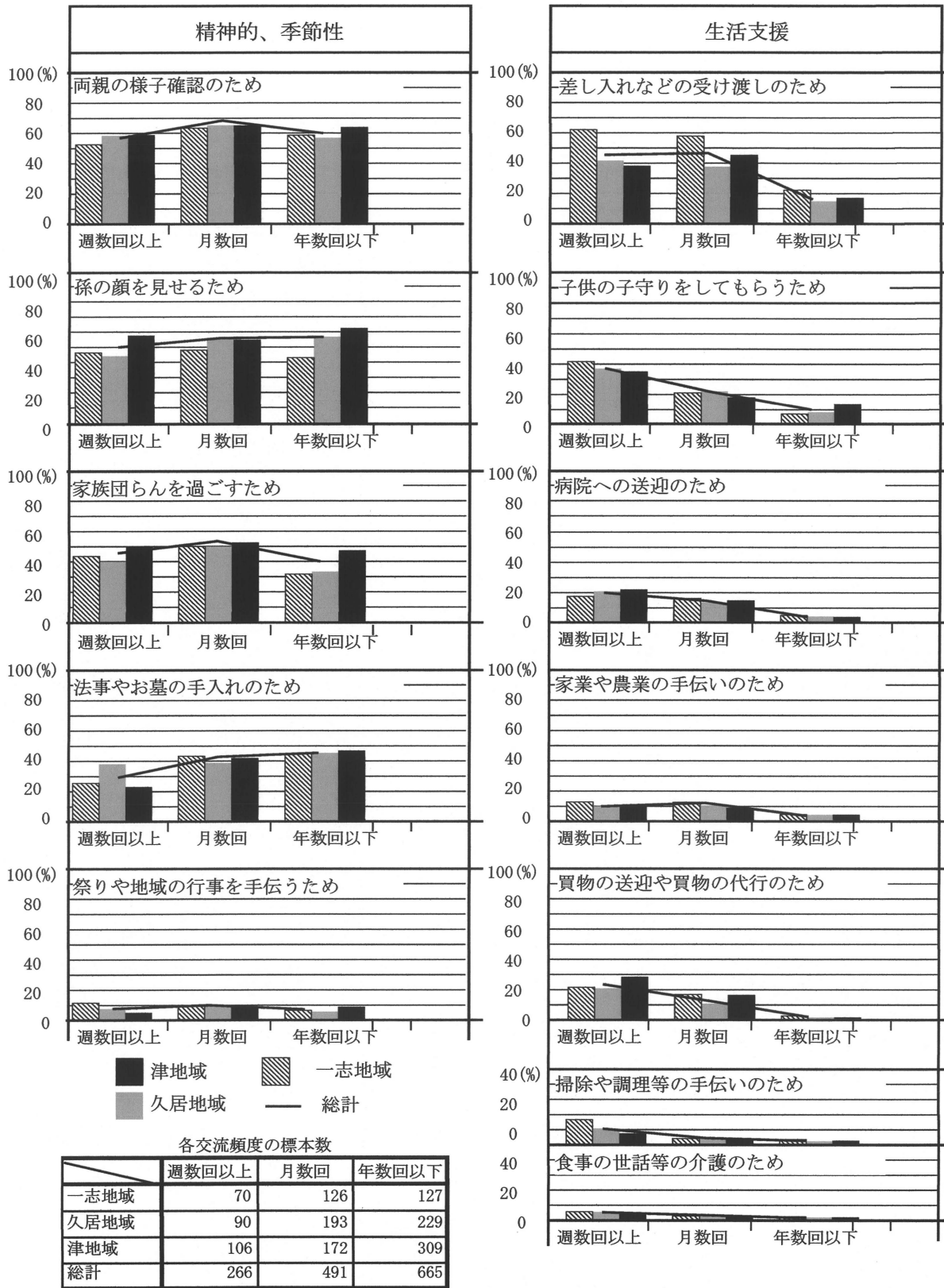
まず図 4-16 左側の『精神的、季節性』に関わる項目を見ていく。「法事やお墓の手入れのため」の項目をみると、交流頻度が高くなるにつれてこれらの項目を選択する人が増える傾向が読み取れる。このことから交流頻度が低い人でも法事等の特別な行事や、お盆等に帰省しているのではないかと考えられる。

一方、「両親の様子確認」「孫の顔を見せるため」「祭りや地域の行事を手伝うため」「家族団らんを過ごすため」「祭りや地域の行事を手伝うため」の 5 項目に着目すると、これらの項目を選択する人の割合は時間距離によって大きな変化はみられず、ほぼ横ばいの変化となっている。このことからこれらの交流目的は交流頻度に関わらないと言える。特に両親の様子確認」「孫の顔を見せるため」「祭りや地域の行事を手伝うため」「家族団らんを過ごすため」の 4 項目は多くの人を選んでおり、交流頻度に関わらずこれらを交流目的とする人が多い。

次に図 4-15 の右側、『生活支援』の項目をみていく。『生活支援』に関わるすべての項目で交流頻度が高いほどこれらの項目を目的とする人の割合が高まる傾向にある事が分かる。「差し入れ等の受け渡しのため」「家業や農業の手伝いのため」の 2 項目では「週数回以上」と「月数回」までは変化が少ないが、「年数回以下」となるとこれら 2 項目の割合は小さくなる。「子供の子守りをしてもらうため」「病院への送迎のため」「買物や農業の手伝いのため」「掃除や調理等の手伝いのため」の 4 項目では交流頻度が高いほどこの項目を選ぶ人の割合が高い事ははっきりと分かる。ただし「食事の世話等の介護のため」という項目では、週数回以上という人の方がこの項目を選ぶ人の割合が高い傾向にはあるが、元々この項目を選んでいる人は少ない。

以上のことから交流頻度が高い人程これらの『生活支援』の項目を選択する人が多い事が分かった。さらに交流頻度の高い人は、交流頻度の低い人に比べこうした『生活支援』をより頻繁に行っているのではないかと推測される。

また図 4-15 の時間距離と交流目的の関係と比較すると、『精神的、季節性』に関わる項目では同じような結果となっており、このような交流目的は時間距離と交流頻度によらず、多くの人によって行われていると言える。一方『生活支援』に関わる項目に着目すると、時間距離別にみた場合「病院への送迎のため」という項目ではグラフの、交流頻度別にみた場合の方が交流目的に与える影響がより鮮明に現れていると言える。高さの



* 親との交流頻度不明、交流目的不明、両親他界、同居を除く

図 4-16 親との交流頻度別にみた交流目的(MA)

方がその交流目的に与える影響がはっきり現れていると言える。特に「病院への送迎のため」に着目すると、時間距離でみた場合グラフの傾きはわずかに右下がりであるのに対し、交流頻度別にみると年数回ではほとんどこの項目を選択する人がおらず、より鮮明に右下がりであることが分かる。

5 章 居住地選択の条件

5-1 居住地選択の条件の概要

5-2 親との時間距離と入居条件

5-3 職場との時間距離と入居条件

5-4 親と職場までの時間距離

5-5 小結

5-1 居住地選択の条件の概要

各世帯の入居時の条件を見ていく。アンケート調査にて世帯単位に入居の条件を「鉄道駅に近いこと」「小中学校に近いこと」「通勤の便利さ」「価格の手頃さ」「住み良い団地としての評判」「世帯主、または配偶者の実家に近いこと」「住宅の広さや間取り」「周辺の生活利便施設が充実」「高校への通学が便利なこと」「知人や友人が近くにいたこと」「市役所や役場があり、地域の中心地区だから」「バスの便が良いこと」「周辺の文化施設が充実」「庭付き一戸建てである」「その他」の15項目で聞いている。但し、一志地域の高野団地においては「庭付き一戸建てである」という項目を含まないでアンケートを行ったため比較できない。他の住宅団地ではこの項目を含めて行っているため参考のためこの項目も含めて示す。図5-1は入居条件を表し、全体でみた時の入居条件として多かったものを上から順に並べたものである。全体で見ると、「鉄道駅に近いこと」「小中学校への近さ」を挙げる世帯が多く、「通勤の便利さ」が続き、これらの3項目では4割を超える世帯が入居条件として挙げている。またまた「価格の手頃さ」を挙げる世帯が多いことから、手頃な一戸建を手に入れる為という人が多い事が分かる。

本研究で着目する親世帯との関係では「世帯主、または配偶者の実家に近いこと」を挙げる世帯が全体の

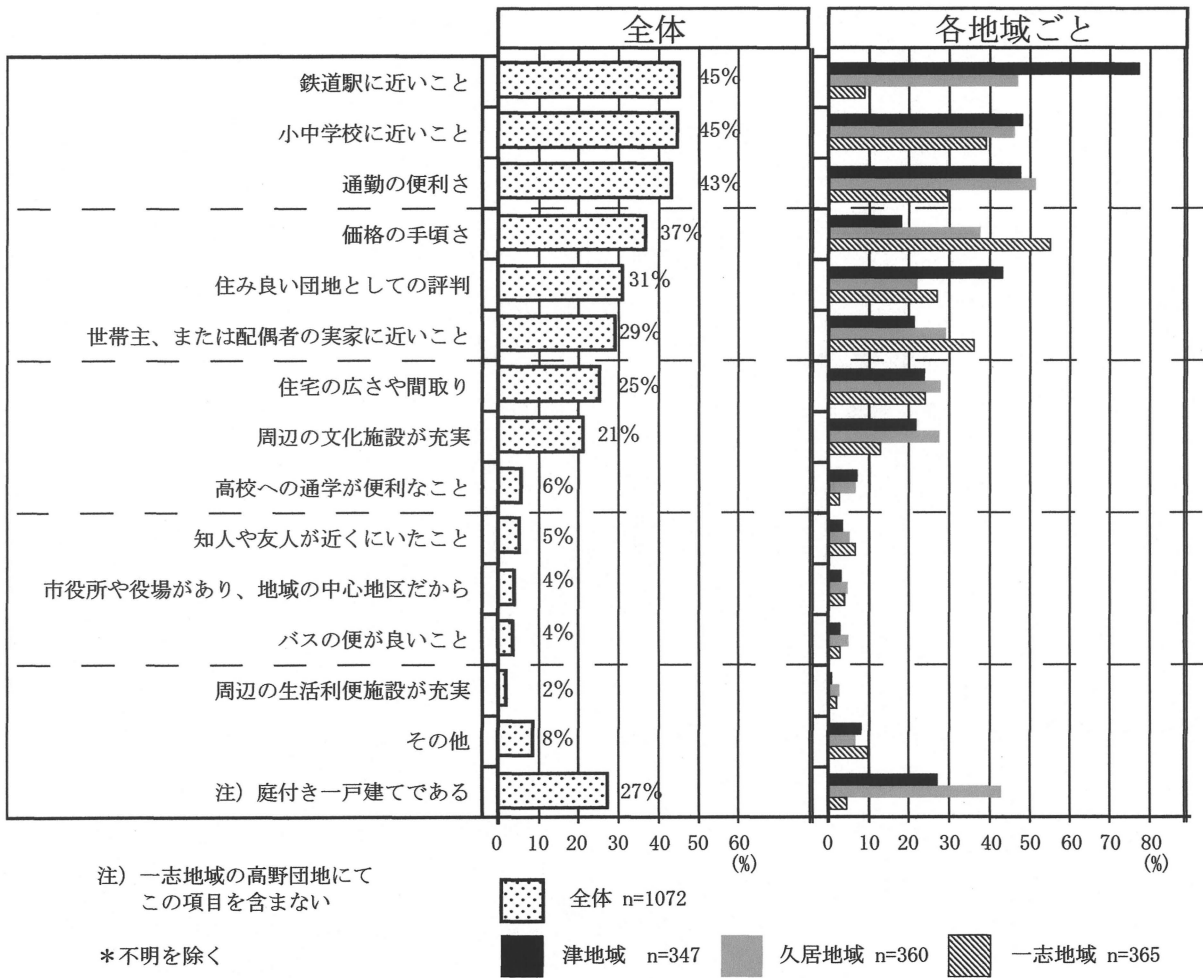


図5-1 各世帯の入居条件 (MA)

29%と3割近くの世帯が選択しており、重要な入居条件のひとつとなっている世帯があることが分かる。「高校への通学が便利なこと」「知人や友人が近くにいたこと」「市役所や役場があり、地域の中心地区だから」「バスの便が良いこと」「周辺の文化施設が充実」の5項目は選択する世帯が少なく、居住地選択の条件として重視されていないことが分かる。

図5-1 右側の各地域別にみると、地域ごとに選択される項目に違いが見られるものと、ほとんど同じものがある。地域間に大きな違いが見られない項目としては、比較的多くの世帯が選択した「小中学校に近い事」、「住宅の広さや間取り」と、選択する世帯の少なかった「高校への通学が便利なこと」「知人や友人が近くにいたこと」「市役所や役場があり、地域の中心地区だから」「バスの便が良いこと」「周辺の文化施設が充実」の5項目、計7項目で大きな差はみられない。まず「小中学校に近い事」は立地によらず、子供のいるような世帯では重視されているといえる。また「住宅の広さや間取り」は立地条件と関わらない項目であることから、地域間に差が見られなかったといえる。またその他の5項目は選択する人がもともと少ない項目であるので差がつきにくかったと考えられる。

次に立地地域間で居住地選択の条件として差が出た項目は「鉄道駅に近いこと」「通勤の便利さ」「価格の手頃さ」「住み良い団地としての評判」「世帯主、または配偶者の実家に近い」の5項目である。ここでは立地条件に関わる「鉄道駅に近いこと」「通勤の便利さ」「世帯主、または配偶者の実家に近いこと」の3項目に着目していく。

まず「鉄道駅に近いこと」の項目に着目すると、津地域では8割の人が選択しており、非常に多くの世帯が重視した入居条件であることが分かる。久居地域でもこの項目を選択した世帯は半数近い。しかし一志地域でこの項目を重視したという世帯は1割に満たない。また「通勤の便利さ」の便利さを選択する人も、久居地域では半数以上、津地域でも半数近くの世帯が選択しているが、一志地域では3割程度である。ここで3章の通勤手段を思い出すと、津地域や久居地域では世帯主の場合電車通勤が2割程あったが、一志地域では1割に満たなかった点に着目すると「通勤の便利さ」と「鉄道駅の近さ」は重なる部分があると言え、そのことからこの2項目が一志地域に比べて高い理由であると考えられる。また同じく3章でみた勤務先の分析より、どの立地地域からも津地域への通勤が多いことから、その地域に近い立地にある津地域、久居地域において、一志地域よりもこの2項目を選択する世帯が多いという事がいえる。

次に「世帯主、または配偶者の実家に近いこと」に着目していく。こちらも4章でみたように親が津・松阪市内に親がいるという人が多かったのは一志地域であった。津地域では親が津・松阪市外にいるという人が多かった。以上の事から、一志地域で「世帯主、または配偶者の実家に近いこと」という項目を選択する世帯が多かったのではないかと考えられる。

以上のように、立地条件によって入居条件が変わる事が分かった。本章では各地域の立地条件を、親と職場の位置関係から整理し、入居条件の内特に「世帯主、または配偶者の実家に近い」「通勤の便利さ」の2項目に着目してその関係を次節より分析していく。

5-2 親との時間距離と入居条件

本章では親との時間距離と入居条件の確認をしていく。

5-2-1 世帯主と配偶者の親との位置関係

入居条件は世帯ごとに聞いているため、まず本節で各世帯の世帯主と配偶者のそれぞれの親までの時間距離をクロス集計でみていき、各世帯と親との時間距離の関係をみていく。図5-2は、表頭に配偶者の親までの時間距離を、表側には世帯主の親までの時間距離を表したものである。それぞれに該当する割合を円の大きさと表している。なお、「その他」の項目には、入居時に両親が他界している場合、親世帯までの時間距離が不明、および無効票が含まれる。これは、世帯主票が有効でも配偶者票が無効という場合等があるためである。ただし、世帯主、配偶者ともにその他に該当する場合を除いて表している。

4章で述べた通り、親との時間距離は交流頻度や交流目的に影響を与え、特に40分がひとつの目安となる時間である事が分かった。そこで世帯主、配偶者の親までの時間距離が共に40以内に居住する世帯をグループⅠ、世帯主の親のみ40以内に居住する世帯をグループⅡ、配偶者の親のみ40分以内に居住する世帯をグループⅢ、世帯主、配偶者の親が共に40分を超える場所に居住する場合、および同居やその他の場合をグループⅣと分類する。また表5-1は各グループに該当する割合を立地地域別にそれぞれ示したものである。

表5-1より、グループⅠである世帯主、配偶者の親が共に40分以内に居住するという人は、一志地域で33%と3割を超える一方、津地域では19%と2割弱であり一志地域と比較すると少ない。しかし配偶者の親のみ40分以内であるグループⅢをみると津地域が24%、久居地域が25%であるのに対し、一志地域では15%となっている。世帯主の親のみ40分以内のグループⅡの立地地域別の割合をみるとどの地域も2割弱でほとんど同じである。以上のようにグループⅠ、グループⅡ、グループⅢは、世帯主、配偶者の少なくともどちらかの親が40分以内に居住するというグループである。表5-2にこれら3グループの合計の割合を示している。表5-2より、各立地地域で世帯主、配偶者の少なくともどちらかの親が40分以内に居住するという人は6割を超える事が分かる。逆に世帯主、配偶者の親が共に時間距離40分を超えるという世帯は3~4割程度であると言える。

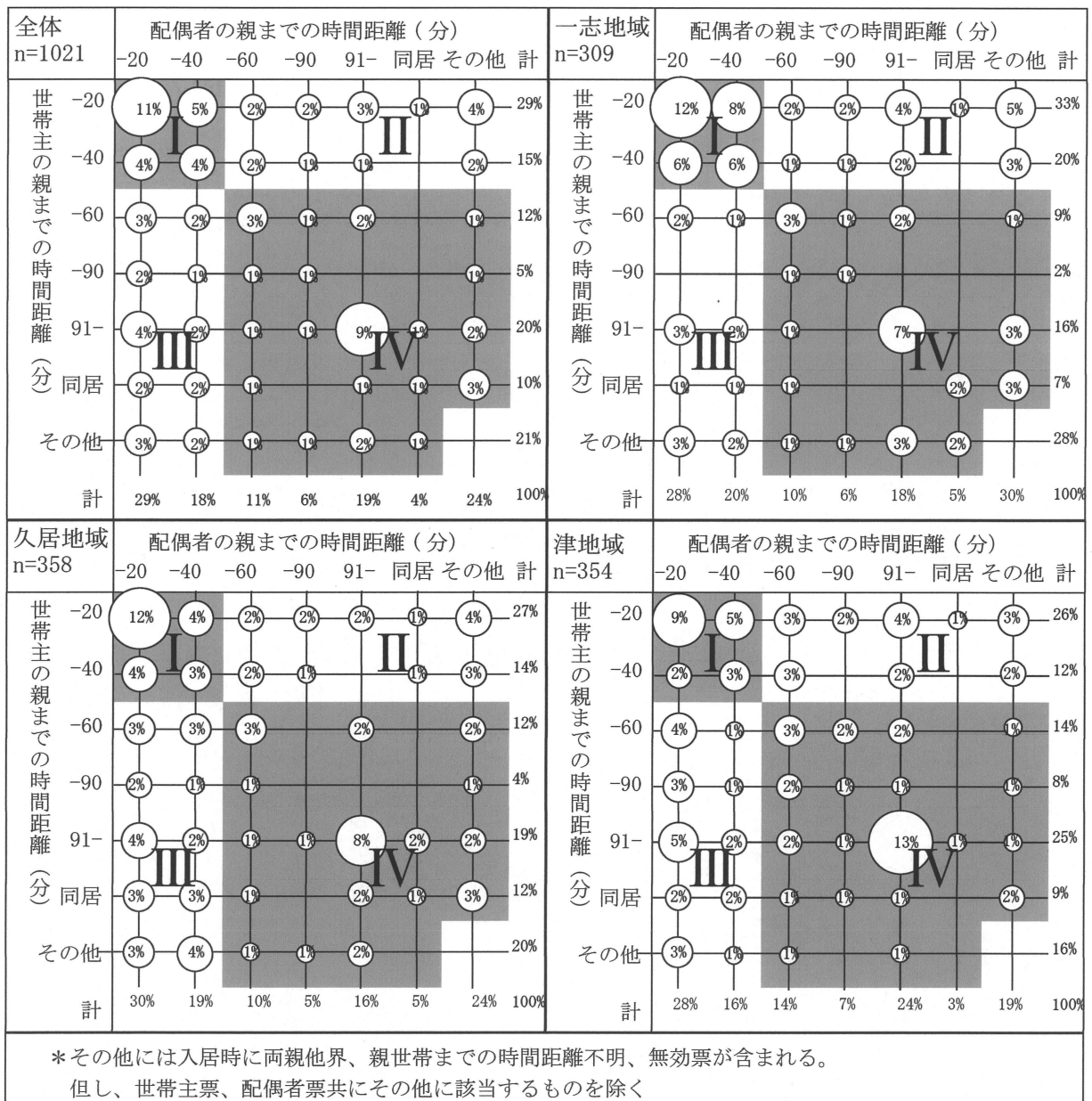


図 5-2 各世帯の世帯主と配偶者の親までの時間距離の関係

表 5-2 世帯主、配偶者の少なくともどちらかの親が 40 分以内に居住している世帯の割合

表 5-1 立地地域別のグループの割合

	津地域	久居地域	一志地域	総計		
グループ I	19%	24%	33%	25%	世帯主、配偶者の少なくともどちらかの親までの時間距離が40分以内 (I + II + III)	
グループ II	19%	18%	20%	19%		
グループ III	24%	25%	15%	21%		
グループ IV	38%	34%	33%	35%		
総計	100%	100%	100%	100%		
標本数	354	358	309	1021		
					津地域	62%
					久居地域	66%
					一志地域	67%
					総計	65%

5-2-2 親との時間距離と入居条件の「世帯主、または配偶者の実家に近い」との関係

次に「世帯主、または配偶者の実家に近い」事を入居条件に挙げた世帯について分析していく。5-1-1の図5-1でみたように「世帯主、または配偶者の実家に近い」を入居条件のひとつとした世帯は全体の29%であった。5-2-1の各世帯の世帯主と配偶者の親までの時間距離によるグループ分けを用いて、各立地地域別に入居条件の「世帯主、または配偶者の実家に近い」の項目との関係を見ていく。

表5-3は各立地別、グループ別に、入居条件として「世帯主、または配偶者の実家に近い」を選択した世帯の割合を示している。表5-3より、各立地地域ともグループIに属する世帯で「世帯主、または配偶者の実家に近い」という項目を選択する世帯が多い事が分かる。特に一志地域ではグループIに属する世帯の6割がこの項目を選択している。津地域のグループIに属する世帯では4割と一志地域と比べると若干低いが、これは津地域ではもともとこの項目を選択する世帯数が少ないことが原因であると考えられる。なおグループI全体では半数以上の世帯がこの項目を選んでいる。

グループIIとグループIIIをみると、どの立地でもグループIよりはその割合が小さいが、全体で3割以上の世帯で選択されている。一方世帯主、配偶者のどちらの親までの時間距離が40分以上の世帯であるグループIVに着目すると、「世帯主、または配偶者の実家に近い」を選択した世帯は全体でみると7%しかない。立地別にみても最多となる一志地域の10%であり、津地域ではわずか3%となっている。

以上より、世帯主、配偶者ともに親までの時間距離が40分以内という世帯では「世帯主、または配偶者の実家に近い」を選択する世帯が半数以上と多く、世帯主、又は配偶者の少なくとも片方の親が40分以内という世帯でも3割以上の世帯で選択している事が分かった。しかし世帯主、配偶者の親がともに40分以上の時間距離にある世帯の場合この項目を選択する世帯は全体の1割に満たない。

表5-3 入居条件に「世帯主、または配偶者の実家に近い」を挙げた世帯の割合

		津地域	久居地域	一志地域	全体
グループI	「世帯主、または配偶者の実家に近い」を選択した割合	40%	49%	60%	51%
	標本数	67	84	101	252
グループII	「世帯主、または配偶者の実家に近い」を選択した割合	34%	32%	47%	37%
	標本数	67	63	60	190
グループIII	「世帯主、または配偶者の実家に近い」を選択した割合	26%	36%	36%	32%
	標本数	85	87	45	217
グループIV	「世帯主、または配偶者の実家に近い」を選択した割合	3%	9%	10%	7%
	標本数	134	121	101	356
全体	「世帯主、または配偶者の実家に近い」を選択した割合	22%	29%	37%	29%
	標本数	353	355	307	1015

次に「世帯主、または配偶者の実家に近い」事を条件に挙げた世帯を対象に世帯主、配偶者の親までの時間距離をみていく。図5-3は、「世帯主、または配偶者の実家に近い」事を条件に挙げた世帯のみを対象として親との時間距離の関係を5-2-1の図5-2と同様にして表したものである。世帯主世帯主、配偶者の親までの時間距離が共に40以内に居住する世帯をグループi、世帯主の親のみ40以内に居住する世帯をグループii、配偶者の親のみ40分以内に居住する世帯をグループiii、世帯主、配偶者の親が共に40分を超える場所に居住する場合、および同居やその他の場合をグループivと分類する。なお「その他」には親までの時間距離が不明、親が入居時に他界、および無効票が含まれる。ただし、世帯主、配偶者ともにその他に該当する場合を除いて表している。また表5-3にグループi～ivの各グループの割合を示している。

図5-3、および表5-3より「世帯主、または配偶者の実家に近い」事を条件に挙げた世帯ではグループiの、世帯主、配偶者ともに親との時間距離が40分以内に多く見られる事が分かる。また世帯主もしくは配偶者の親のどちらかが親との時間距離が40分以内であるグループii、グループiiiに属する世帯を合わせると津地域、久居地域で約半数、一志地域では約4割の世帯が該当する。以上のグループi、グループii、グループiiiは「世帯主、または配偶者の実家に近い」という項目を選択した世帯のうち、世帯主、配偶者のうち、少なくとも片方の親が40分以内に居住するというグループである。これらのグループの合計を表5-5に示した。表5-5より「世帯主、または配偶者の実家に近い」を選択した世帯では、世帯主、配偶者の少なくともどちらかの親が40分以内という世帯が津地域、久居地域では9割を超えることが分かる。逆に世帯主、配偶者の両方の親との時間距離が40分以上となるグループivは津地域で5%、久居地域で11%、一志地域では9%とどの立地でも1割前後と少ない事が分かる。

以上から「世帯主、または配偶者の実家に近い」事を入居条件として挙げた世帯の内の9割程度が、世帯主、配偶者の少なくともどちらかの親が40分以内にいると言える。言い換えれば、40分以内程度の時間距離が「世帯主、または配偶者の実家に近い」ための条件であると言える。

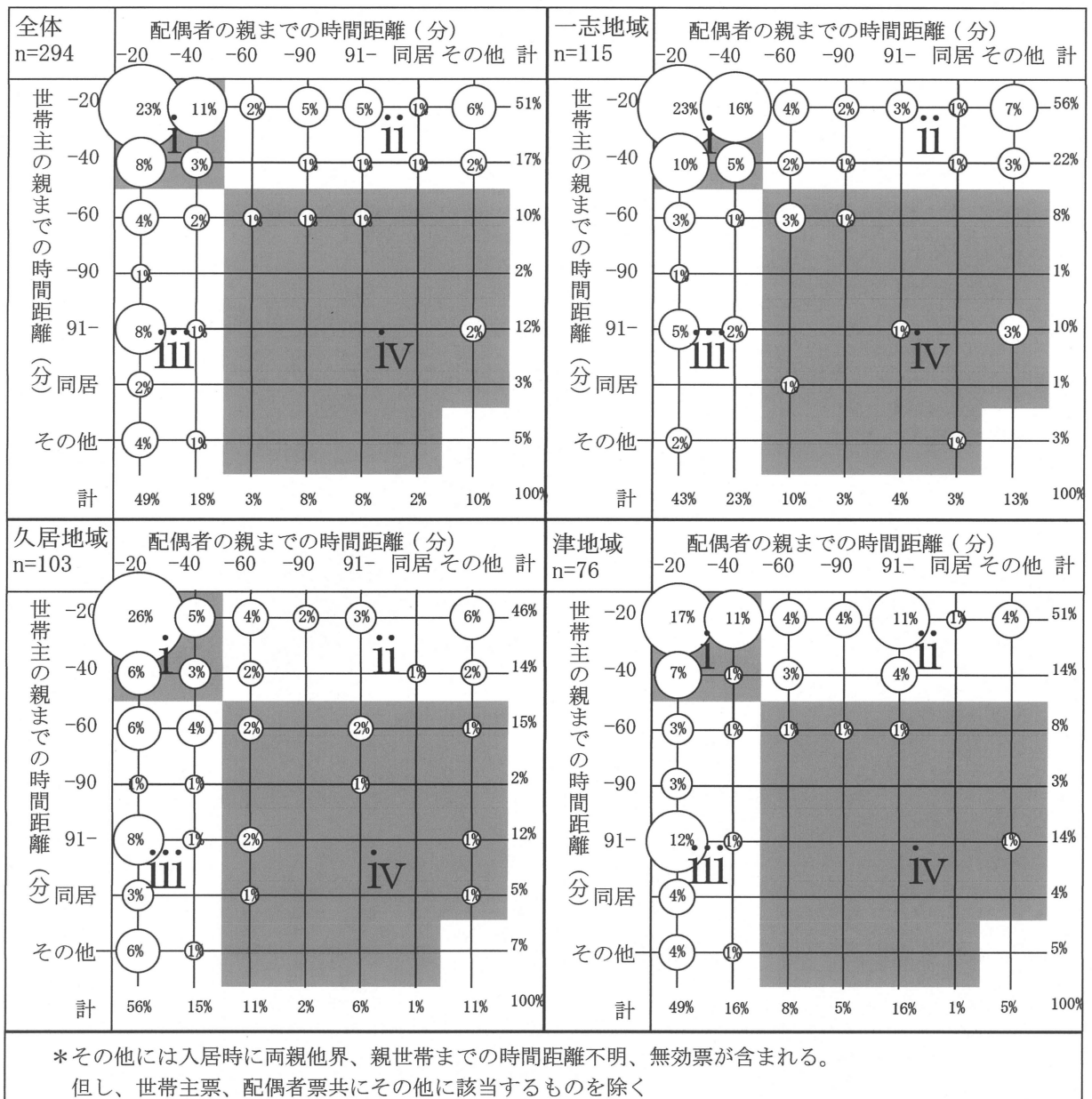


図5-3 「世帯主、または配偶者の実家に近い」を選択した世帯の親までの時間距離

表5-5 世帯主、配偶者の少なくともどちらかの親が40分以内に居住している世帯の割合

表5-4 各グループの割合

	津地域	久居地域	一志地域	全体		世帯主、配偶者の少なくともどちらかの親までの時間距離が40分以内 (i + ii + iii)
グループ i	36%	40%	53%	44%	津地域	95%
グループ ii	30%	19%	24%	24%		
グループ iii	29%	30%	14%	24%		
グループ iv	5%	11%	9%	9%		
総計	100%	100%	100%	100%		
標本数	76	103	115	294	久居地域	89%
					一志地域	91%
					全体	92%

5-3 職場との時間距離と入居条件

5-3-1 世帯主と配偶者の通勤時間の関係

次に世帯主と配偶者のそれぞれの通勤時間と入居条件の関係を見ていく。図5-4は世帯主と配偶者のそれぞれの通勤時間をクロス集計したものである。なお「その他」には入居時に無職・主婦、通勤時間が不明なもの、無効票が含まれる。またパートやアルバイトの場合、あくまで補助的な収入源としている人が多い。そのため居住地選択の条件になりにくいと考えられることから「パート等」にまとめて表示している。また世帯主、配偶者の通勤時間が40分以内をグループA、世帯主のみ通勤時間が40分以内をグループB、配偶者のみ通勤時間が40分以内をグループC、世帯主、配偶者ともに40分以上またはパート等、その他に該当する世帯をグループDとする。また表5-6には各グループに属する世帯数の割合を示した。

図5-4および表5-6より、世帯主のみ通勤時間が40分以内となるグループBと、世帯主と配偶者の通勤時間が共に40分以内であるグループAに多くの世帯がある事が分かる。特にグループBは各グループの中でその割合が最も多く、各立地で半数以上であることが分かる。特に一志地域ではグループBの割合が6割を超え、非常に多いと言える。これは3章で確認したように、配偶者が「無職・主婦」と「パート・アルバイト」を合わせると7～8割程度あり、また世帯主の通勤時間が40分以内であるという人が通勤をしている人の内の8割と多いためである。このことより世帯主が主な収入源となる働き方をし、配偶者は無職・主婦もしくはパート・アルバイトで補助的な収入を得ているという世帯が多い事が分かる。また世帯主、配偶者ともに通勤時間が40分以内である世帯は全体では18%であった。立地地域別に見ると久居地域で2割を超えるが、津地域では17%、一志地域では16%と2割に満たないが、世帯主の通勤時間が40分以下であるグループBとグループAを合わせると各立地とも7割を超える。世帯主の職業でパート・アルバイト、または無職は非常に少ない事と、世帯主の通勤時間が40分以上という人も少ない。また配偶者でパート・アルバイトと無職を含む「その他」を除く通勤のある人は、全体の28%である。このうちのほとんどが通勤時間40分以内であることが分かる。そのため、グループCおよびグループDに該当する世帯はそれほど多くない。まず配偶者の通勤時間が40分以下で、世帯主の通勤時間が40分以上、または「パート等」、「その他」に該当するグループCに該当する世帯の割合は各地域1割以下と少ない。またグループDに該当する世帯の多くは、世帯主の通勤時間が40分以上でかつ配偶者がパート・アルバイトであるか、無職を含む「その他」の項目に該当している世帯が多い事が分かる。なおグループDに該当する世帯の割合は各立地で15～17%となっており、その割合は少ない事が分かる。表5-7にグループA、グループBおよびグループCの合計である、世帯主、配偶者の少なくともどちらかの通勤時間が40分以内にある世帯の割合は、どの立地地域でも8割を超え、非常に多い事が分かる。

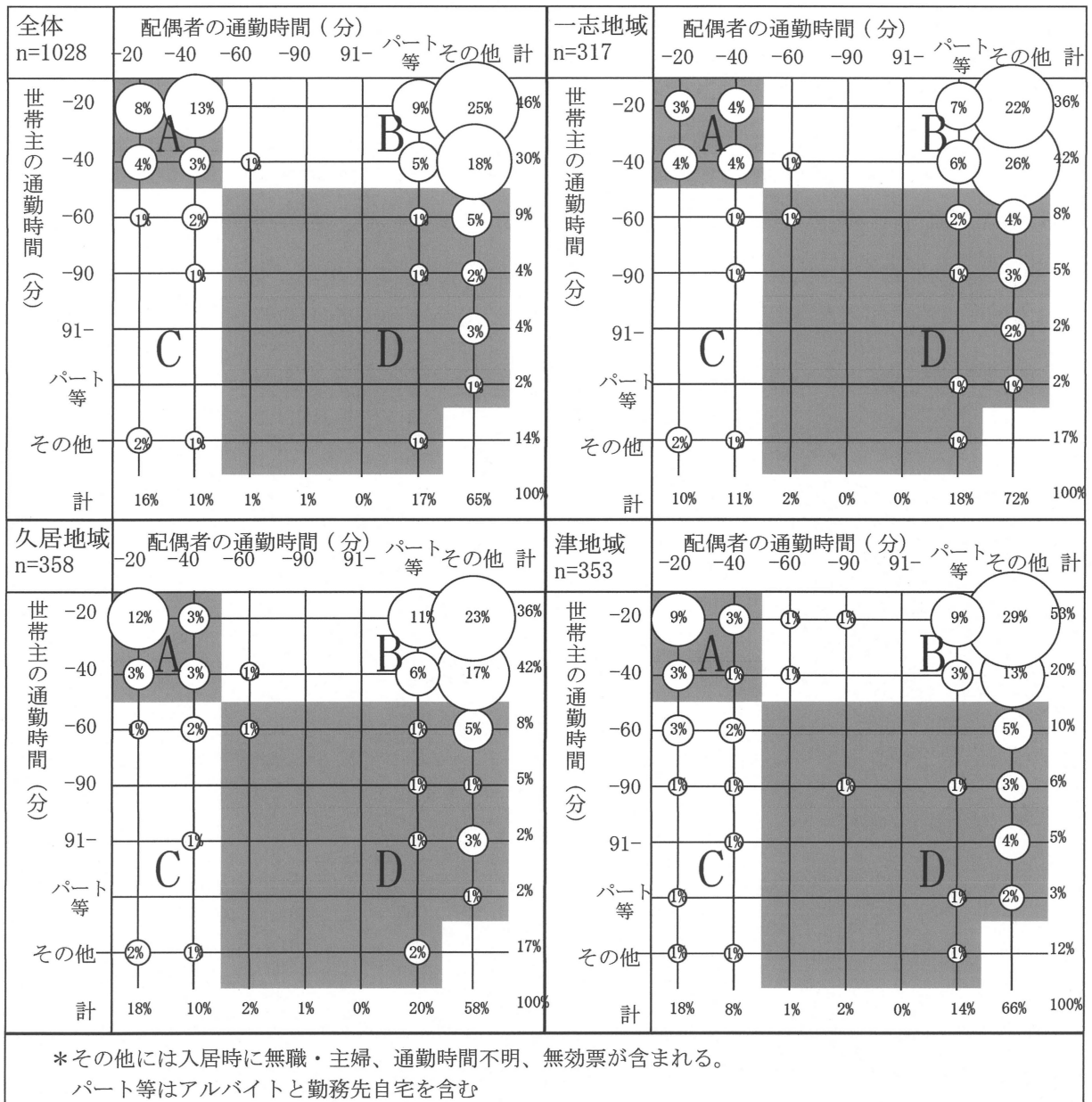


図5-4 世帯主と配偶者の通勤時間の関係

表5-7 世帯主、配偶者の少なくともどちらかの通勤時間が40分以内にある世帯の割合

表5-6 各グループの割合

	津地域	久居地域	一志地域	全体	世帯主、配偶者の少なくともどちらかの通勤時間が40分以内 (A+B+C)	
					津地域	割合
グループA	17%	21%	16%	18%	84%	
グループB	56%	58%	62%	59%		
グループC	10%	7%	6%	7%		
グループD	17%	15%	16%	16%		
総計	100%	100%	100%	100%		
標本数	353	358	317	1028		

5-3-2 通勤時間と入居条件の「通勤の便利さ」との関係

次に入居条件のうち「通勤の便利さ」と通勤時間の関係を見ていく。5-1の図5-1に示したように入居条件として「通勤の便利さ」を挙げた世帯は全体で43%であった。また立地別にみると久居地域で52%、津地域で48%、一志地域で30%であった。

5-3-1の図5-4でみた、世帯主と配偶者の通勤時間によるグループ別に、入居条件として「通勤の便利さ」を選択した世帯の割合を見ていく。表5-8は各グループで通勤の便利さを選択した世帯の割合を示している。表5-8より全体でみるとグループA、グループB、グループCが共に4割を超え、世帯主、配偶者ともに通勤時間が40分以上かかるグループDでは「通勤の便利さ」を選択した世帯の割合は38%と他のグループよりは若干少ないが大きな差はないといえる。さらに立地地域別にみると各地域みていくと、津地域では、世帯主、配偶者ともに通勤時間40分以内であるグループAと、世帯主、配偶者ともに40分以上または「パート等」、「その他」に該当する世帯であるグループDの方が通勤の便利さを選択した割合が高くなる。久居地域でもグループA、グループB、グループCは半数を越えるが、グループDでも42%と比較的多くの世帯が選択していることが分かる。また各立地全体でみると、津地域で45%、久居地域で48%と半数近いが、一志地域では29%と3割に満たないことから、一志地域では各グループとも他の立地と比較してその割合が小さい。特に一番多くの世帯が属するグループBにおいて「通勤の便利さ」を入居条件にした世帯は3割程と、他地域のグループBが半数を超えるのに対してその割合は小さい。また津地域と久居地域では通勤時間よりも立地自体を「通勤の便利さ」と評価している世帯が多いと言える。

しかし実態としては、3章で見たように通勤時間は40分以内に収まるという世帯主は、久居地域、一志地域で8割を越え、津地域でも75%以上が40分以内である。また本節でも指摘したように、世帯主、配偶者の少なくともどちらかの通勤時間が40分以内という世帯は8割を超える事をここで改めて指摘しておく。「通勤の便利さ」に関しては当然に通勤できる場所に居住地を選択しており、意識として通勤に便利である事を条件とし挙げる世帯が少なかったのではないかと考えられる。

表5-8 各グループで「通勤の便利さ」を選択した世帯の割合

		津地域	久居地域	一志地域	全体
グループA	「通勤の便利さ」を選択した割合	36%	51%	32%	41%
	標本数	59	73	50	182
グループB	「通勤の便利さ」を選択した割合	56%	51%	32%	46%
	標本数	198	207	198	603
グループC	「通勤の便利さ」を選択した割合	35%	52%	44%	43%
	標本数	34	25	18	77
グループD	「通勤の便利さ」を選択した割合	46%	42%	25%	38%
	標本数	61	50	48	159
全体	「通勤の便利さ」を選択した割合	45%	48%	29%	41%
	標本数	386	386	355	1127

*図5-1では世帯票のみで集計しているが、表5-8では世帯主票、配偶者票を用い、共に無効、通勤時間不明、無職を除いているため、図5-1と票5-8の結果に多少のズレが生じる

次に5-1の図5-1に示したように入居条件として「通勤の便利さ」を挙げた43%の世帯を対象として世帯主、配偶者の通勤時間をみていく。図5-5はこれらの世帯を対象として世帯主、配偶者の通勤時間をクロス集計したものである。また世帯主、配偶者の通勤時間が40分以内をグループa、世帯主のみ通勤時間が40分以内をグループb、配偶者のみ通勤時間が40分以内をグループc、世帯主、配偶者ともに40分以上または「パート等」、「その他」に該当する世帯をグループdとする。また表5-9に各グループの割合を示した。また表5-10には「通勤の便利さ」を入居条件として選択した世帯の内世帯主、または配偶者の内少なくとも片方の通勤時間が40分以内にあるという世帯の割合を示したものである。

図5-10および表5-9より、グループbの世帯主の通勤時間が40分以内で配偶者の通勤時間が40分以上または「パート等」、「その他」に該当する世帯が6割を越えており、各グループの中では最多である。グループbの中でも世帯主の通勤時間が40分以内で、配偶者は「パート等」または無職・主婦を含む「その他」に該当する世帯が特に多い。また世帯主、配偶者ともに通勤時間が40分以内であるグループaは全体でみると17%と圧倒的に多いグループbに次いで多い。立地別にみると津地域ではグループdの方が若干多いが、久居地域と一志地域では、グループaがグループdに次いで多い事が確認できる。また世帯主の通勤時間が40分以上または「パート等」、「その他」で配偶者の通勤時間が40分以内であるグループcの割合は各地域とも1割に満たないことから非常に少ないと言える。またグループdも各立地で1割以上あることが分かる。

以上のように、「通勤の便利さ」を選択した世帯に限ってみた図5-5と、世帯主と配偶者の通勤時間の関係からみた分類を示した図5-5を比較すると、その傾向は大きく変わらないことが分かる。これは、表5-8でみたように世帯主と配偶者の通勤時間の関係からみた分類、特にグループDやグループCでも「通勤の便利さ」を選択した世帯の割合が他のグループと大きく変わらないためである。しかし、実態としては世帯主と配偶者の通勤時間の関係からみた分類では、世帯主の通勤時間は40分以下、配偶者の通勤時間も40分以下、または「パート等」、「無職」という世帯が非常に多い。そのため、「通勤の便利さ」を入居条件とした世帯に限って、世帯主と配偶者の通勤時間を分類してみると、結局は世帯主、配偶者の両方の通勤時間が40分以内というグループa、世帯主の通勤時間が40分以内で配偶者の通勤時間が40分以上または、「パート等」、「その他」であるグループbだけで7割を超える。また配偶者の通勤時間が40分以下のグループcを加え、表5-10に示したように、世帯主または配偶者の少なくともどちらかの通勤時間が40分以内という世帯はどの立地であっても8割を超える事が分かる。

以上より世帯主と配偶者の通勤時間をまとめると、世帯主は40分以内の通勤時間で、配偶者が無職やパート・アルバイトという人が多かった。また世帯主の通勤時間が40分以上で配偶者が無職やパート・アルバイトという世帯と、世帯主の通勤時間が40分を超える世帯の間に「通勤の便利さ」を入居条件としてあげる世帯の割合は大きく変わらないが、実態として通勤時間が世帯主の通勤時間が40分以内の、配偶者は無職やパート・アルバイト、または通勤が40分以内という世帯がほとんどであると言える。

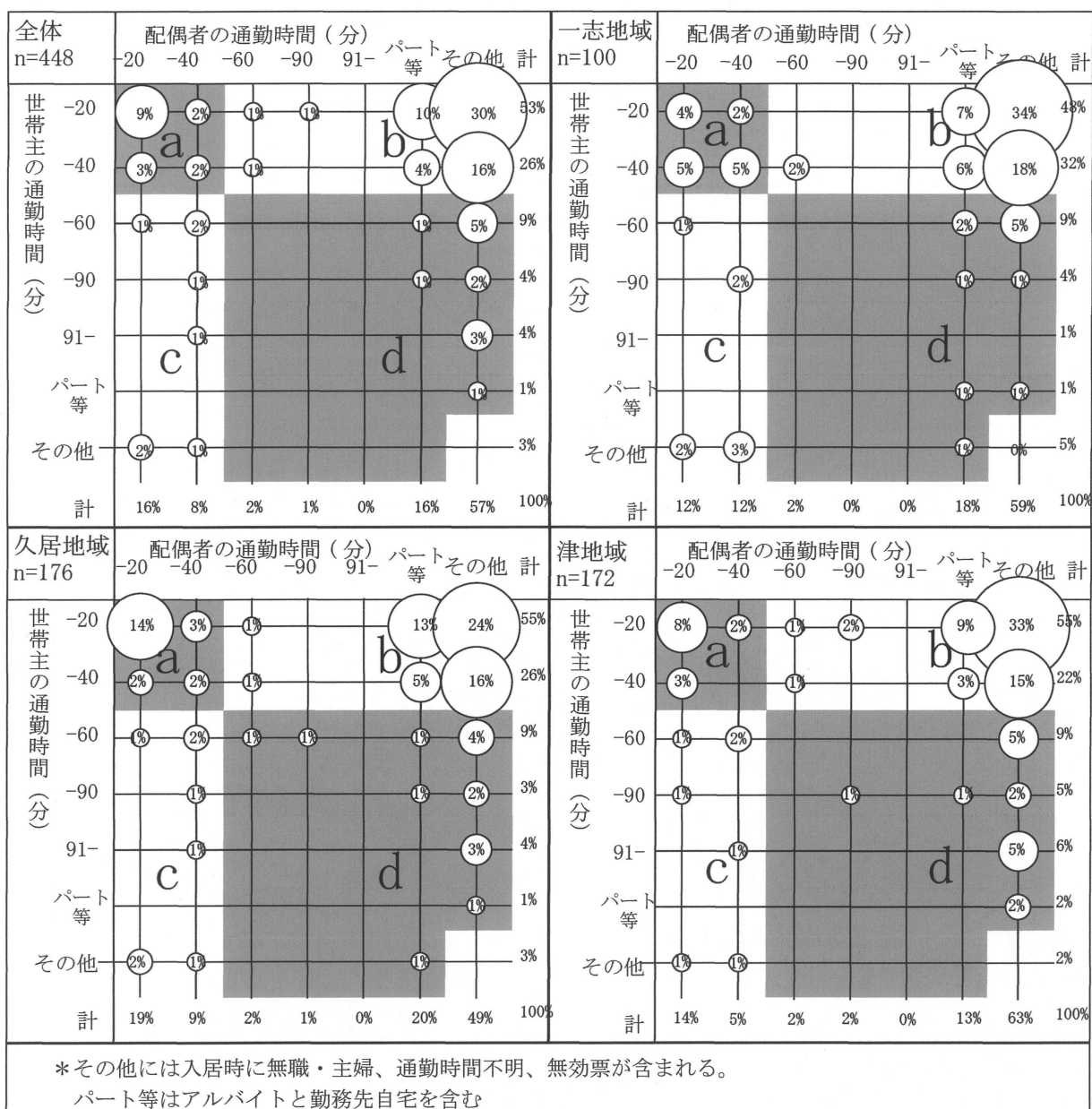


図5-5 「通勤の便利さ」を選択した世帯の通勤時間

表5-9 各グループの割合

	津地域	久居地域	一志地域	全体
グループa	12%	21%	16%	17%
グループb	65%	60%	64%	63%
グループc	7%	7%	8%	7%
グループd	16%	12%	12%	14%
総計	100%	100%	100%	100%
標本数	353	358	317	1028

表5-10 入居条件で「通勤の便利さ」を選択した世帯のうち世帯主、配偶者の少なくともどちらかの通勤時間が40分以内の世帯の割合

	世帯主、配偶者の少なくともどちらかの通勤時間が40分以内 (a+b+c)
津地域	84%
久居地域	88%
一志地域	88%
全体	86%

5-4 親と職場までの時間距離

5-4-1 職場と親の位置関係

次に、5-2-1の図5-2で示した親との位置関係の分類と、5-3-1の図5-4で示した職場との位置関係の分類を用いて、職場と親との位置関係を分析していく。図5-6は、親との位置関係から分類されたグループI、II、III、IV、に属する世帯と、職場との位置関係から分類されたグループA、B、C、Dに属する世帯をクロス集計したものを表したものである。ここでグループIは世帯主、配偶者ともに親までの時間距離が40分以内で近いグループである。またグループII、IIIは、世帯主または配偶者の親までの時間距離が40分以内であり、合わせると、少なくとも世帯主または配偶者のどちらかの親までの時間距離が40分以内となる。またグループAは世帯主、配偶者の通勤時間が共に40分以内、グループBは世帯主の通勤時間が40分以内と世帯主の

	親までの時間距離の分類						親までの時間距離の分類					
	世帯主、配偶者両方の親近い						世帯主、配偶者両方の親近い					
	片方のみ親近い				計		片方のみ親近い				計	
	I	II	III	IV	計		I	II	III	IV	計	
全体 n=962						一志地域 n=288						
通勤時間の分類 世帯主の職場が近い	A	7%	2%	5%	4%	18%	A	9%	2%	2%	3%	16%
	B	15%	12%	10%	22%	59%	B	21%	13%	7%	20%	62%
	C	1%	1%	3%	2%	7%	C	1%	1%	2%	1%	5%
	D	2%	4%	4%	6%	16%	D	4%	4%	3%	6%	16%
	計	26%	19%	22%	33%	100%	計	34%	20%	15%	31%	100%
久居地域 n=338						津地域 n=336						
通勤時間の分類 世帯主の職場が近い	A	7%	2%	8%	5%	21%	A	7%	3%	4%	3%	17%
	B	17%	10%	10%	21%	58%	B	9%	12%	12%	24%	57%
	C	1%	1%	3%	2%	7%	C	2%	2%	4%	1%	9%
	D	1%	4%	4%	4%	14%	D	2%	3%	4%	8%	17%
	計	25%	18%	25%	32%	100%	計	19%	19%	25%	37%	100%

* I、II、III、IVおよびA、B、C、Dに分類されなかった世帯を除く

図5-6 職場と親の所在地の関係

表5-10 各グループの割合

	津地域	久居地域	一志地域	全体
α	46%	53%	55%	51%
β	27%	26%	24%	26%
γ	17%	15%	15%	16%
δ	10%	6%	7%	8%

職場に近いと言えるグループである。ここでは、5-3 で検証したように世帯主が主な収入源となり、配偶者は無職やパート・アルバイトという世帯が多いため、居住地選択に影響を与える影響の大きいと考えられる世帯主の職場が40分以内かそれ以上かに着目してグループ分けを行う。まず親との時間距離が近く、世帯主との通勤時間が短く職場にも両方近いことになる組み合わせをここではグループ α とする。同様に世帯主の職場は近いが、親が世帯主、配偶者とおもに遠い組み合わせをグループ β とする。世帯主または配偶者のどちらかの親が近く、世帯主の職場の遠い組み合わせをグループ γ 、親にも職場にも遠い組み合わせをグループ δ とする。この各グループの割合は表5-10に示した。

まず図5-6をみると、一志地域を除き、IV-Bが最大となる事が分かる。世帯主、配偶者ともに親が遠くにいるような場合は職場との近さを重視する世帯が多いことが考えられる。また一志地域のI-Bが他の地域に比べ多い。これは世帯主、配偶者ともに親が40分以内に居住するという世帯が多い為である。

各グループの割合を見ていくと、グループ α がどの立地でも最大となる。グループ α は津地域で46%と半数近く、久居地域で53%、一志地域55%と半数を超える。グループ α のように世帯主、または配偶者の親の少なくとも片方の親が40分以内の近場におり、なおかつ世帯主の職場までの通勤時間も40分以内であるという世帯が半数程度ある事が分かる。次いでグループ β の割合が大きい事が分かる。世帯主、配偶者ともに親との時間距離が40分以上と遠いが、世帯主の職場が遠いという世帯がどの地域で1/4前後ある事が分かる。またグループ γ の世帯主または配偶者の親までの時間距離が40分以内であるが、世帯主の職場への時間距離が40分の世帯はどの立地でも15%前後である。またこのように見ていくと、世帯主または配偶者の親までの時間距離が40分以上でなおかつ世帯主の職場が40分以上という世帯は各立地で7~10%と1割以下になり極めて少ないと言える。

5-4-2 職場と親の位置関係と入居条件の関係

5-4-1で行った分類を用いて入居条件である「通勤の便利さ」と「世帯主、または配偶者の実家に近い」の2つの項目に着目して分析していく。表5-11に各グループ別に「通勤の便利さ」と「世帯主、または配偶者の実家に近い」の2条件との関係を示している。

表5-11 各グループ別に「通勤の便利さ」と「世帯主、または配偶者の実家に近い」を条件に挙げた世帯

	α				β			
	津地域	久居地域	一志地域	総計	津地域	久居地域	一志地域	総計
「世帯主、または配偶者の実家に近いこと」	33%	38%	52%	41%	2%	7%	7%	5%
「通勤の便利さ」	52%	47%	33%	44%	54%	59%	35%	50%
2条件を両方選択	19%	24%	16%	20%	2%	7%	0%	3%
総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
標本数	155	179	157	491	91	87	69	247
	γ				δ			
	津地域	久居地域	一志地域	総計	津地域	久居地域	一志地域	総計
「世帯主、または配偶者の実家に近いこと」	35%	48%	49%	43%	6%	19%	10%	11%
「通勤の便利さ」	47%	46%	27%	41%	38%	52%	40%	42%
2条件を両方選択	18%	29%	20%	22%	6%	10%	0%	5%
総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
標本数	57	48	41	146	32	21	20	73

ここで5-2では、世帯主、配偶者の少なくともどちらか親との時間距離が40分以内という世帯では「世帯主、または配偶者の実家に近い」を条件としている世帯が多いことを確認した。また5-3では、通勤時間が40分以上と40分以内では「通勤の便利さ」を選ぶ世帯の割合がそれぞれ同程度であるが、通勤時間が40分以内という世帯主、配偶者ともに通勤時間が40分以内であるという人が多いことを確認した。ここでは、「世帯主、または配偶者の実家に近い」「通勤の便利さ」のふたつを同時に選択している世帯がどのグループに多いかを確認していく。

まず世帯主の通勤時間にかかわらず5-2、5-3で確認したように、どのグループであっても「通勤の便利さ」を選択する世帯の割合が4割以上である。また「世帯主、または配偶者の実家に近いこと」を選択する世帯は、世帯主、または配偶者の少なくともどちらかの親までの時間距離が40分以内であるグループ α 、グループ γ が多いことが確認できる。ここでこの2条件を同時に選択した世帯に着目すると、グループ α とグループ β において全体で見た場合に2割以上の世帯がある事が分かる。この2割という数字は決して大きい数値とは言えないが、この2条件を意識して選択する世帯が他のグループで見られないことから、「世帯主、または配偶者の実家に近い」という住要求を満たすのは親までの時間距離が40分以内であることが条件であると言える。

また表5-12に「世帯主、または配偶者の実家に近いこと」と「通勤の便利さ」の2つの条件を挙げた世帯のみを対象としてそのグループ別の割合をみたものである。表5-12より「世帯主、または配偶者の実家に近いこと」と「通勤の便利さ」の2つの条件を挙げた世帯では、実際に世帯主、または配偶者の少なくとも片方の親が40分以内に居住し、なおかつ職場までの時間距離は40分以内であるグループ α が全体で見た場合7割近くあり、多い事が分かる。

また通勤時間によらず「通勤の便利さ」を重視する世帯は多かったが、実態として通勤時間が40分以内という人が多いことから、通勤時間も40分以内という場所に居住地選択を行う世帯が多いと言える。この2条件を満たす事が、親子近居と職住近接であるための条件であると言える。

表5-12 各グループ別に「通勤の便利さ」と「世帯主、または配偶者の実家に近い」を条件に挙げた世帯のグループ別の割合

	「世帯主、または配偶者の実家に近いこと」「通勤の便利さ」の二つの入居条件を挙げた世帯のグループ別の割合			
	津地域	久居地域	一志地域	総計
α	68%	66%	76%	69%
β	5%	9%	0%	6%
γ	23%	22%	24%	23%
δ	5%	3%	0%	3%
総数	100%	100%	100%	100%
標本数	44	65	33	142

5-5 小結

本章より、各世帯の入居理由としては、「鉄道駅に近いこと」「小中学校に近いこと」「通勤の便利さ」という項目が多いことが分かった。また「世帯主、または配偶者の実家に近いこと」を条件とする世帯は全体の29%であり、3割近くの世帯が選択していた。

各世帯の、世帯主と配偶者の親との時間距離と「世帯主、または配偶者の実家に近いこと」を条件に挙げる世帯の関係をみると、世帯主、または配偶者の少なくともどちらかの親が40分以内に居住している世帯でこの項目を条件として挙げる世帯が多い事が分かった。

「通勤の便利さ」という条件と、世帯主、配偶者の通勤時間の関係をみると、世帯主、及び配偶者の通勤時間が40分以内でも40分を超える場合でも、この項目を条件として挙げる世帯に大きな差は見られなかった。しかし実態としては、世帯主の通勤時間が40分以内という人が8割を越え、配偶者でも「パート・アルバイト」以外の通勤時間は40分以内であることから、当然に通勤が可能な範囲を選んでいる世帯が多く、意識的に「通勤の便利さ」を入居条件として挙げる世帯が少なかったと考えられる。

「世帯主、または配偶者の実家に近いこと」と「通勤の便利さ」の二つの条件を同時に選んだ世帯は世帯主の通勤時間に関わらず、世帯主または配偶者の少なくとも片方の親が40分以内に居住する世帯であった。

以上より、この二つの住要求を満たす条件は、親までの時間距離が40分以内、また通勤時間の実態からこちらも40分以内という場所が条件となるのではないかと考えられる。

6章 結論

6-1 時間距離と立地の関係

6-2 職場との関係

6-3 親との関係

**6-4 縁辺部に住む親世帯の生活支援と中心部への
通勤が可能な居住地という視点から見た居住地再
配置のための条件**

6-1 時間距離と立地の関係

本論では、職場への通勤時間が40分以内であることと、親との時間距離が40分以内であることが親子近居と職住近接のための条件であると述べてきた。

ここで、時間距離圏とは、各立地からある時間で自動車を使って行ける範囲のことをさす。この時間距離圏を本研究のアンケート調査の対象とした住宅団地で最も、津市中心部に近い津地域の二重池団地と、最も遠い一志地域の高野団地の2団地についてそれぞれの時間距離圏を見ていく。図6-1は各立地の20分と40分の時間距離圏を示したものである*7。図6-1より、この2団地間には20分の時間距離がある事が分かる。また40分の時間距離圏を見ると、二重池団地から縁辺部へは、白山地域の一部しかカバーできないが、一志地域の高野団地からは美杉地域の一部や、白山地域の大部分へも到達する事が分かる。

また津地域に立地する二重池団地からは、40分の時間距離圏で津地域の全域をカバーする。また20分の時間距離圏でも津地域の大部分をカバーできる。一方一志地域に立地する高野団地をみると、40分の時間距離圏であれば津地域のほぼ全域をカバーできるが、20分の時間距離圏では津地域のわずかな部分にしかカバーできない事が分かる。

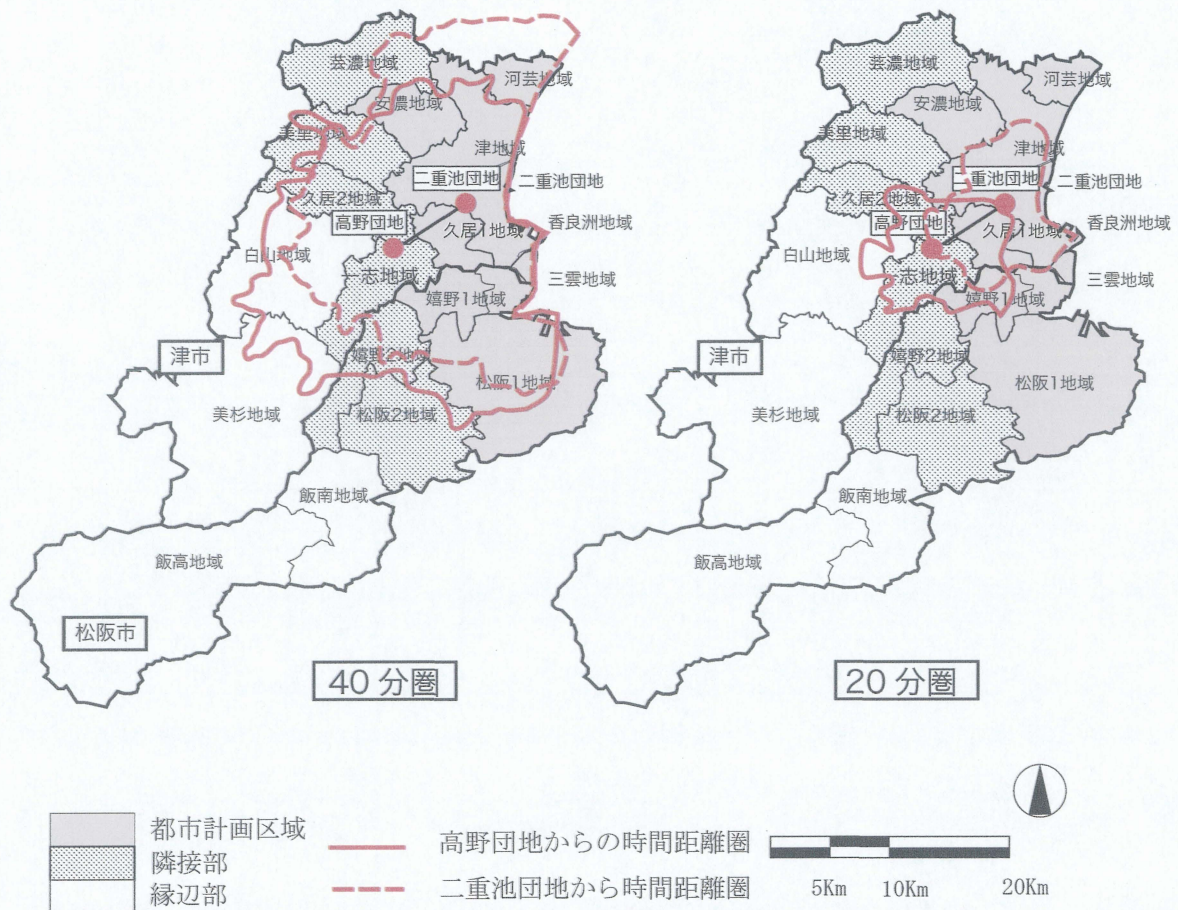


図6-1 2団地の20分と40分の時間距離圏

*7 ゼンリン電子地図帳 Zi10 の経路探索機能を用いて作成

6-2 職場との関係

以上をふまえて本論をまとめていく。

まず勤務先は津地域への最も多く、この事は各立地で共通していた。また居住地選択の条件として「通勤の便利さ」という項目を挙げる世帯の世帯主、配偶者のそれぞれの通勤時間をみると、通勤時間が40分以上であつてもこの項目を選ぶ世帯の割合は大きく差は見られなかった。「通勤の便利さ」とは通勤時間が短い事だけではなく、駅等の近さを「通勤の便利さ」と考えた世帯が多かつたのではないかと推測される。しかし、多くの人が通勤時間40分以内であるという点は各立地とも共通していた。またそのような条件の場所に居住地選択を行つていたとも言える。以上より通勤時間が40分以内というのがひとつの目安と言える。

6-3 親との関係

親世帯との関係を見ていくと、時間距離短い程交流頻度があがり、なおかつその交流内容も、生活支援に関わる内容となる事が分かつた。またほぼ毎日の交流が出来る限界が40分、また月数回以上の交流を保ための時間距離も40分である事を本論にて確認した。また時間距離が短い程、その交流内容は生活支援の内容になっていた。

実際に入居条件を見ていくと、40分以内に世帯主、または配偶者の少なくともどちらかの親がいるという世帯では「世帯主、または配偶者の実家に近い」という項目を入居条件として選択する世帯が多い事を確認した。このことから親との時間距離が40分以内であることがひとつの目安であると言える。

6-4 職場と親との関係

以上より職場までの時間距離が40分以内、親までの時間距離が40分以内という場所に居住することが、職住近接と親子近居の両立のための条件であると言える。

実際に親と職場の関係を見ていくと、世帯主と配偶者の少なくともどちらかの親が40分以内に居住し、なおかつ世帯主の通勤時間が40分以内という世帯が半数程度ある事が分かつた。またこれらの世帯では「世帯主、または配偶者の実家に近い」事と「通勤の便利さ」の2つを入居条件にしている世帯が2割程あつた。逆にこの二つの入居条件を選択した世帯の内、このような親と職場の関係にある世帯が7割近いということが確認できた。以上より親世帯との交流を保ためには40分以内にお互いが居住する事が時間距離のひとつの目安であるといえる。

6-4 縁辺部に住む親世帯の生活支援と中心部への通勤が可能な居住地という視点から見た居住地再

ここで親が縁辺部に居住している場合に着目していくと、図6-1でも確認したように、縁辺部までも40分以内、都市中心部までも40分という時間距離を満たすのは一志地域であることを確認した。

実際にアンケートでも、一志地域には、縁辺部に親がいるという人が多く、またその時間距離が40分以内であるという人が多い事を確認した。また通勤時間も、現在の津市の中心部である津地域への通勤が半数近くあり、さらにそれらの通勤時間は40分以内であるという人が大半を占めていた。

このことから、本研究で着目してきた縁辺部の親の生活と中心部への通勤が可能であるという条件は本事例の場合、隣接部である一志地域で満たされる事が分かる。

本事例のように、広域合併を行い、多くの都市で広域な都市計画区域外を内包する都市が多く誕生している。本事例はこのような広域合併都市における集約型都市構造を目指す場合、都市計画区域内のみで集約拠点を議論するのではなく、都市計画区域外であっても人々の生活の実態を反映した生活圏として捉えて、市域全体、特に本研究で縁辺部や隣接部と定義したような郊外の集約拠点としての条件として重要であると言える。

参考文献

1章での既往研究レビューにて掲載したのを再掲する

金貞均、近江隆（1994）「現代家族の分散居住の実態と居住ネットワークの形成」日本建築学会計画系論文集 第456号 pp209-216

近江隆、金貞均、小倉啓太（1995）「ネットワーク居住の成立と住機能の変化」日本建築学会計画系論文集 第468号 pp161-169

山下真希、馬場麻衣、宮原知紗、桜井康宏（2006）「ネットワーク居住の視点からみた福井市郊外住宅団地の居住者特性」日本都市計画学会 都市計画論文集 No 41-3 pp659-664

中園真人、小峰裕、岩本慎二、佐藤隆雄、山田美由紀（1999）「都市近郊農村地域における居住ネットワーク論」山口大学工学部研究報告 Vol. 50 pp77-84

中本裕美子、重村力、山崎寿一、浅井保（2002）「都市における現代家族のネットワーク居住の実態とその住まい方」日本建築学会近畿支部 研究報告集 pp305-330

今井範子、伊藤理恵（2006）「親子の居住形態からみた遠隔郊外居住地の問題点」日本家政学会誌 Vol.57 pp761-774

上記以外の参考文献

都市整備研究会編著 国土交通証都市・地域整備局監修『新しいまちづくりのための戦略的展開-集約型都市構造の実現に向けて』大成出版社（2009）

川上光彦・浦山益郎・飯田直彦＋土地利用研究会編著 『人口減少時代における土地利用計画-都市周辺の持続可能性を探る』学芸出版社（2010）

矢作弘『「都市縮小」の時代』角川書店(角川グループパブリッシング)（2009）

川上光彦『都市計画』森北出版（2008）

先行研究

1) 鈴木悠平、浦山益郎、松浦健治郎「親子および職場との関係性からみた広域合併都市における郊外戸建住宅団地の需要特性-都市計画区域外に立地する三重県津市「虹が丘」団地を事例として-」日本建築学会学術講演梗概集 F-1 237-238（2009）

2) 鈴木悠平、浦山益郎「親と職場との関係から見た 広域合併都市の都市計画区域外に立地する住宅団地の需要特性 -三重県津市虹が丘団地の場合-」住宅系研究報告会論文集4 日本建築学会 285-290(2009)

- 3) 鈴木悠平、浦山益郎、松浦健治郎「親と職場の関係からみた広域合併都市の都市計画区域外に立地する住宅団地の需要特性-三重県津市高野団地の事例から-」 東海支部研究報告集 (48号) 533-536 (2010)
- 4) 鈴木悠平、浦山益郎、松浦健治郎「親世帯の生活支援および職住関係からみた広域合併都市における郊外の集約拠点に関する基礎的研究」
-広域合併都市の縁辺部に住む親世帯の生活支援と中心部への通勤が可能な居住地の立地条件- 日本建築学会学術講演梗概集 F-1 29-32 (2010)
- 5) 鈴木悠平、浦山益郎、松浦健治郎「広域合併都市の縁辺部に住む親世帯への生活支援と中心部への通勤が可能な居住地の立地-津・松坂市を対象として-」 東海支部研究報告集 (49号) 645-648 (2011)

付録

広域合併都市の縁辺部に住む親世帯の生活支援と中心部への通勤が可能な居住地という視点からみた居住地再配置のための条件に関する研究

-三重県津市・松阪市を対象にして-

三重大学大学院工学研究科 建築学専攻
浦山研究室 鈴木 悠平

1章 研究目的・方法

1-1 研究背景

近年の都市を取り巻く状況は転換期にあると言える。2005以降総人口は減少し続け、2035年までに1億1000万人程度となる事が予測されている。一方高齢化率に着目すると、その数値は上昇し続け2035年には35%を超える*1。このような事情から、集約型都市構造への期待が高まっている。

またもう一方で平成の大合併により1999年3月31日時点で3232の市町村が存在していたが、2010年3月31日時点でその数は1721までに減少した*2。

またこの合併により、岐阜県高山市の面積が2178km²というように広域な面積を持つ自治体が特に地方を中心に多く誕生した。このような都市では、農村地域を広く抱え、限界集落問題とともに地域経営の効率化等の問題を抱える。

以上より、これからの都市の課題として、ひとつ目に、より効率的な都市構造への改革、ふたつ目に、都市計画区域外にあるような農村地域においては高齢者の居住継続等の地域維持という大きく2つの点にあると言える。

また金らによれば、近年の家族の形態は、別居しているながらも家族としての機能を分散的に担うといういわゆる「ネットワーク居住」が行われているという報告がある*3。地方都市においては現代においてもこのような家族のネットワーク居住が残されていると考えられる。こうした良好なコミュニティは特に地方の広域合併都市において、都市計画区域外の農村的な地域における高齢者の居住継続において、家族が近くにいるという安心感として重要であると考えられる。

1-2 研究目的

本研究では地方の広域合併都市の典型例として三重県津市を取り上げ、一つ目に人口動態を明らかにし、近年の動向を明らかにすること。二つ目に親子の居住ネットワークに着目し、特に農村部に居住する親とのつながりと、通勤の関係に着目して、農村部の地域維持を図りながら都市

を集約化していくために、今後の都市における郊外部の居住地をどのような条件の立地に配置していくべきかを考察していくことにある。

1-3 研究方法

1-3-1 研究の流れ

図1-1に研究フローを示した。1章では研究背景や目的を述べた。2章からは研究対象都市について分析していく。津市の人口動態を津市都市マスタープラン作成の為に資料より明らかにしていき、各地域の特徴を見ていき、その実態を見ていく。3章では世帯主と配偶者の勤務先や通勤時間を分析して職場と各立地の関係を明らかにしていく。特に通勤時間から分析を行い、通勤時間がどれくらいが望ましいのかを見ていく。4章では親の居住地と各立地との関係を分析していき、交流内容や時間距離を分析し、親子間がで何分以内に相互が居住する事が望ましいかを見ていく。5章では居住地選択の条件を明らかにしていき、実際の居住地とそのニーズが合致していたのかを見ていく。最後に結論として今後の居住地の立地条件について明らかにしていく。

1-3-1 研究対象都市について

本研究では、広域合併をした地方都市の代表例として三重県津市、松阪市を取り上げる。津市は2006年に周辺10市町村と合併し、面積711km²、人口約29万人になった。同じく松阪市も2005年に周辺

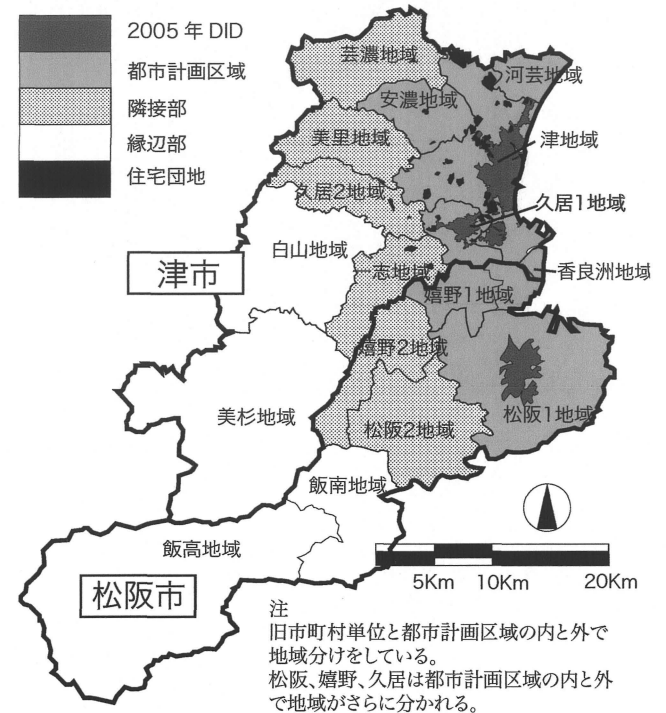


図 1-2 津・松阪市の地域分類

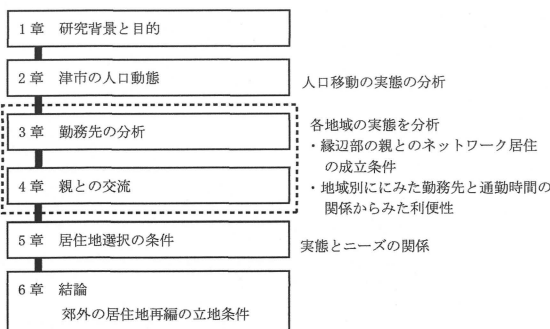


図 1-1 研究フロー

4市町村が合併し、面積624 km²、人口約17万人となり、共に広大な面積を持つ。また津・松阪市において広大な都市計画区域外の範囲がある。本研究では、図1-2に示すように、津・松阪市を旧市町村単位と、都市計画区域内外で17地域に分類している。また都市中心部に当たる都市計画区域、それに隣接する地区を隣接部、さらに都市中心部から一番離れた縁辺部に分類している。

1-3-2 アンケート調査

本研究で行った団地調査の概要を記す。本調査は2009年10月から2010年10月にかけて都市計画区域の津地域、久居1地域、隣接部の一志地域にて、親の居住地との関係等を調べる事を目的に、住民を対象に訪問留置式で行ったものである。

各立地の典型例として、まとまった近年入居の見込まれる戸建住宅団地を対象に本調査を行った。対象とした団地の立地を図1-5に示す。これら対象団地は図1-3に示すように津市中心部付近から美杉地域方面に向かうように選定している。都市中心部から縁辺部に津地域、久居地域、一志地域を選定し、都市計画区域の津地域、久居地域、隣接部の一志地域の各地域の特徴を明らかにしようとしたものである。各団地の開発年度は表1-1に整理した。各地域とも古い団地と新しい団地がある。

調査票は家族票、世帯主票、配偶者票を一部として一戸につき一部配布した。表1-3に有効回収数(家族票の有効回収数を基に算出)を表した。

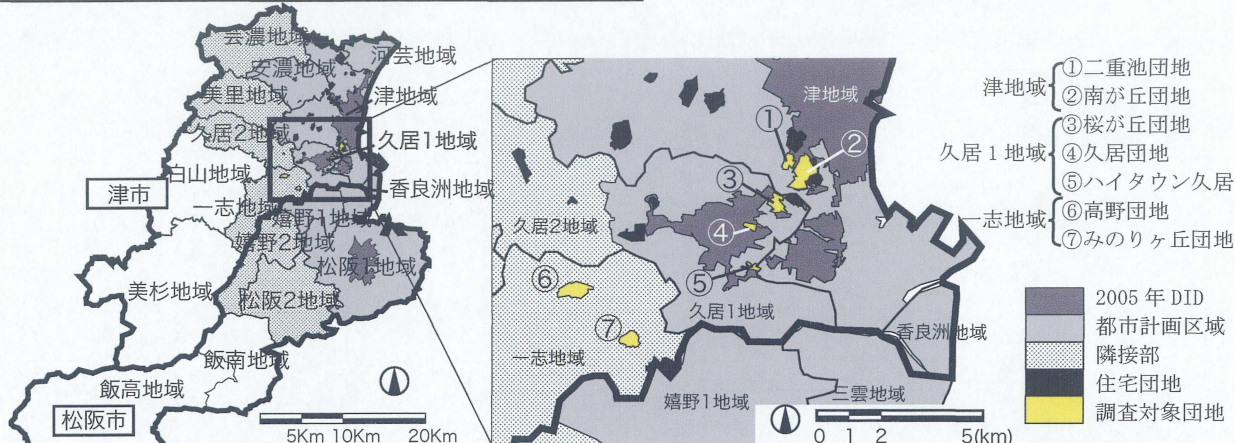
2-1 津市・松阪市の人口

2-1-1 津市の人口分布と変化

住民基本台帳のデータより津市のみに限りその人口を見ていく。表2-1に2005年末から2009年末の地域別の人口を示した。総人口は2005年末をピークに若干の減少が見られる。またその人口は都市計

表 1-1 調査概要

立地	団地名	開発年代	総戸数	配布数	回収数			回収率
					家族票	世帯主票	配偶者票	
津地域	二重池団地	1960年代	254	104	94	93	87	90%
	南が丘団地	1980年代	1087	315	292	286	273	93%
久居地域	桜が丘団地	1980年代	453	200	177	172	161	89%
	久居団地	1960年代	315	152	136	132	121	89%
	ハイタウン久居	1990年代	160	92	73	69	69	79%
一志地域	みのりヶ丘	1990年代	206	86	65	64	65	76%
	高野団地	1960年代	661	325	290	281	253	89%
計			2049	1274	1127	1097	1029	88%



画区域に約8割の人口があり、隣接部が13%、縁辺部が約7%前後で推移しており、津市の人口の大部分は都市計画区域の中にあるが、2割の人は都市計画区域外に居住している。また2009年の縁辺部の人口は2005年と比較してわずか5年の間に約1300人程度の人口が減少していることが分かる。

図2-1は2005年を基準とした人口指数を表したものである。図2-1より都市計画区域、および隣接部での人口はほぼ変化がない事が分かるが、縁辺部での人口が約93%にまでなるなど、縁辺部での人口が減少していることがよくわかる。

2-1-2 津市の高齢化率

次に津市の高齢化率に着目して分析していく。平成22年11月30日現在の住民基本台帳のデータを用いて旧市町村別の高齢化率を見ていく。旧美杉村では50%、旧白山町、旧美里村で30%以上の非常に高い高齢化率となっている。一方旧津市や旧久居市などの旧市部、またそれに隣接する旧町では高齢化率が23%であり、決して低い数値ではないものの市内においては相対的に低いといえる。

以上より、津市においては人口の8割は都市計画区域内に居住し、縁辺部の人口は1割に満たない事が分かった。また縁辺部では人口減少と高齢化が進んでおり、いわゆる過疎化の状態にある事が確認出来た。

表 2-1 各地域別の人口

	2005/12/31	2006/12/31	2007/12/31	2008/12/31	2009/12/31
都市計画区域	227,173	227,348	227,417	226,983	226,230
隣接部	37,238	37,234	37,365	37,525	37,442
縁辺部	20,147	19,772	19,350	19,022	18,765
総人口	284,558	284,354	284,132	283,530	282,437

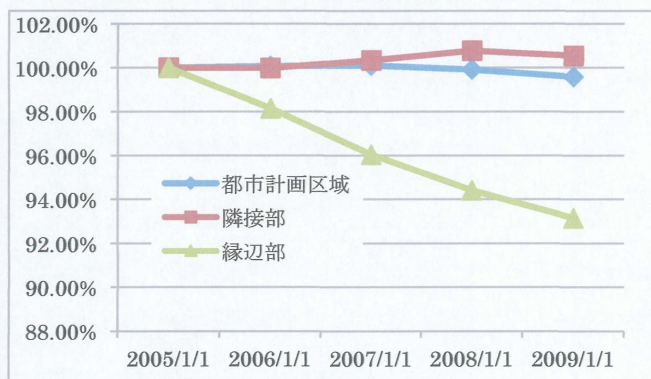


図 2-1 各地域別の人口指数

2-2 津市の人口動態

2-2-1 津市の人口動態の概要

津市における人口の移動について分析していく^{*)}。2-1では縁辺部での人口減少がみられた。本節では減少した人口はどこに行ったのかを見ていく。なおこのデータは津市内のみのデータであり、松坂市は含まれていない。津市における2006年と2007年(それぞれ1月1日～12月31日の期間)の人口の移動を表したものである。転居は津市内での移動を表し、転入は津市外から津市内への移動、転出は津市から津市外への移動を表しており、2年間の合計は61,619であった。

図2-1に移動人口の年齢層を表した。図2-1より、移動人口は20歳代、30歳代が半数以上を占めていることから移動人口の中心的な年齢層と言え、比較的に若年層の「働き手」の移動が多いと言える。

図2-2に地域別の人口移動を出発点別、帰着点別に表したものである。人口移動が最も多いのは、都市計画区域を出発点、帰着点とする移動で共に3万5千程度の移動がある事が分かる。

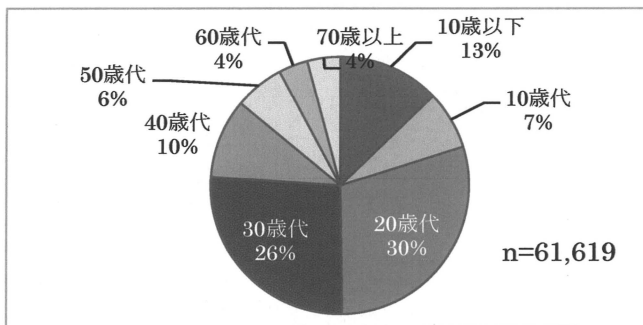


図 2-1 移動人口の年齢層

2-2-2 出発点別にみた移動先

図2-2の出発点別の移動に着目すると、都市計画区域からの移動では、津市外への移動と都市計画区域内への移動がそれぞれ半数近く、隣接部や縁辺部への移動は非常に少ない事が分かる。一方隣接部や縁辺部では、津市外への移動がそれぞれ44%、58%と半数程度あるが、各地域内への移動が2割程度である。また縁辺部に着目すると都市計画区域への移動のみではなく、隣接部への移動も8%と1割程見られ、他の地域に比べて移動先が分散していると言える。

2-2-3 帰着点別にみた移動元

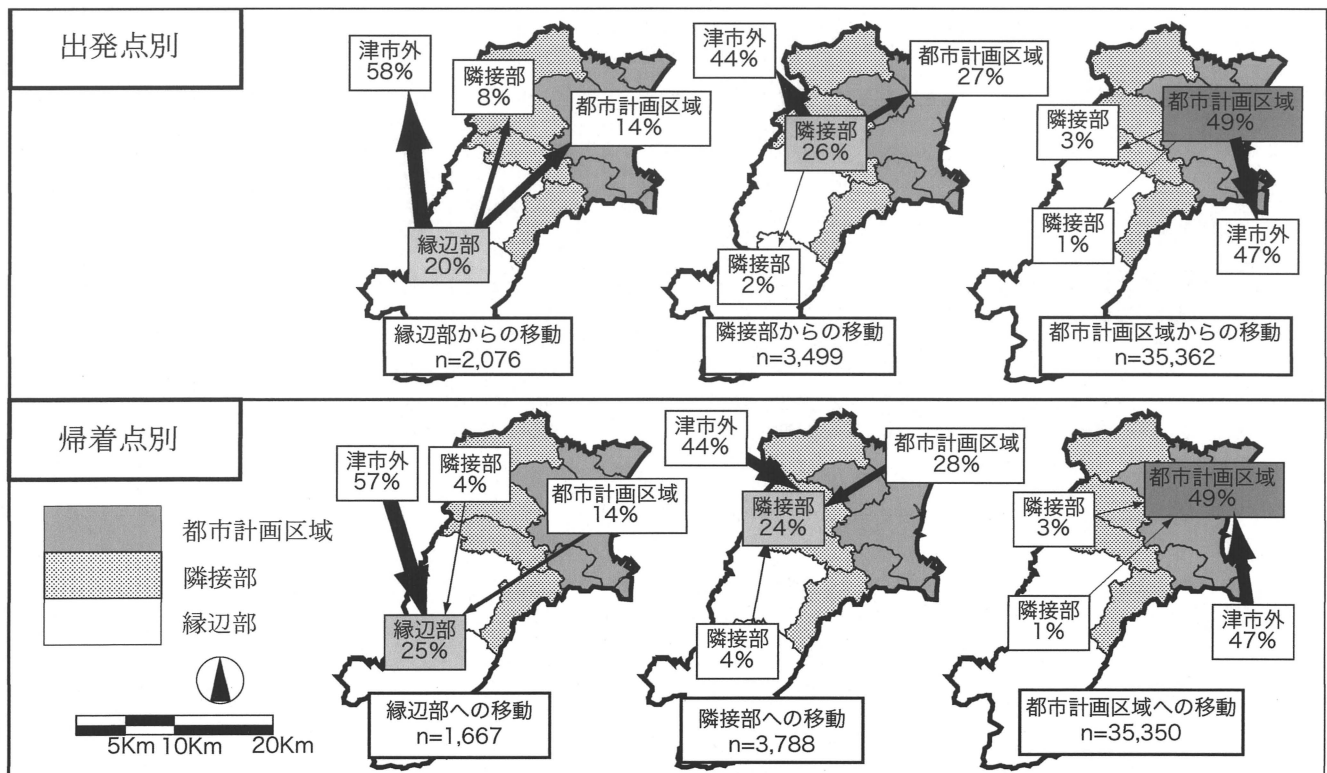
図2-2の帰着点別の移動に着目すると、各地域とも津市外からの流入が多く、縁辺部では半数以上が津市外からの流入であると言える。また都市計画区域では、同一地域内の都市計画区域からの流入も多い。一方縁辺部と隣接部では同一地域内からの流入がそれぞれ25%、26%と2割を超える程度であり、両地域とも都市計画区域からの流入も目立つ。各地域とも縁辺部からの移動の割合は少ない。

以上より、出発点別にみた縁辺部からの移動は分散的で、都市計画区域への移動ばかりでなく、縁辺部への移動も1割程あった。帰着点別にみると、各地域とも都市計画区域からの移動が目立った。

2-3 アンケート調査より前住地と年齢層の分析

2-3-1 各地域の居住者の入居時期と年齢

ここからはアンケート調査を基に各立地別に年齢層と前住地を見ていく。入居時期は表1-1に示した様に各団地ができた年代に集中している。各団地の入居時の世帯主の年齢層は表2-2に示す。表2-2より入居時の年齢層として20歳代、30歳代の世帯主の入居者が多い事が分かり、津市都市計画マスタープラン策定資料集の基礎データの移動人口の年齢層と一致すると言える。



2-3-2 前住地

図 2-2 津市の移動概要

表2-3に地域別に前住地を示し、図2-3に各立地の詳細な前住地を示した。表2-3よりどの地域でも都市計画区域からの流入が多いが、一志地域では津、久居地域に比べると都市計画区域からの流入が少ない。その一方、一志地域では隣接部からの流入が2割以上、縁辺部からの流入が1割弱みられるが、津、久居地域ではそのような地域からの流入はわずかである。図2-3より各立地の詳細な前住地を見ていく。まず都市計画区域からの流入が非常に多い津地域と久居地域に着目すると、津地域では63%が地元である津地域からの流入でありが特に目立つ。久居地域では地元である久居地域からの流入が4割程度であり3割りが津地域からの流入であり、いずれも都市計画区域であるが、津地域からの流入も目立つ。

一方一志地域では、地元である一志地域からの流入が19%となっており、隣接部からの流入はほぼ地元である一志地域からの流入である事が分かる。また津地域からの流入が22%、久居地域からの流入が19%となっており、都市計画区域内でも旧市部からの流入が目立つ。縁辺部からの流入は美杉地域の7%、白山地域の2%であり、この地域からの流入は他の地域ではわずかにしきみられず、一志地域の流入者層の特徴となっている。

津市都市計画マスタープラン策定資料集の基礎データの移動人口と比較すると津市外からの流入が少ないと言える。これは戸建住宅を対象に行ったアンケートのため短期的な移動が含まれていない

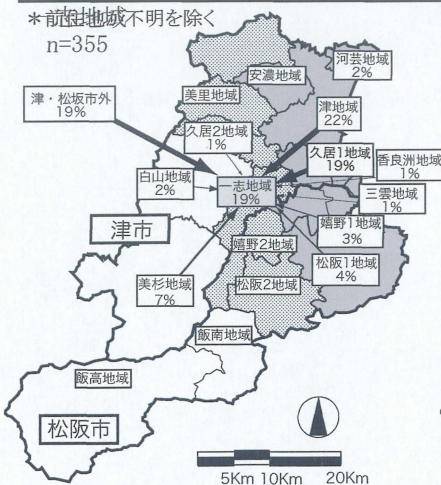
表 2-2 入居時の年齢層

	一志地域		久居地域		津地域		総計	
	高野団地	みのりヶ	ハイタウン	久居団地	桜ヶ丘団	南が丘		二重池田
～29歳	-	38%	21%	21%	16%	10%	23%	18%
30歳代	-	50%	58%	51%	42%	52%	36%	48%
40歳代	-	5%	12%	16%	27%	22%	23%	20%
50歳代	-	3%	6%	6%	11%	8%	11%	8%
60歳代	-	2%	1%	1%	2%	3%	5%	3%
70歳～	-	0%	0%	1%	0%	1%	0%	1%
不明	-	2%	3%	4%	2%	3%	1%	3%
総計	-	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
標本数	-	130	145	272	350	584	183	1664

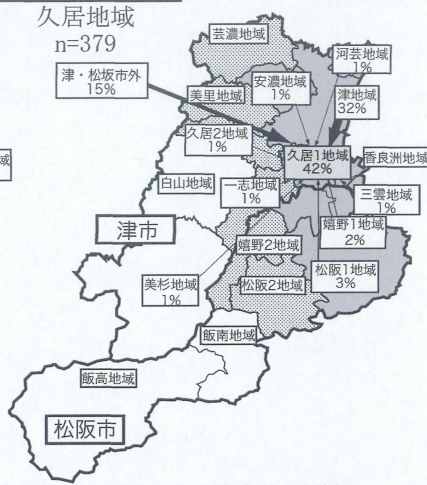
表 2-3 前住地の分類

前住地	一志地域	久居地域	津地域
	都市計画区域	52%	82%
隣接部	21%	2%	3%
縁辺部	9%	1%	1%
津・松阪市外	18%	15%	23%
総計	100%	100%	100%
標本数	355	379	384

*前住地域不明を除く
n=355



久居地域
n=379



津地域
n=384

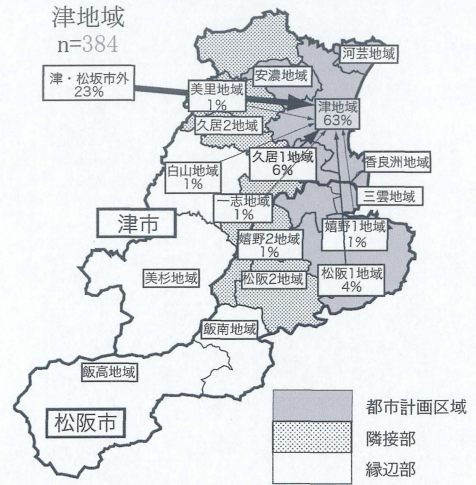


図 2-3 前住地の詳細

い。戸建住宅に入居する定住指向のある層では、総合的な判断で住宅を探す為に一時的に都市中心部に居住し、良い物件を探してから入居した層があるのではないかと考えられる。

3-1 居住者の職業

アンケートより居住者の職業をみていく。表3-1は世帯主と配偶者それぞれの入居時と現在の職業を地域別に表している。(無職こは、主婦・主夫を含む) まず世帯主を見ていくとどの地域でもサラリーマンが多く、一志地域が86%、久居地域で89%、津地域で78%となっている。また自営業や専門職を合わせるとどの地域も9割以上となる。

一方配偶者の入居时无職という人は一志地域で56%、久居地域で46%、津地域で57%と半数程度と多く、就業していた人は世帯主に比べると少ない。また、配偶者で就業していたという人の内、サラリーマンという人が多く、一志地域、一志地域で19%、久居地域で27%、津地域で24%と2割程度である事が分かる。またパート・アルバイトという人は一志地域で18%、久居地域で21%、津地域で13%となっている。

以上より、各地域の居住者像としては世帯主が主に世帯の収入を支え、配偶者が主婦等で無職であるというパターンが一番多い事が分かる。またパート・アルバイトという人も1～2割程の世帯でみられ、世帯主の収入を支えているケースも見られる。その一方で配偶者もサラリーマンや専門職として働く、「共稼ぎ世帯」は2割程度であり、調査対象とした大多数の世帯では、世帯主が主な収入を稼ぐ一般的なサラリーマン家庭が多いと言える。

表 3-1 前住地の分類

	世帯主			配偶者		
	一志地域	久居地域	津地域	一志地域	久居地域	津地域
自営業	5%	4%	5%	2%	2%	2%
サラリーマン	86%	89%	78%	19%	27%	24%
会社経営	1%	1%	2%	0%	0%	0%
医師、弁護士等の専門	2%	2%	7%	2%	1%	3%
パート・アルバイト	1%	0%	1%	18%	21%	13%
その他	2%	0%	1%	2%	0%	0%
入居时无職	3%	3%	4%	56%	46%	57%
不明	1%	1%	1%	0%	2%	0%
総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%
標本数	345	373	379	318	351	360

また以上のように、世帯主と配偶者では仕事に関する傾向が大きく異なるため以下の分析では世帯主についてのみ行う。

3-2 世帯主の勤務先

表3-2に世帯主の入居時の勤務先を表し、図3-1に津・松坂市内その勤務先を地域別に表した。表3-2の津・松坂市内である都計内、隣接部、縁辺部への通勤の合計が、一志地域で81%、久居地域で78%、津地域で73%となっており、多くの人の勤務先は津・松坂市内にある事が分かる。また久居地域や津地域では多くの人は都市計画区域内への通勤となっており、隣接部、縁辺部への通勤は少ない。一志地域では隣接部への通勤が12%みられるが、やはり都市計画区域内への通勤が65%と最も多い。図3-1をみると、各立地とも都市計画区域内の津地域への通勤が多い。津地域では62%、久居地域で54%、津地域から最も離れた一志地域でも47%と半数近くが津地域への通勤である。一方津地域と同様に都市計画区域でさらに旧市部である久居1地域への通勤は、各立地とも1割に満たない。つまり、久居地域の人も、一志地域の人も地元である地域より特に津地域への通勤が多いと言える。

3-3 通勤時間

各立地の世帯主の通勤時間を見ていく。図3-2に各立地別の世帯主の通勤時間を示した。図3-2より津地域、久居地域では通勤時間が20分以内という人がピークとなる。一方一志地域では通勤時間30分以内がピークとなり、津地域や久居地域に比べると通勤時間が長い傾向にあると言える。これほどの地域からも勤務先が津地域に

ある人が多く、その津地域から遠い一志地域からの通勤時間が長くなってしまったためと考えられる。

このように通勤時間を見ると一志地域では長めであるが、通勤時間が40分以内であると言う人は、久居地域、一志地域で8割を超えている。津地域でも78%と8割近くが40分以内で通勤できる範囲に居住している。以上の事から、毎日無理なく通勤するにはおよそ40分以内が適しており、逆にこのような場所に居住地選択を行った人が多いと言える。

4-1 親の所在地

表4-1に、各立地別の親の所在地を示し、図4-1に親の所在地を各立地別に詳細に表した。図4-1より各立地ともその立地の地元の地域に親がいるという人が多いが、特に津地域では地元である津地域に親がいるという人が多い事が分かる。また一志地域では縁辺部である美杉地域や白山地域に親がいるという人が他地域と比較すると多い事が分かる。表4-1をみると、津・松坂市内に親がいるという人は津地域で47%、久居地域で57%、一志地域で62%となっており、津地域では半数近くが、その他の地域では半数以上の人が津・松坂市内にいる事が分かる。

また同じく表4-1より、一志地域と津、久居地域では同じ津・松坂市内でもその傾向が異なる。一志地域の親の所在地は都市計画区域内が23%、隣接部が21%、縁辺部が18%となっており、それぞれの地区に約2割ずついる。しかし、都市計画区域内である久居地

表 3-2 世帯主の勤務先

		隣接部		都市計画区域	
		一志地域	久居地域	久居地域	津地域
津・松坂市内	都計内	65%	75%	72%	
	隣接部	12%	2%	0%	
	縁辺部	4%	1%	1%	
津・松坂市外	県内	14%	11%	15%	
	県外	3%	8%	9%	
自宅		1%	1%	2%	
不明		2%	1%	1%	
総計		100%	100%	100%	
標本数		335	366	364	

*無職を除く

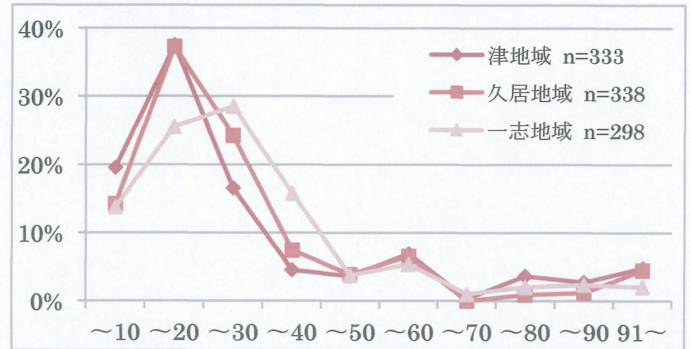


図 3-2 世帯主の通勤時間

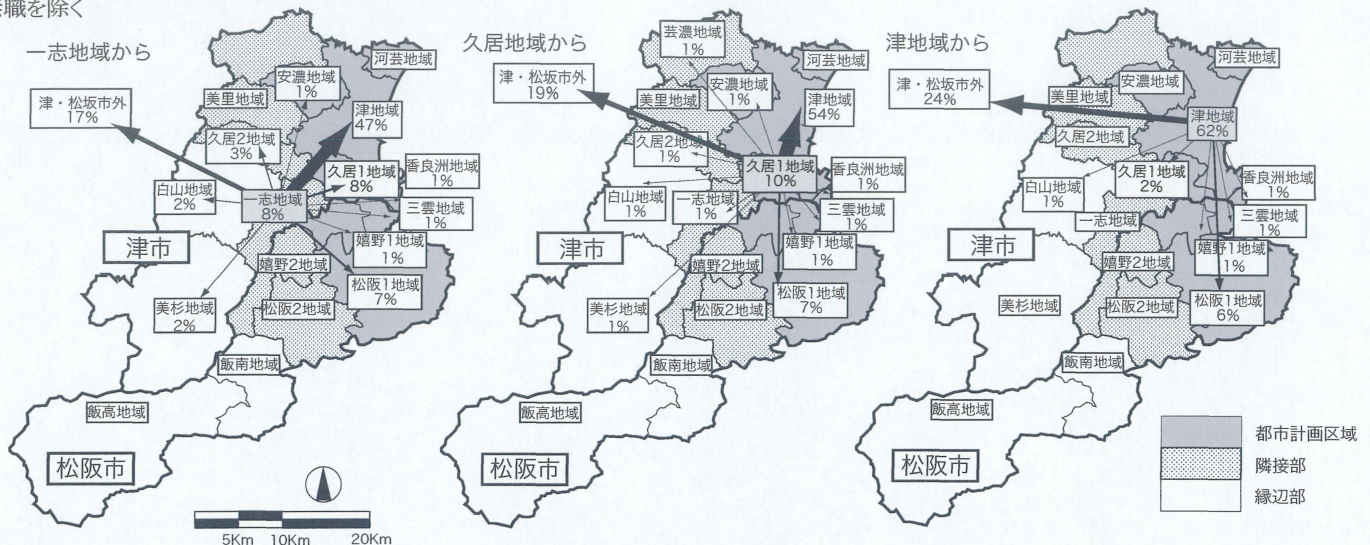


図 3-1 世帯主の職場の位置
三重大学大学院 工学研究科

域や津地域では、都市計画区域に親がいるという人が多く、それぞれ46%、40%となっているが、隣接部と縁辺部に親がいるという人は5%、3%と非常に少ない。

4-2 親世帯までの時間距離

図4-3に立地別に親の所在地別の時間距離を表した。まず図4-3の都市計画区域に親がいるという人の時間距離を見ていく。津、久居地域から都市計画区域内の親までの時間距離は10分以内が一番多く、ほとんどの人が40分以内に収まる事が分かる。一方、一志

地域からだとは30分までというところにピークがある。しかし40分以内に収まる人が多い点は津、久居地域と共通している。

次に隣接部に親がいるという人に着目すると、そのような人は一志地域に多く、また時間距離も10分以内という人が多い。一方久居地域では最も時間距離の短い人で20分、津地域では30分かかるところから、地元の地域への時間距離が短い事が分かる。

縁辺部に親がいるという人に着目すると、こちらもこのような人は一志地域に多いことが分かる。また時間距離は20分~40分までの間に多い。一方津地域と久居地域では縁辺部に親がいるという人は元々少ないが、津地域、久居地域ではその時間距離が30~60分という人が見られる。平均時間に着目すると、この立地では一志地域が一番縁辺部に近い立地と言える。

表 4-1 親の所在地

		一志地域	久居地域	津地域
津・松坂市内	都市計画区域	23%	46%	40%
	隣接部	21%	7%	4%
	縁辺部	18%	5%	3%
	津・松坂市内計	62%	57%	47%
津・松坂市外	其他三重県内	14%	22%	28%
	県外	23%	21%	25%
総計		100%	100%	100%
標本数		535	589	623

* 入居時に親が健在であり、同居、親の所在地不明を除く

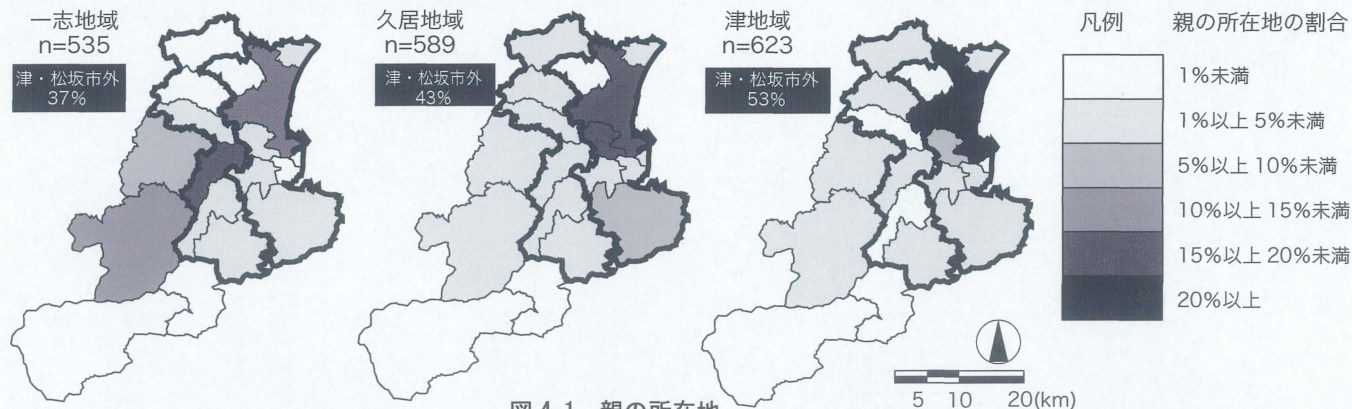
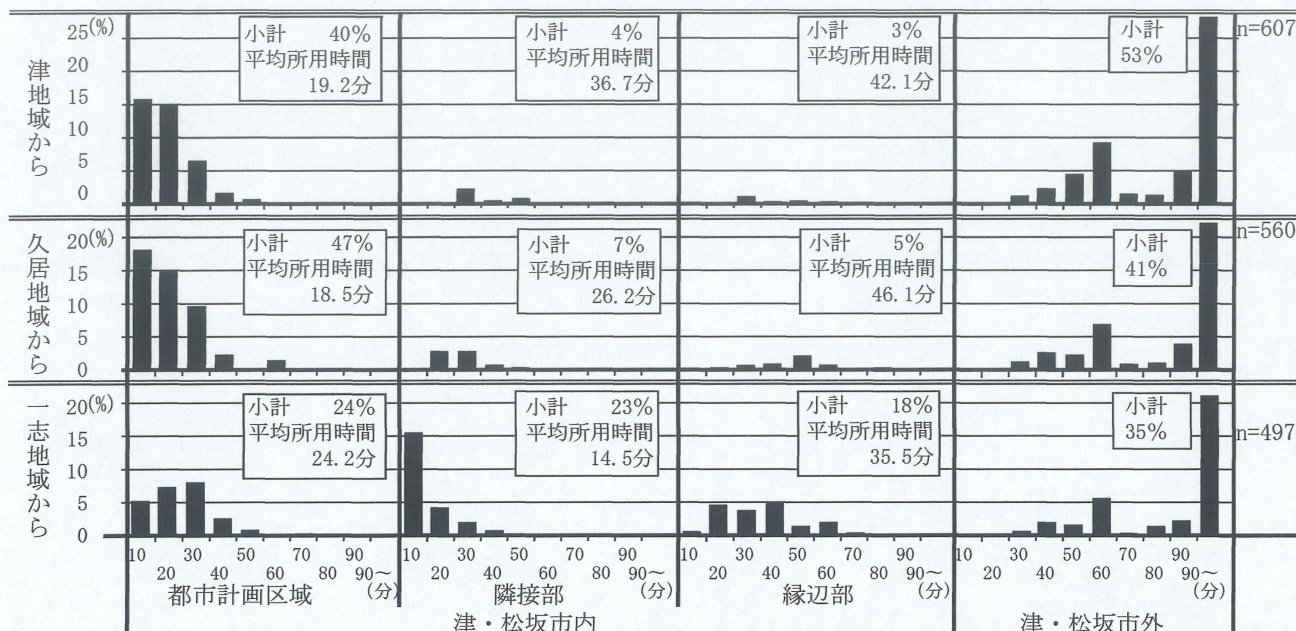


図 4-1 親の所在地



* 親が他界、同居、親までの時間距離が不明、親の所在地不明を除く

図 4-2 親までの時間距離

が限界であるといえる。

また図4-4より月数回以上という比較的交流頻度のある人は一志地域と久居地域では40分で8割を超える。津地域でも8割近い人が40分以内に居住しており、月数回以上の交流を持つ為にはお互いが40分以内に居住する事が望ましい。」

4-4-2 時間距離別の交流目的

図4-5は各交流目的をそれぞれ親世帯までの時間距離別に見たものである。図4-15左側に『精神的、季節性』を、右側には『生活支援』の項目を配置し、上から親との交流目的として多かったもの順に並べた。まず図4-5の『精神的、季節性』に関わる項目を見ていく。「孫の顔をみせるため」「両親の様子確認のため」「法事やお墓の手入れのため」という項目をみると、時間距離が長くなるにつれてこれらの項目を選択する人が増える傾向が読み取れる。時間距離が遠い関係においては、このような『精神的、季節性』に関わる交流目的が重要な項目であると言える。

次に『生活支援』の項目をみていく。図4-5に示す様にこちらの項目は選択する人がもともと少なかった。まず「差し入れの受け渡しのため」「子供の子守りをしてもらうため」「買物の送迎や買物の代行のため」の3項目に着目すると、時間距離が近い人程これらの項目を選択する人が増える傾向がある。また「病院への送迎のため」という項目でもわずかながら時間距離が近い人の方が選択する人の割合が高いと言え、これらの交流目的は時間距離が近い程行われやすいと言える。またそれ以外の項目でも、ほぼ横ばいの傾向がみられ『精神的、季節性』の項目で見られたような時間距離が長いほど選択する人の割合が増えるといった項目は見られない。

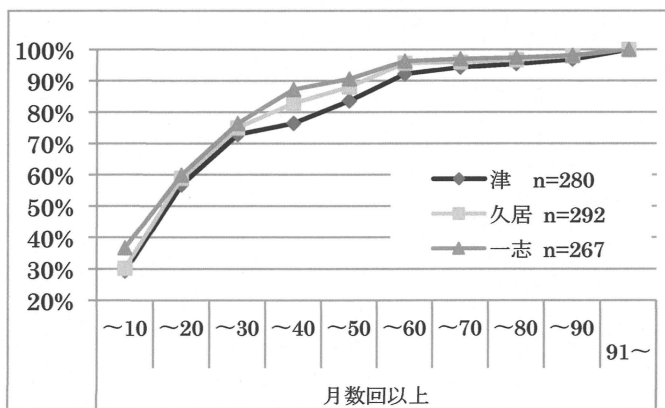


図4-4 交流頻度が月数回以上の人の時間距離の累積グラフ

以上のことから、親との交流頻度は時間距離が短い程高くなり、特に月数回以上の交流を保つ為には40分以内に居住することが望ましい。時間距離が短い程その交流目的は『生活支援』の項目を選択する人が増え、このような交流は時間距離が短い程行いやすいと言える。

5-1 居住地選択の条件

図5-1は入居条件を表している。図5-1に示すようにアンケート調査にて世帯単位に入居の条件を15項目で聞いている。また図5-1は入居の条件を全体でみた時の入居条件として多かったものを上から順に並べたものである。全体でみると、「鉄道駅に近いこと」「小中学校への近さ」を挙げる世帯が多く、「通勤の便利さ」が続く、これらの3項目では4割を超える世帯が入居条件として挙げている。またまた「価格の手頃さ」を挙げる世帯が多いことから、手頃な一

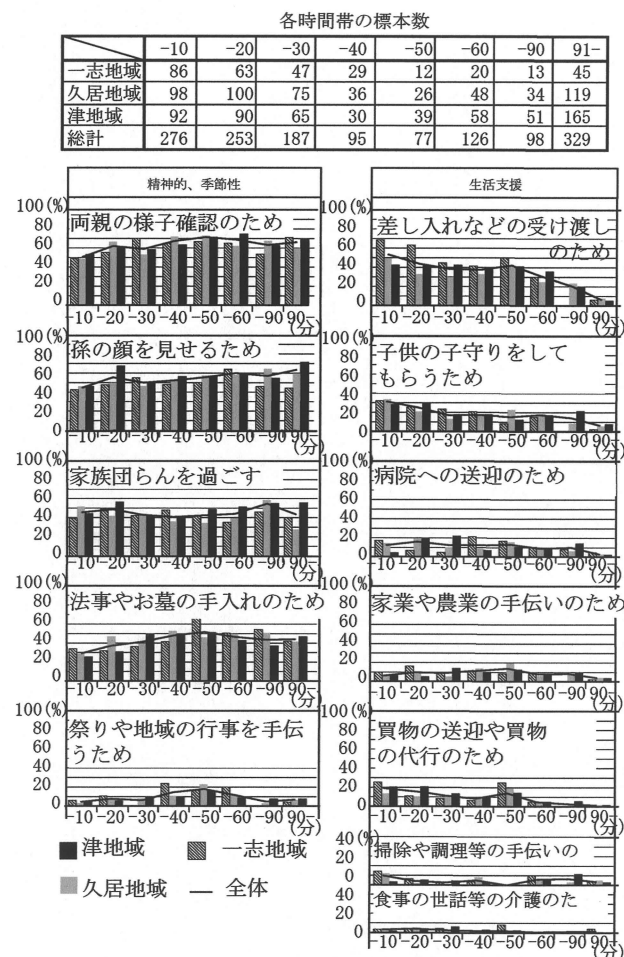


図4-5 時間距離別の交流目的

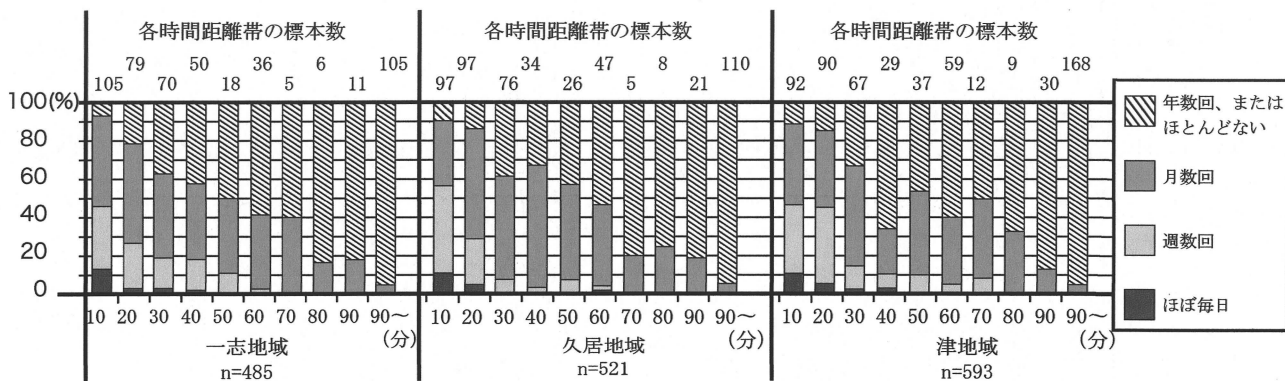


図4-3 時間距離別の親との交流頻度
三重大学大学院 工学研究科

戸建を手に入れる為という人が多い事が分かる。「世帯主、または配偶者の実家に近いこと」を挙げる世帯が全体の29%と3割近くの世帯が選択しており、重要な入居条件のひとつとなっている世帯があることが分かる。

ここで立地条件に関わる「鉄道駅に近いこと」「通勤の便利さ」をみると、3章の通勤手段で述べたように津地域と久居地域では通勤手段として鉄道の利用も目立った。「通勤の便利さ」と「鉄道駅の近さ」は重なる部分があると言え、そのことからこの2項目が一志地域に比べて高い理由であると考えられる

以上のように、立地条件によって入居条件が変わる事が分かった。本章では各地域の立地条件を、親と職場の位置関係から整理し、入居条件の内特に「世帯主、または配偶者の実家に近い」「通勤の便利さ」の2項目に着目してその関係を次節より分析していく。

5-2 親との時間距離と入居条件

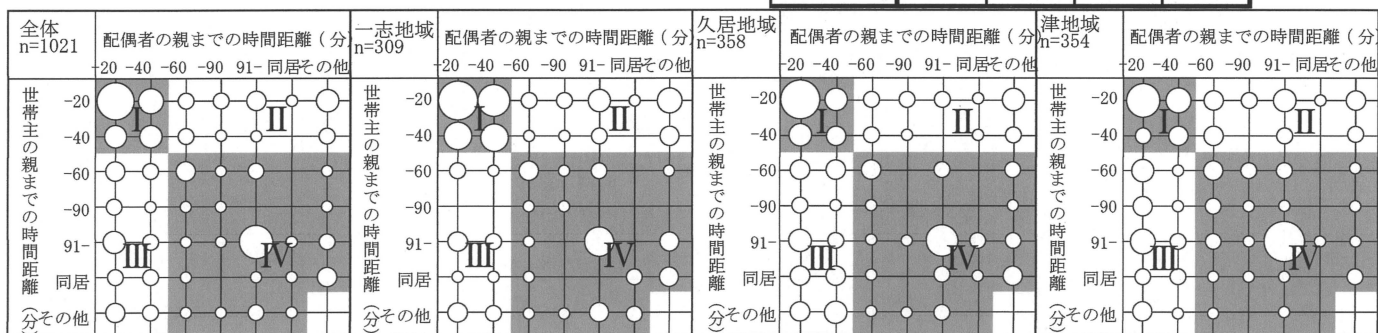
図5-2は、世帯主と配偶者の親までの時間距離をクロス集計したものを表している。世帯主、配偶者の親までの時間距離が共に40以内に居住する世帯をグループI、世帯主の親のみ40以内に居住する世帯をグループII、配偶者の親のみ40分以内に居住する世帯をグループIII、世帯主、配偶者の親が共に40分を超える場所に居

住する場合、および同居やその他の場合をグループIVと分類する。表5-1に各グループの割合を示す。世帯主、配偶者ともに40分以内に親が居住するという世帯は一志地域が3割以上と多い。しかし世帯主、配偶者の少なくともどちらかの親が40分以内に居住するという世帯は、グループI～IIIであり、これらは各地域とも6割程見られる。これらの世帯が、図5-1で「世帯主、または配偶者の実家に近いこと」を入居条件として挙げたかをみたものが、表5-2である。どの立地でもグループIで「世帯主、または配偶者の実家に近いこと」を挙げる世帯が多いことが分かる。またグループII、IIIでも同様に2～4割の世帯で入居条件として選択している。

一方、世帯主、配偶者の両方の親が40分以上の時間距離で居住しているグループIVで「世帯主、または配偶者の実家に近いこと」

表5-1 立地地域別のグループの割合

	津地域	久居地域	一志地域	総計
グループI	19%	24%	33%	25%
グループII	19%	18%	20%	19%
グループIII	24%	25%	15%	21%
グループIV	38%	34%	33%	35%
総計	100%	100%	100%	100%
標本数	354	358	309	1021



*その他には入居時に両親他界、親世帯までの時間距離不明、無効票が含まれる。但し、世帯主票、配偶者票共にその他に該当するものを除く

図5-2 世帯別の親までの時間距離

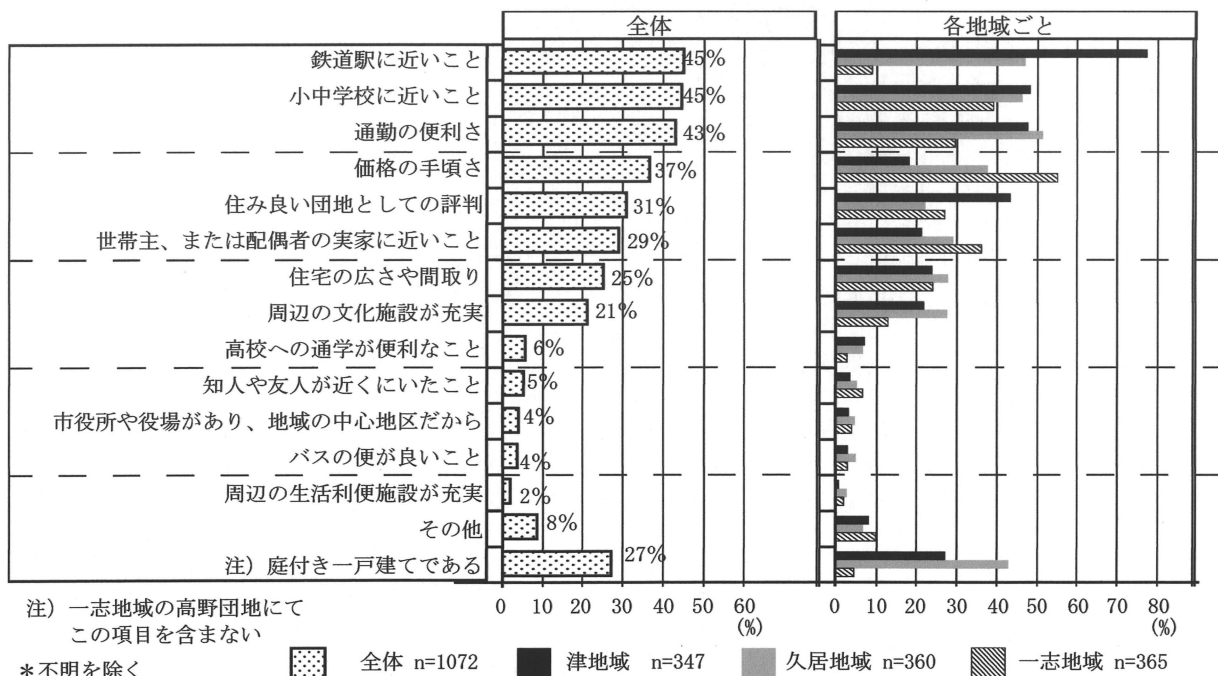


図5-1 入居条件

を条件とした世帯は1割以下である。

このことから、「世帯主、または配偶者の実家に近いこと」を入居条件とする世帯では、親との時間距離が40分以内に居住地を選択していたと言える。

5-3 職場との時間距離と入居条件

図5-3は世帯主と配偶者のそれぞれの通勤時間をクロス集計したものである。パートやアルバイトの場合、あくまで補助的な収入源としている人が多い。そのため居住地選択の条件にかなりにくいと考えられることから「パート等」にまとめて表示している。また世帯主、配偶者の通勤時間が40分以内をグループA、世帯主のみ通勤時間が40分以内をグループB、配偶者のみ通勤時間が40分以内をグループC、世帯主、配偶者ともに40分以上またはパート等、その他に該当する世帯をグループDとする。また表5-3には各グループに属する世帯数の割合を示した。また表5-3に各グループの割合を示した。図5-3および表5-3より各立地ともグループBの割合が高い事が分かる。これは3章で確認したように通勤時間が40分以内の人が多く、配偶者は主婦等で無職が多い事による。また世帯主の通勤時間が40分以内となるグループA、Bを合わせるとどの立地でも8割近くの世帯が該当する。

次にこれらの世帯で「通勤の便利さ」を入居条件としたかをみていく。表5-4は、各グループがごとに「通勤の便利さ」を入居条件としてあげた世帯の割合を示している。特に世帯主の通勤時間に着目してみると、世帯主の通勤時間が40分を超えるグループCとグループDでも、この条件を入居条件として挙げる世帯が多く、世帯主の通勤時間が40分以内のグループA、グループBと大きな差

表5-2 各グループで「世帯主、または配偶者の実家に近いこと」を選択した割合

		津地域	久居地域	一志地域	全体
グループI	割合	40%	49%	60%	51%
	標本数	67	84	101	252
グループII	割合	34%	32%	47%	37%
	標本数	67	63	60	190
グループIII	割合	26%	36%	36%	32%
	標本数	85	87	45	217
グループIV	割合	3%	9%	10%	7%
	標本数	134	121	101	356
全体	割合	22%	29%	37%	29%
	標本数	353	355	307	1015

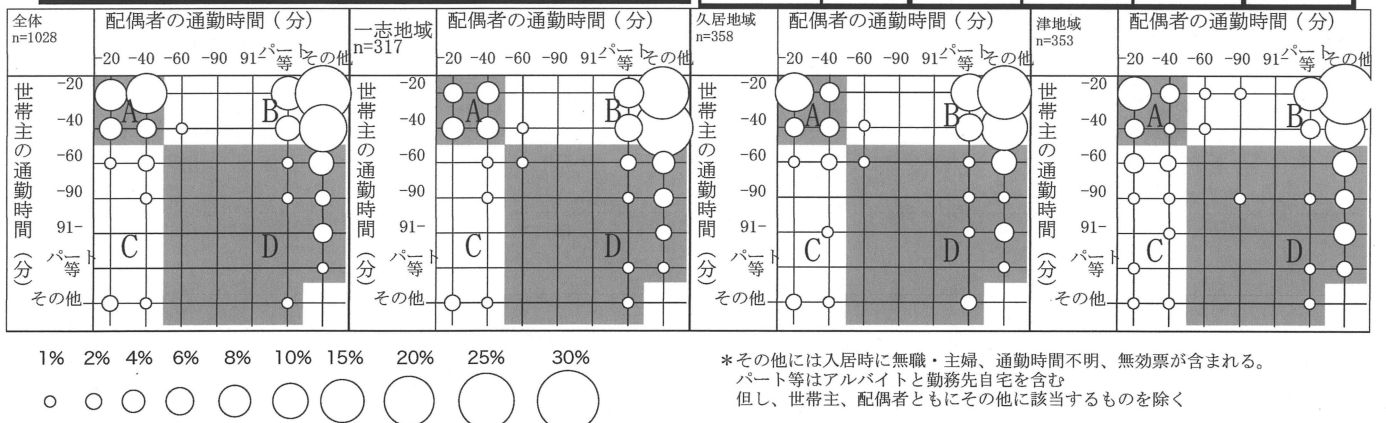


図5-3 世帯主と配偶者の通勤時間の関係

はない。これは入居条件として、どの世帯でも当然に通勤できる事を条件として居住地選択をしており、通勤時間が40分を超えても、その世帯なりの「通勤の便利さ」を考慮したものと考えられる。しかし3章で確認したように、実態としては世帯主の8割は通勤時間が40分以内の場所に居住地選択をしている事をここでも一度確認しておく。

5-4 親と職場までの時間距離と入居条件

次に親と職場の位置関係を見ていく。図5-4は図5-2で示した親との位置関係の分類と、図5-3で示した職場との位置関係の分類を用いて、職場と親との位置関係をクロス集計したものである。まず親との時間距離が近く、世帯主との通勤時間が短く職場にも両方近いことになる組み合わせをここではグループαとする。同様に世帯主の職場が近いが、親が世帯主、配偶者とおもに遠い組み合わせをグループβとする。世帯主または配偶者のどちらかの親が近く、世帯主の職場の遠い組み合わせをグループγ、親にも職場にも遠い組み合わせをグループδとする。この各グループの割合は表5-5に示した。各グループの割合を見ていくと、グループαがどの立地でも最大となる。グループαは津地域で46%と半数近く、久居地域で

表5-3 各グループの割合

	津地域	久居地域	一志地域	全体
グループA	17%	21%	16%	18%
グループB	56%	58%	62%	59%
グループC	10%	7%	6%	7%
グループD	17%	15%	16%	16%
総計	100%	100%	100%	100%
標本数	353	358	317	1028

表5-4 各グループで「通勤の便利さ」を選択した割合

		津地域	久居地域	一志地域	全体
グループA	割合	36%	51%	32%	41%
	標本数	59	73	50	182
グループB	割合	56%	51%	32%	46%
	標本数	198	207	198	603
グループC	割合	35%	52%	44%	43%
	標本数	34	25	18	77
グループD	割合	46%	42%	25%	38%
	標本数	61	50	48	159
全体	割合	45%	48%	29%	41%
	標本数	386	386	355	1127

*その他には入居時に無職・主婦、通勤時間不明、無効票が含まれる。
パート等はアルバイトと勤務先自宅を含む
但し、世帯主、配偶者ともにその他に該当するものを除く

53%、一志地域55%と半数を超える。また職場近い親との時間距離が40分以上であるグループβも各立地で25%前後と多い。

表5-4には、「世帯主、または配偶者の実家に近いこと」「通勤の便利さ」の2条件を同時に選択した世帯のグループ別の割合を示している。表5-4より、各立地ともグループα、およびグループγでこの2条件を入居条件として同時に選択する世帯が2割前後と、他のグループでは1割以下であるのと比較して多い事が分かる。この2条件を満たす居住地として、各立地の地域がそれぞれ選ばれている事が確認できた。

6 縁辺部に住む親世帯の生活支援と中心部への通勤が可能居住地という視点から見た居住地再配置のための条件

図6-1は車で時間距離圏を表したものである*。一志地域の40分の時間距離圏を見ると、津地域から縁辺部へは、白山地域の一部しかカバーできないが、一志地域からは美杉地域の一部や、白山地域の大部分へも到達する事が分かる。また一志地域に立地する高野団地をみると、40分の時間距離圏であれば津地域のほぼ全域をカバーできる事が分かる。

以上をふまえてまとめていく。まず、勤務先をみると、どの立地であっても現在の津市の中心部である津地域への通勤が多かった。しかしどの立地であっても8割程度の人お通勤時間が40分以内に収まるように居住地を選択していた。

次に、親世帯との関係を見ると、親との時間距離は40分以内であれば、交流頻度が月数回以上保て、また「ほぼ毎日」といった交流も可能である。また交流内容は、時間距離が短い程『生活支援』も行われているという事が分かった。

このことから職住近接と親子近居が両立させることのできる条件として、通勤時間が40分以内、親世帯までの時間距離40分以内であると言える。

ここで親が縁辺部にいる場合に注目していくと、図6-1で示したように、本事例では一志地域がこの条件を満たせる立地であると言える。また実際に一志地域では、親が縁辺部に居住するという人が他の立地と比較して多く、その時間距離も40分以内に収まる人が多かった。本事例の場合、縁辺部に居住する親との親子近居と、津市中心部への通勤の両立が可能なのは、一志地域であると言える。

地方の広域合併都市の居住地再編を考慮すると、都市計画区域内のみで考えるのではなく、市域全体からこのような生活の実態を考慮した居住地の再配置の条件として求められる。

*1 国立社会保障・人口問題研究所（2006年12月推計）

*2 総務省 市町村合併資料

(<http://www.soumu.go.jp/gapei/gapei.html>)

*3 金貞均、近江隆（1994）「現代家族の分散居住の実態と居住ネットワークの形成」日本建築学会計画系論文集 第456号 pp209-216

*4 津市都市計画マスタープラン策定のための資料より

*5 ゼンリン電子地図帳 Zi10 の経路探索機能を用いて作成

表 5-3 各グループの割合

	津地域	久居地域	一志地域	全体
α	46%	53%	55%	51%
β	27%	26%	24%	26%
γ	17%	15%	15%	16%
δ	10%	6%	7%	8%

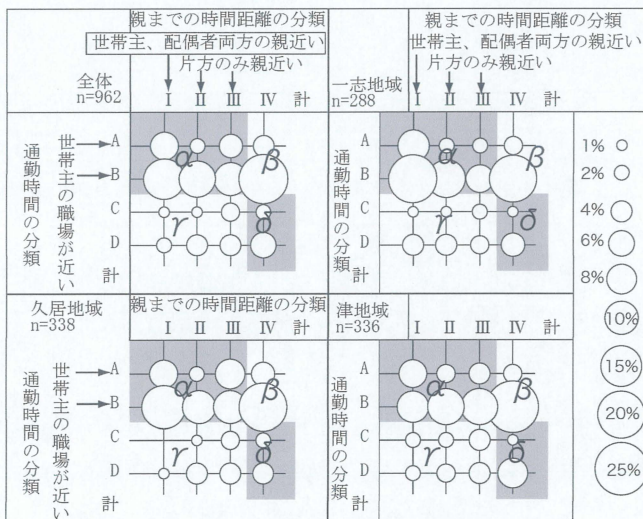


表 5-3 職場と親の位置関係

表 5-4 各グループで「世帯主、または配偶者の実家に近いこと」「通勤の便利さ」の2条件を同時に選択した世帯の割合

	α				β			
	津地域	久居地域	一志地域	総計	津地域	久居地域	一志地域	総計
2条件を両方選択	19%	24%	16%	20%	2%	7%	0%	3%
標本数	155	179	157	491	91	87	69	247
	γ				δ			
	津地域	久居地域	一志地域	総計	津地域	久居地域	一志地域	総計
2条件を両方選択	18%	29%	20%	22%	6%	10%	0%	5%
標本数	57	48	41	146	32	21	20	73

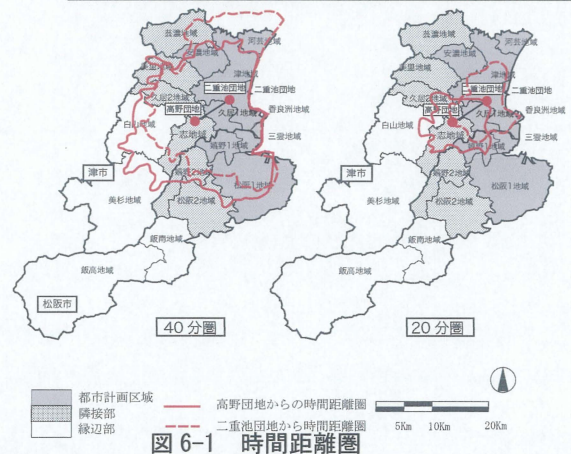


図 6-1 時間距離圏

親と職場の位置関係に配慮した住居計画に関する

2010年10月

三重大学工学部建築学科都市計画研究室

家族用

1-1 現在のお住まいについてお聞きします。

所有関係、住宅の広さ*、敷地の広さ*、入居時期、入手方法は下のどれですか？ *注 10坪 = 約 33㎡

<1、所有関係>	<2、住宅の広さ>	<3、敷地の広さ>	<4、入居時期>	<5、入手方法>
1、持ち家	1、～29坪	1、～49坪	1、1979年以前	1、宅地を購入し、新築
2、借家	2、30～39坪	2、50～59坪	2、1980年代	2、新築の建売住宅を購入
3、その他	3、40～49坪	3、60～69坪	3、1990年代	3、中古住宅を購入
	4、50～59坪	4、70～79坪	4、2000年以降	4、中古住宅購入後、建替え
	5、60坪～	5、80～		5、借家している

1-2 入居時のご家族についてお聞きします。入居時の世帯主の立場でお答えください。

入居当時に同居していた家族を下記からすべて選び○をつけて下さい。またご自身を含めて何人で暮らしていましたか？

人数の合計を回答欄右下の○にご記入ください。

1 世帯主	4 世帯主の父	7 配偶者の母	10 その他 ()
2 配偶者	5 世帯主の母	8 子の配偶者	
3 子 () 人	6 配偶者の父	9 子の子供 (孫)	■合計 () 人暮らし

1-3 入居時の世帯主の年齢は下のどれでしたか？

1. ～29歳	3. 40歳代	5. 60歳代
2. 30歳代	4. 50歳代	6. 70歳代

1-4 入居時の配偶者の年齢は下のどれでしたか？

1. ～29歳	3. 40歳代	5. 60歳代
2. 30歳代	4. 50歳代	6. 70歳以上

1-5 現在のご家族についてお聞きします。

現在同居している家族を下記からすべて選んで下さい。またご自身を含めて何人で暮らしていますか？

人数の合計を回答欄右下にご記入ください。

1 世帯主	4 世帯主の父	7 配偶者の母	10 その他 ()
2 配偶者	5 世帯主の母	8 子の配偶者	
3 子 () 人	6 配偶者の父	9 子の子供 (孫)	■合計 () 人暮らし

1-6 現在の世帯主の年齢は下のどれですか？

1. ～29歳	3. 40歳代	5. 60歳代
2. 30歳代	4. 50歳代	6. 70歳代

1-7 現在の配偶者の年齢は下のどれですか？

1. ～29歳	3. 40歳代	5. 60歳代
2. 30歳代	4. 50歳代	6. 70歳代

1-8 現在のお住まいに入居する前はどこに住んでいましたか？

付属の地図より選び、該当する番号に○をつけて下さい。

現在の津・松坂市外で三重県内の方は市町村名、県外の方は県名を記入して下さい。

1. 津	4. 松阪1	7. 嬉野1	10. 美杉	13. 河芸	16. 安濃	19. その他三重県内 () 市町村
2. 久居1	5. 松阪2	8. 嬉野2	11. 三雲	14. 芸濃	17. 飯南	20. 県外 () 県
3. 久居2	6. 一志	9. 白山	12. 香良州	15. 美里	18. 飯高	

1-9 現在のお住まいに入居する前の住宅は次のどれでしたか？

1. 世帯主の実家	4. 公団住宅	7. 民間賃貸マンション・アパート	10. その他 ()
2. 配偶者の実家	5. 公営住宅	8. 民間戸建借家	
3. 持ち家	6. 分譲マンション	9. 社宅	

裏面もごさいますので協力お願いします

1-10 現在の住宅に入居された際、重視した条件はなんですか？

あてはまるものすべてに○をつけ、そのうち最も重視したものの1つに◎をつけてください。

1、価格の手頃さ	8、小学校あるいは中学校に近いこと
2、世帯主、または配偶者の実家に近いこと	9、高校への通学が便利なこと
3、知人や友人が近くにいたこと	10、鉄道駅に近いこと
4、通勤の便利さ	11、バスの便が良いこと
5、周辺的生活利便施設(買物やお医者さん等)の便利さ	12、住宅の広さや間取り
6、周辺の文化施設(図書館、運動施設)が充実	13、庭付き一戸建てである
7、市役所や役場があり、地域の中心地区だから	14、住み良い団地としての評判
	15、その他()

1-11 現在の場所に住まいを決める際に、ご両親のお住まいに近い事を考慮しましたか？

当時の状況でお答えください。また考慮した方は世帯主、配偶者のどちらのご両親ですか？

1. はい、考慮しました	→ 1、世帯主のご両親 2、配偶者のご両親 3、両方
2. はい、少し考慮しました	
3. いいえ、考慮していません	

1-12 現在のお住まいに引っ越すことにより、ご両親の家に近くなりましたか？

世帯主、配偶者それぞれお答えください。

世帯主のご両親	→ 1、近くなった	2、遠くなった	3、引っ越しを期に同居することになった	4、変わらない
配偶者のご両親	→ 1、近くなった	2、遠くなった	3、引っ越しを期に同居することになった	4、変わらない

1-13 今の団地を総合的に考えると、住みやすさに満足していますか？

1、かなり満足	2、やや満足	3、どちらとも言えない	4、やや不満	5、かなり不満
---------	--------	-------------	--------	---------

1-14 現在の家に住み続けたいと思いますか？

1、住み続けたい	2、引っ越したい	3、分からない
----------	----------	---------

1-15 上記質問で1、住み続けたい と答えた方にお聞きします。

その理由は次のどれにあてはまりますか？当てはまるものすべてに○をつけて下さい

1、市役所・役場や図書館などが近く、便利だから	7、親族などが近くにおり、安心感がある
2、鉄道駅が近く便利だから	8、親の住まいに近く、親の世話をしやすいから
3、バスの便が良いから	9、子供が近くに住んでいるので行き来しやすいから
4、買物やお医者などの生活利便施設が近くにあるから	10、通勤や仕事に都合が良いから
5、団地内に知り合いが多いから	11、年齢や経済的に引っ越すのは不可能
6、この団地に愛着があるから	12、その他()

1-16 今の住宅を将来どのようにしますか？

1、こどもが住み続ける	3、売る予定
2、こどもに相続するが、住むか分からない	4、分からない

3 世帯主の方にお聞きします。(入居時に世帯主だった方の立場からお答えください)

3-1 現在のお住まいに入居した時と、現在のあなたの職業をお答えください。

それぞれを右下の選択肢から選び、回答欄に記号を記入して下さい。

回答欄	1、自営業	4、医師、弁護士等の専門職	7、その他
入居時 () ←	2、サラリーマン・公務員	5、パート・アルバイト	
現在 ()	3、会社経営	6、無職	

3-2 入居時のあなたの勤務先はどこでしたか？

付属の地図よりお選び下さい。なお自営業など勤務先が自宅の方は「21. 自宅」を、無職の方は「22. 無職」を選択して下さい。またそこまでの交通手段、所要時間、距離の感じ方、をお答えください？

1、勤務地						
1. 津	4. 松阪1	7. 嬉野1	10. 美杉	13. 河芸	16. 安濃	19. その他三重県内 () 市町村
2. 久居1	5. 松阪2	8. 嬉野2	11. 三雲	14. 芸濃	17. 飯南	20. 県外 () 県
3. 久居2	6. 一志	9. 白山	12. 香良州	15. 美里	18. 飯高	21. 自宅 22. 無職
2 交通手段			3 所用時間		4 距離の感じ方	
複数ある場合は移動距離の長いもの。			片道、約 () 分		1、かなり近いと感じる	
1. 徒歩	4. マイカー	7. その他 ()			2、近いと感じる	
2. 自転車	5. バス				3、遠いと感じる	
3. バイク	6. 電車				4、かなり遠いと感じる	

3-3 現在の勤務地は入居当時から変わりましたか？

1. 同じ	2. 現在は無職	3. 変わった --- ↓
-------	----------	---------------

■変わった方は現在の勤務地についてもご記入下さい。

1、勤務地						
1. 津	4. 松阪1	7. 嬉野1	10. 美杉	13. 河芸	16. 安濃	19. その他三重県内 () 市町村
2. 久居1	5. 松阪2	8. 嬉野2	11. 三雲	14. 芸濃	17. 飯南	20. 県外 () 県
3. 久居2	6. 一志	9. 白山	12. 香良州	15. 美里	18. 飯高	21. 自宅 22. 無職
2 交通手段			4 所用時間		距離の感じ方	
複数ある場合は移動距離の長いもの。			片道、約 () 分		1、かなり近いと感じる	
1. 徒歩	4. マイカー	7. その他 ()			2、近いと感じる	
2. 自転車	5. バス				3、遠いと感じる	
3. バイク	6. 電車				4、かなり遠いと感じる	

3-4 入居当時 あなたのご両親はご健在でしたか？

1、はい	2、はい(父親のみ)	3、はい(母親のみ)	4、いいえ→これで終了です
------	------------	------------	---------------

3-5 入居当時のあなたのご両親のお住まいとそこへの訪問についてお聞きします。

あなたのご両親の居住地を選んで下さい。また両親までの交通手段、訪問頻度、所要時間、その距離をどう感じるか、を次よりお選び下さい。なおご両親と一緒に入居して、同居していた場合は、22. 同居のみに○をつけて下さい。

居住地						
1. 津	4. 松阪1	7. 嬉野1	10. 美杉	13. 河芸	16. 安濃	19. その他三重県内 () 市町村
2. 久居1	5. 松阪2	8. 嬉野2	11. 三雲	14. 芸濃	17. 飯南	20. 県外 () 県
3. 久居2	6. 一志	9. 白山	12. 香良州	15. 美里	18. 飯高	21. 団地内 22. 同居
交通手段			訪問の頻度		所用時間	
複数ある場合は移動距離の長いもの。			1. ほぼ毎日		片道、約 () 分	
1. 徒歩	4. マイカー	7. その他 ()	2. 週に1回以上			
2. 自転車	5. バス		3. 月に2~3回			
3. バイク	6. 電車		4. 年に数回			
			5. ほとんどない			
					2、近いと感じる	
					3、遠いと感じる	
					4、かなり遠いと感じる	

裏面もごさいますのでご協力お願いします

3-6 入居時にご両親が健在の方(片親のみ健在を含む)にお聞きします。

入居当時、あなたがご両親を訪問したり、ご両親が来られる時の交流内容はどのようになっていますか？
交流内容として当てはまるものすべてに○をつけて下さい。

1. 病院への送迎のため	8. 両親の様子確認のため
2. 掃除・洗濯や、調理等の手伝いのため	9. 孫の顔を見せるため
3. 食事の世話等の介護のため	10. 子供の子守りをしてもらうため
4. 買物の送迎や買物の代行のため	11. 差し入れなどの受け渡しのため
5. 家業や農業の手伝いのため	12. 祭りや地域の行事等を手伝うため
6. 家族団らんを過ごすため	13. その他()
7. 法事やお墓の手入れのため	

3-6 現在、あなたのご両親はご健在ですか？

1. はい	2. はい(父親のみ)	3. はい(母親のみ)	4. いいえ→これで終了です
-------	-------------	-------------	----------------

3-7 入居当時からご両親のお住まいは変わりましたか？

同じ敷地での建替えは、「1. 同じ」を選択して下さい。また同居することになった場合は 22. 同居に○をつけて下さい。

1. 同じ	2. 変わった
-------	---------

■ 変わった方は、現在の居住地をご記入ください。

居住地							
1. 津	4. 松阪1	7. 嬉野1	10. 美杉	13. 河芸	16. 安濃	19. その他三重県内()市町村	
2. 久居1	5. 松阪2	8. 嬉野2	11. 三雲	14. 芸濃	17. 飯南	20. 県外()県	
3. 久居2	6. 一志	9. 白山	12. 香良州	15. 美里	18. 飯高	21. 団地内	22. 同居
交通手段		訪問の頻度		所用時間		距離の感じ方	
複数ある場合は移動距離の長いもの。		1. ほぼ毎日		片道、約()分		1. かなり近いと感じる	
1. 徒歩		2. 週に1回以上				2. 近いと感じる	
2. 自転車		3. 月に2~3回				3. 遠いと感じる	
3. バイク		4. 年に数回				4. かなり遠いと感じる	
4. マイカー		5. ほとんどない					
7. その他()							
6. 電車							

3-8 現在にご両親が健在の方(片親のみ健在を含む)にお聞きします。

現在、あなたがご両親を訪問したり、ご両親が来られる時の交流内容はどのようになっていますか？
交流内容として当てはまるものすべてに○をつけて下さい。

1. 病院への送迎のため	8. 両親の様子確認のため
2. 掃除・洗濯や、調理等の手伝いのため	9. 孫の顔を見せるため
3. 食事の世話等の介護のため	10. 子供の子守りをしてもらうため
4. 買物の送迎や買物の代行のため	11. 差し入れなどの受け渡しのため
5. 家業や農業の手伝いのため	12. 祭りや地域の行事等を手伝うため
6. 家族団らんを過ごすため	13. その他()
7. 法事やお墓の手入れのため	

3-9 ご両親が健在(片親のみ健在の方も)の方に、ご両親の住宅についてお聞きします。

ご両親はどのようにして暮らしておられますか？

1. 同居している	4. 老人ホーム等の福祉施設に入所している
2. ご両親のみで独立して居住している	5. 病院等の医療施設に入院中
3. 兄弟などの親族と同居している	6. その他

3-10 ご両親が健在(片親のみ健在も含む)で、ご両親と別居されている方にお聞きします。

将来的にその住宅(実家)はどのようにする予定ですか？

1. 自分が相続し、所有するが住む予定はない	5. 兄弟等の親族が相続する等して、親族が入居する
2. 自分が相続し、いつかそこに住むつもり	6. 兄弟等の親族が相続するが、住む予定はない
3. 自分が相続し、中古住宅として売る	7. その他()
4. 自分が相続し、貸家とする	8. 分からない

配偶者用

4 配偶者の方にお聞きします。(入居時に配偶者だった方の立場からお答えください)

4-1 現在のお住まいに入居した時と、現在のあなたの職業をお答えください。

それぞれを右下の選択肢から選び、回答欄に記号を記入して下さい。

回答欄	1. 自営業	4. 医師、弁護士等の専門職	7. その他
入居時 () ←	2. サラリーマン・公務員	5. パート・アルバイト	
現在 ()	3. 会社経営	6. 無職	

4-2 **入居時**のあなたの勤務先はどこでしたか？

付属の地図よりお選び下さい。なお自営業など勤務先が自宅の方は「21. 自宅」を、無職の方は「22. 無職」を選択して下さい。またそこまでの交通手段、所要時間をお答えください？

1. 勤務地						
1. 津	4. 松阪 1	7. 嬉野 1	10. 美杉	13. 河芸	16. 安濃	19. その他三重県内 () 市町村
2. 久居 1	5. 松阪 2	8. 嬉野 2	11. 三雲	14. 芸濃	17. 飯南	20. 県外 () 県
3. 久居 2	6. 一志	9. 白山	12. 香良州	15. 美里	18. 飯高	21. 自宅 22. 無職
2 交通手段			4 所用時間		距離の感じ方	
複数ある場合は移動距離の長いもの。						
1. 徒歩	4. マイカー	7. その他 ()	片道、約 () 分		1. かなり近いと感じる	
2. 自転車	5. バス				2. 近いと感じる	
3. バイク	6. 電車				3. 遠いと感じる	
					4. かなり遠いと感じる	

4-3 **現在**の勤務地は入居当時から変わりましたか？

1. 同じ	2. 現在は無職	3. 変わった --- ↓
-------	----------	---------------

■変わった方は現在の勤務地についてもご記入下さい。

1. 勤務地						
1. 津	4. 松阪 1	7. 嬉野 1	10. 美杉	13. 河芸	16. 安濃	19. その他三重県内 () 市町村
2. 久居 1	5. 松阪 2	8. 嬉野 2	11. 三雲	14. 芸濃	17. 飯南	20. 県外 () 県
3. 久居 2	6. 一志	9. 白山	12. 香良州	15. 美里	18. 飯高	21. 自宅 22. 無職
2 交通手段			3 所用時間		4 距離の感じ方	
複数ある場合は移動距離の長いもの。						
1. 徒歩	4. マイカー	7. その他 ()	片道、約 () 分		1. かなり近いと感じる	
2. 自転車	5. バス				2. 近いと感じる	
3. バイク	6. 電車				3. 遠いと感じる	
					4. かなり遠いと感じる	

4-4 **入居当時** あなたの両親はご健在でしたか？

1. はい	2. はい(父親のみ)	3. はい(母親のみ)	4. いいえ→これで終了です
-------	-------------	-------------	----------------

4-5 **入居当時**のあなたのご両親のお住まいとそこへの訪問についてお聞きします。

あなたのご両親の居住地を選んで下さい。また両親までの交通手段、訪問頻度、所要時間を次よりお選び下さい。

なおご両親と一緒に入居して、同居していた場合は、22. 同居のみに○をつけて下さい。

居住地						
1. 津	4. 松阪 1	7. 嬉野 1	10. 美杉	13. 河芸	16. 安濃	19. その他三重県内 () 市町村
2. 久居 1	5. 松阪 2	8. 嬉野 2	11. 三雲	14. 芸濃	17. 飯南	20. 県外 () 県
3. 久居 2	6. 一志	9. 白山	12. 香良州	15. 美里	18. 飯高	21. 団地内 22. 同居
交通手段			訪問の頻度		所用時間	
複数ある場合は移動距離の長いもの。						
1. 徒歩	4. マイカー	7. その他 ()	1. ほぼ毎日		片道、約 () 分	
2. 自転車	5. バス		2. 週に1回以上			
3. バイク	6. 電車		3. 月に2~3回			
			4. 年に数回			
			5. ほとんどない			
					1. かなり近いと感じる	
					2. 近いと感じる	
					3. 遠いと感じる	
					4. かなり遠いと感じる	

裏面もご協力をお願いします

4-6 入居時にご両親が健在の方 (片親のみ健在を含む) にお聞きします。

入居当時、あなたがご両親を訪問したり、ご両親が来られる時の交流内容はどのようになっていますか？

交流内容として当てはまるものすべてに○をつけて下さい。

1. 病院への送迎のため	8. 両親の様子確認のため
2. 掃除・洗濯や、調理等の手伝いのため	9. 孫の顔を見せるため
3. 食事の世話等の介護のため	10. 子供の子守りをしてもらうため
4. 買物の送迎や買物の代行のため	11. 差し入れなどの受け渡しのため
5. 家業や農業の手伝いのため	12. 祭りや地域の行事を手伝うため
6. 家族団らんを過ごすため	13. その他 ()
7. 法事やお墓の手入れのため	

4-6 現在、あなたのご両親はご健在ですか？

1. はい	2. はい (父親のみ)	3. はい (母親のみ)	4. いいえ→これで終了です
-------	--------------	--------------	----------------

4-7 入居当時からご両親のお住まいは変わりましたか？

同じ敷地での建替えは、「1. 同じ」を選択して下さい。また同居することになった場合は 22. 同居に○をつけて下さい。

1. 同じ	2. 変わった -----
-------	---------------

■ 変わった方は、現在の居住地をご記入ください。

居住地							
1. 津	4. 松阪 1	7. 嬉野 1	10. 美杉	13. 河芸	16. 安濃	19. その他三重県内 () 市町村	
2. 久居 1	5. 松阪 2	8. 嬉野 2	11. 三雲	14. 芸濃	17. 飯南	20. 県外 () 県	
3. 久居 2	6. 一志	9. 白山	12. 香良州	15. 美里	18. 飯高	21. 団地内	22. 同居
交通手段		訪問の頻度	所用時間	距離の感じ方			
複数ある場合は移動距離の長いもの。		1. ほぼ毎日	片道、約 () 分	1. かなり近いと感じる			
1. 徒歩	4. マイカー	7. その他 ()		2. 近いと感じる			
2. 自転車	5. バス			3. 遠いと感じる			
3. バイク	6. 電車			4. かなり遠いと感じる			

4-8 現在にご両親が健在の方 (片親のみ健在を含む) にお聞きします。

現在、あなたがご両親を訪問したり、ご両親が来られる時の交流内容はどのようになっていますか？

交流内容として当てはまるものすべてに○をつけて下さい。

1. 病院への送迎のため	8. 両親の様子確認のため
2. 掃除・洗濯や、調理等の手伝いのため	9. 孫の顔を見せるため
3. 食事の世話等の介護のため	10. 子供の子守りをしてもらうため
4. 買物の送迎や買物の代行のため	11. 差し入れなどの受け渡しのため
5. 家業や農業の手伝いのため	12. 祭りや地域の行事を手伝うため
6. 家族団らんを過ごすため	13. その他 ()
7. 法事やお墓の手入れのため	

4-9 ご両親が健在 (片親のみ健在の方も) の方に、ご両親の住宅についてお聞きします。

ご両親はどのようにして暮らしておられますか？

1. 同居している	4. 老人ホーム等の福祉施設に入所している
2. ご両親のみで独立して居住している	5. 病院等の医療施設に入院中
3. 兄弟などの親族と同居している	6. その他

4-10 ご両親が健在 (片親のみ健在も含む) で、ご両親と別居されている方にお聞きします。

将来的にその住宅 (実家) はどのようにする予定ですか？

1. 自分が相続し、所有するが住む予定はない	5. 兄弟等の親族が相続する等して、親族が入居する
2. 自分が相続し、いつかそこに住むつもり	6. 兄弟等の親族が相続するが、住む予定はない
3. 自分が相続し、中古住宅として売る	7. その他 ()
4. 自分が相続し、貸家とする	8. 分からない

謝辞

本研究において、浦山益郎教授ならびに松浦健治郎助教のご教授に対して心から感謝の意を表します。浦山研究室 OB の永谷太郎さんには学部時代にエクセルの指導をいただき誠に有難う御座います。同期の小野君、地域イノベーション研究科の川島君には、ゼミ中にご助言を頂き、研究を深める事ができました。ありがとうございます。後輩の M1、飛田君、松田君には、研究室の運営等をしっかりやっていただき、研究に専念できる環境を作っていただきました。またアンケート配布に協力して頂いた同期の方、M1の方、4年生の、稲垣君、稲見さん、西原君、浅野研究室の、北川君、東條君、嶋津君、富岡研究室の石黒君、松田君、花里研究室の中谷さん、そして浦山研 OB の伴君、守屋君、本当に多くの方に感謝致します。そして、本研究の趣旨を理解し快く協力して頂いた、調査対象者の皆様に心から感謝します。本当にありがとうございました。

2011年3月上旬

三重大学大学院工学研究科建築学専攻 浦山研究室

鈴木 悠平